2 〔**遺物包含層**〕 分布調査にては土師器片が確認された。本調査に於ける出土遺物の時期は縄文時代中期より近代の物まで見られるが、大半は古代であり、破片の移動等の状況よりは時期的差を伺がわせるものがあるが成層状態を確認出来ないものである。包含部位はⅠ・Ⅱ層及び遺構埋土部である。遺物種は前述の土器片及び若干の鉄器及び石器である。

Ⅲ 検出された遺構と遺物（第3図遺構配置図）

本遺跡では前掲の南矢中遺跡と同じ様に縄文時代の陥し穴状遺構（不整円形・方形状、溝状）や平安時代の竪穴式住居跡及び溝が検出され、それぞれに応じた遺物も確認されている。

1 〔**縄文時代**〕

（**小土壙群**） 時期を裏付ける遺物等伴わないが一応この項で扱う（第3図、写真11図）

本類は調査地域に2カ所あり、1カ所は北部の東西に走る第1号東西溝の北側でいずれも浅く埋土も表土の黒色土と同じである。この部分のものは遺構配置図より省略してある。もう1カ所は南東部の第4号南北溝付近で、東側で浅い黒色土を埋土とする1群と西寄りの1群である。西寄りのものは付番の上、断面図及び性状の表を提示してある。これら第4号南北溝付近のものは他の個所のものと比して幾分のまとまりが見られる。

第3号小土壙では底部が人為的に整えられた様に見える。第4号小土壙の場合は掘方を有する様にも見える。これら図示の4土壙は底面の標高がほぼ等しい。

（**陥し穴状遺構**）

イ．不整円形（方形）状遺構（この形式では底面に柱穴状のものを有する。第1～8号まで）

第1号（Bj12）土壙

円筒状に掘り込まれている。底面の北西隅近くに柱穴を有する。構築時の断面形は現在の様に開かず長方形であったと思える。検出時にても開口径は深さの値より小さい。

第2号（Bg03）土壙

第1号より大きく、底面の2柱穴は中心よりやや北寄りに配置している。柱穴部の埋土と思われる部分につき固めたとの所見があり、打込み等が考えられる。構築に際しては第1号と同様に円筒状に掘込んだと思われる。

第3号（Bg50）土壙

大きさ形状とも第2号に近い。底面に掘方を有し最下層は突き固められている。

第4号（Bd03）土壙

形状は今までの不整円形でなく、方形に近くなるがこれはまだ第5号の様な方形ではない。底部に3カ所の柱穴状の落ち込みが見られるが南側の物は浅く北側はその次に浅い。中央の物が一番深くなっている。断面形は方形状である。北東部は円筒状土壙との切合いの関係にある

が、埋土断面図よりは、本土壙が埋没した後に前述の土壙が掘込まれた跡が認められる。

第5号（Bi53）土壙

立方形の掘込みをし構築されたと思われる。第3号土壙等と同様に底面部の平面化が行なわれた形跡がある。柱穴痕は底面ほぼ中央に残存している。

第6号（Ca65A）土壙

南北方向に細長い形態を為し、南側の崩落土が多い。底面は他の土壙に見られるごとく平面化等の為のつき固めが行なわれた様である。

第7号（Ca65B）土壙

底面形は第5号と第8号の中間の形態である。柱穴痕は他のどれよりも太く深い。埋土下部ほどつき固められた様な状況を示す。

第8号（Bf65）土壙

埋土の状況として、側壁際の崩落土Ⅲ層中に火山灰の混入が認められる。最下層の黒褐色土の存在は他の土壙と異なっている。埋土中の火山灰が有史時代のものとすれば間違いなく本土壙はこの項で扱えない不適格なものとなる。

前述の第4号土壙Ⅰ層及び第4号土壙を切っている土壙埋土Ⅰ層中にも火山灰が混入しているが切り合い関係と時期及び埋没過程の関係において有史時代とすれば矛盾が生じる。また表記上の問題は有るが一応表示の形をとった。

ロ．溝状土壙（第6図、第9表、写真8図）

第1号（Bi15）土壙

北端にて段分の屈曲が見られる。この傾向は底面形にても同様で他の例に見られる様な直線性を示さない。この遺構において、掘込みは浮石層に達していない。

第2号（Be06）土壙

縦断面壁は直に立たず底部両端がえぐり込む。底面側線は直線状である。掘込みは浮石層に達している。横断面底部形は図示したⅢ層（黒色腐植土）の境界によって示される。

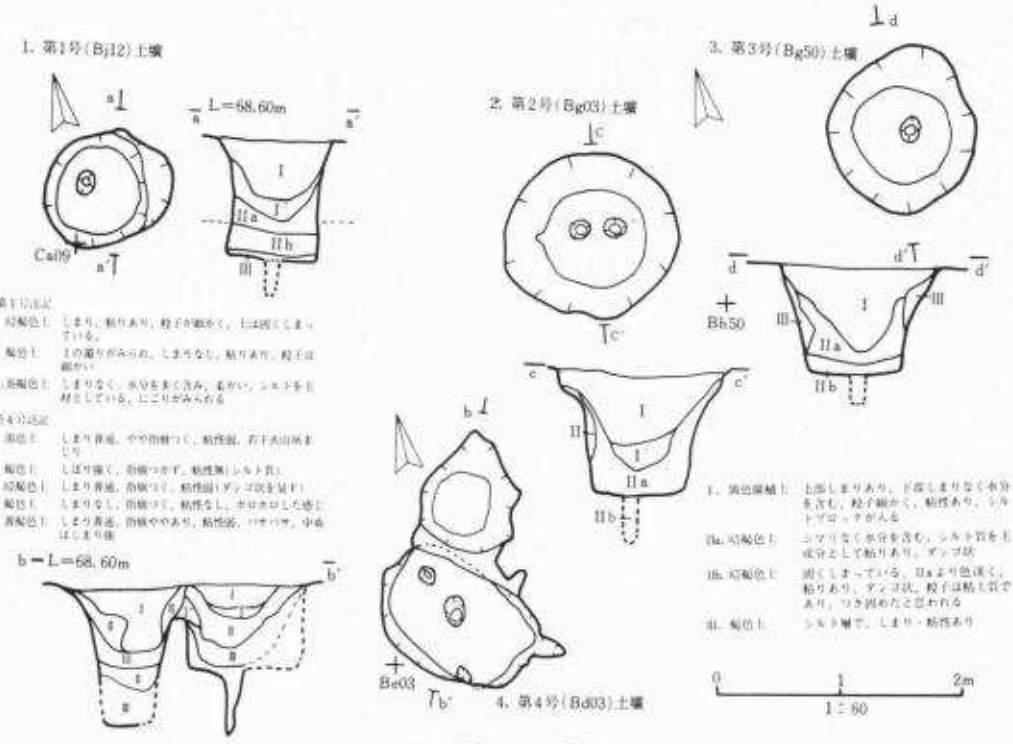
第3号（Bj86）土壙

縦断面壁は一端において第2号のものより更に35cm奥に抉り込んでいる。東側面の地山側への抉り具合は、横断面が長軸方向に対し斜交して図示してあるので、その分少な目に見たい。

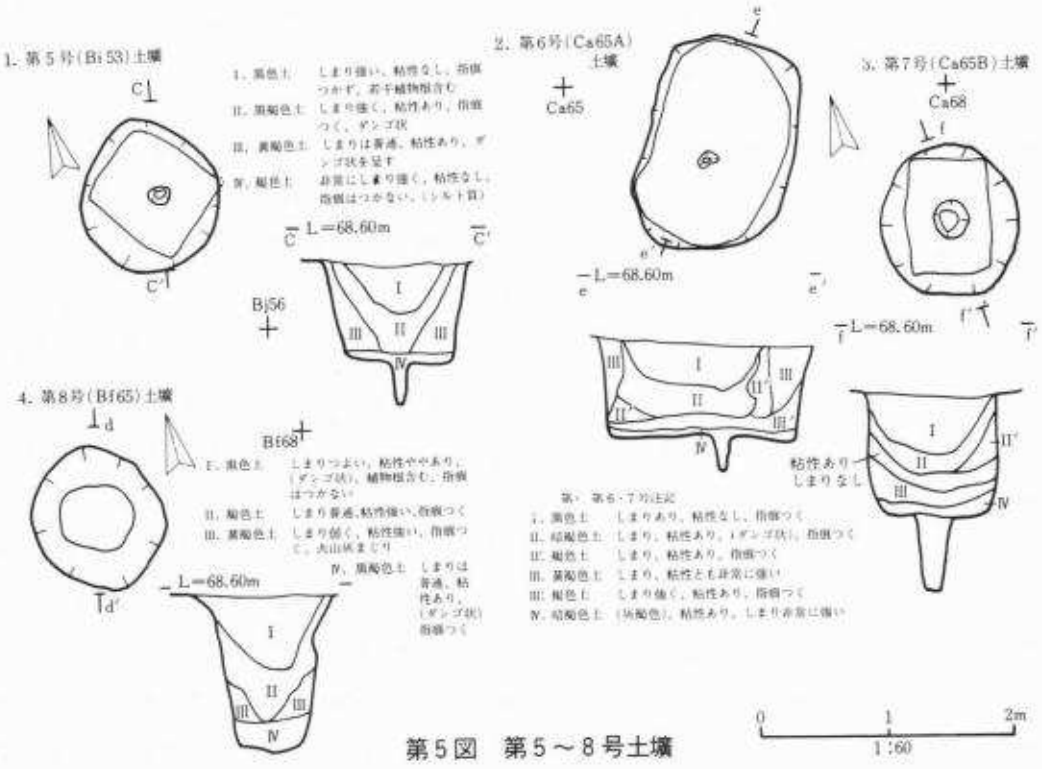
第4号（Bh12）土壙

第1号住居跡の東側が本土壙を切っている。図示してある南端の円形の小土壙は本土壙とかかわりのないものである。底面形は南側が少し広がった形である。残存した深さは本遺跡にて最深である。前述した通り煙道等に切られているので平面形は不整である。

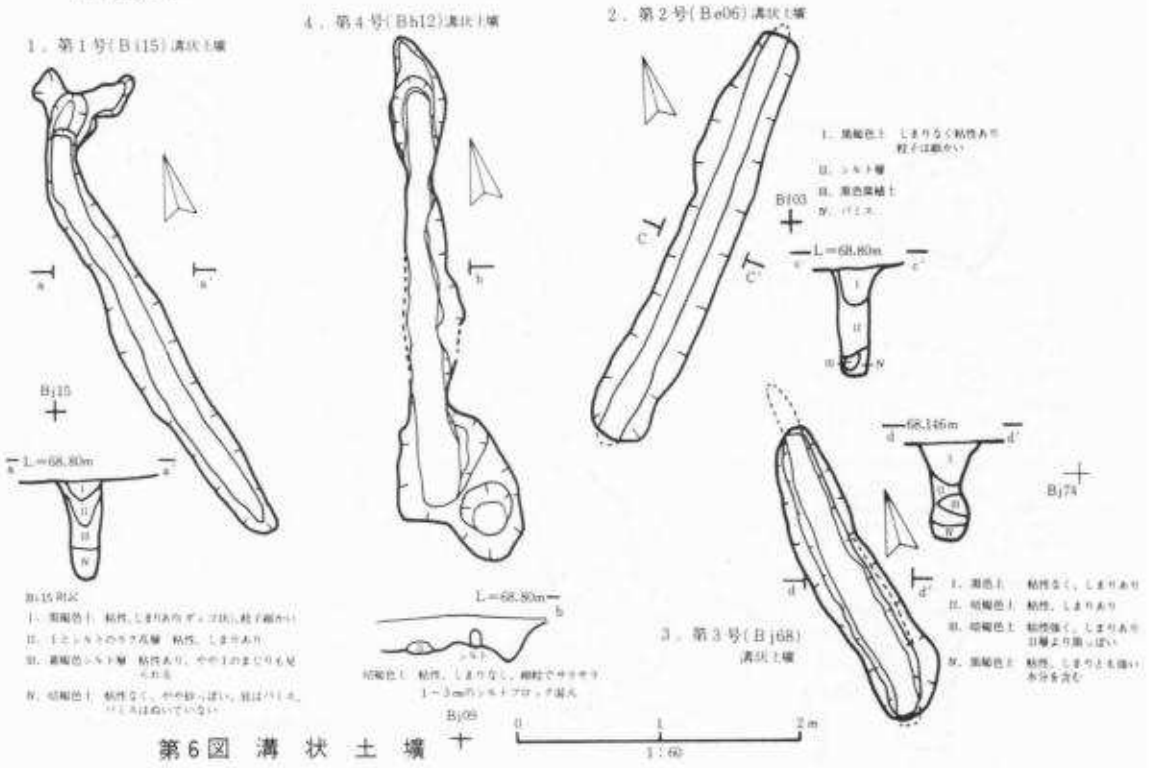
以上陥し穴状遺構について列挙したが、いずれの検出平面形も構築等の形を示さない。柱穴



第4図　第1～4号土壌



第5図　第5～8号土壌



第6図　溝　状　土　壙

痕を有する底面がつき固められている場合、その範囲が目的を示すものと思われる。

2　〔古代〕（平安時代）

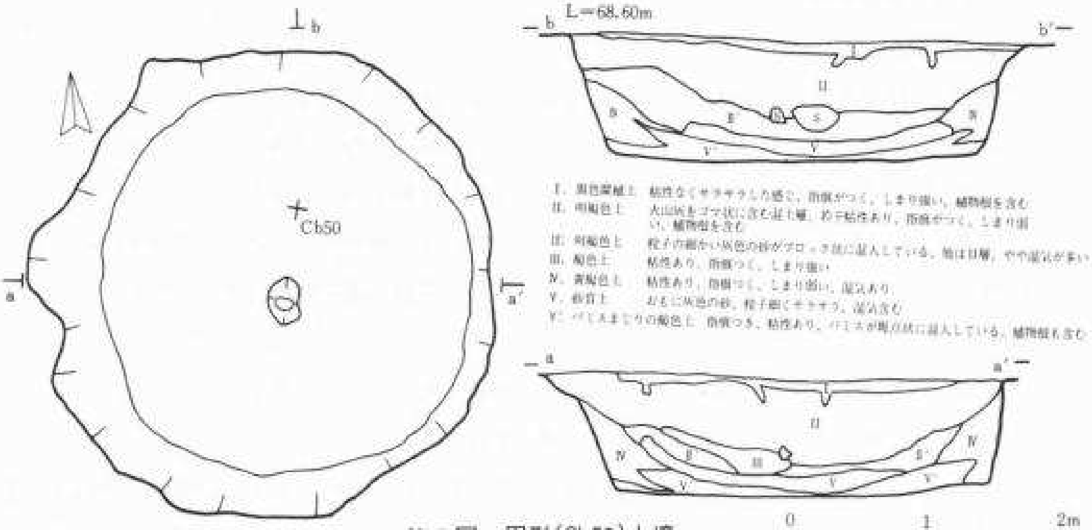
(1)　土　壙

イ．円形土壙（Cb03）（第7図、第8表、写真9図・10図）

検出面に於ける径は約3.25mでほぼ円形を呈す。底面径は約2.75m、深さ約0.80mである。底面中央には柱穴様の小土壙がある。検出された壁は傾斜しているが構築時は直に立っていたと思われる。埋土は大別して5層となるが、自然堆積でありまた火山噴出物の流れ込みによる2次堆積物が混在している。遺物は第8表の通りである。土師器坏にては内黒処理回転糸切切離しが確認される。甕にては第5号（Cc65）住復元遺物と類似のロクロ仕様小型の物が見られる。須恵器では甕体部片と供に蓋の中央部が見られる。遺物は全て埋土上部に散在していた。

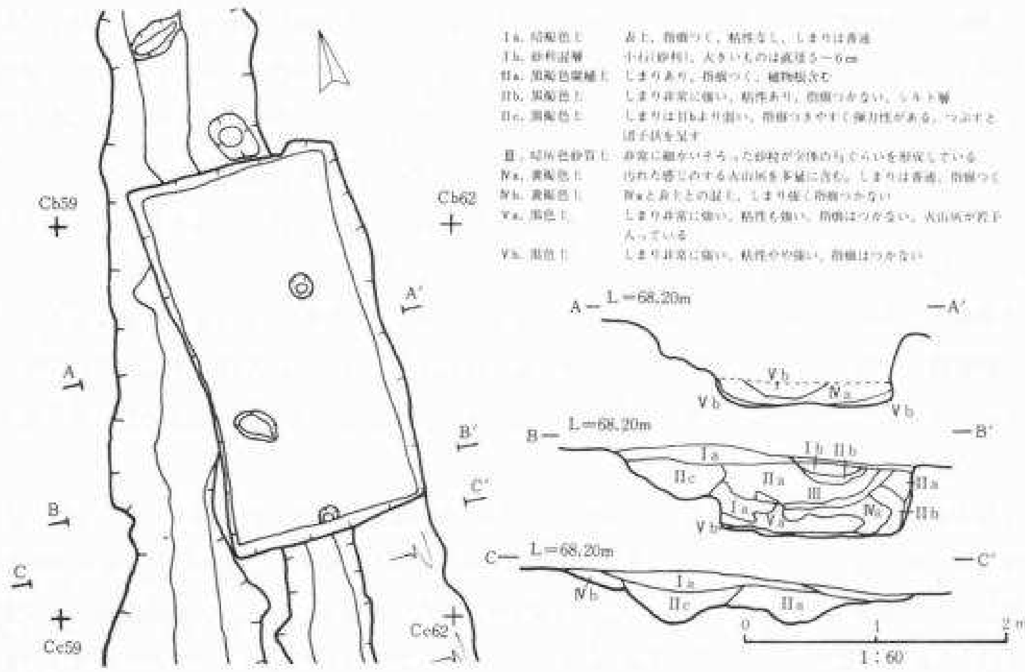
ロ．方形土壙（Ca59）（第8図、第7表、写真9図）

検出面は東西長1.45m、南北長2.90m、深さ0.55mである。底面には柱穴様の落込みが見られる。埋土は大別して5層であるが、Ⅳa層は火山噴出物の2次堆積と思われる。この火山墳出物（灰）は前述の円形土壙と同様の物で、十和田a火山灰と現段階では判定している。従ってこれらの遺構は9世紀以降の構築と見ている。出土遺物としては埋土上層よりの須恵器片及び土師器片がある。この遺構は溝によって切られており上位の埋土は溝のそれと同一である。



第7図　円形(Cb03)土壙

第1表	図番号	写真番号	検出面径m	底面径m	深さm	主軸方向	検出平面形	検出断面形	付属施設	堆土状況	出土遺物	他遺構との関連	備考
第1号土壙 Bc13	4−1		1.05×0.9	0.68×0.71	0.65	N4°E	不整円形	口 形	有に1個	3層?層人為的	なし	なし	中心の深さ0.1m
第2号 〃 Bg03	4−2	13−1	1.43×1.36	0.81×0.79	1.10	N26°W	ほぼ円形	口 形	2	3層自然堆積	〃	〃	〃 0.38m
第3号 〃 Bg20	4−3	13−2	1.28×1.33	0.76×0.79	0.89	N4°W	〃	〃	1	4層?層人為的	〃	〃	〃 0.25m
第4号 〃 Bd03	4−4	13−3	1.00×1.34	0.74×1.16	0.66	N40W	隅丸方形	〃	2	4層自然堆積	〃	円形土壙(…)を切る	〃 0.50m
第5号 〃 Ed31	5−1	−	1.10×1.10	0.75×0.85	0.80	N4°W	不整円形	〃	1	4層?層人為的	〃	なし	〃 0.35m
第6号 〃 Ca03	5−2	13−4	1.15×1.70	0.74×1.21	0.72	N3°E	ほぼ方形	袋 形 状	〃	3層 〃	〃	柱穴と見るべきか	〃 0.28m
第7号 〃 Ca59	5−3	13−5	1.08×1.16	0.67×0.49	0.98	N1°E	長円形	〃	〃	7層自然堆積	〃	なし	0.57m低く深い
第8号 〃 Bb81	5−4	−	1.04×1.15	0.58×0.52	1.22	N26°W	ほぼ円形	円 筒 形	なし	4層 〃	〃	〃	炭化層が堆積



第8図　方形(Ca59)土壙

(2)竪穴式住居跡

第1号 (Bh15) 住居跡（第9図、写真2図）

〔遺構〕〔保存状況〕 残存部壁高20㎝内外である。西側の残り少い。

〔平面形・規模・カマド方位〕 隅丸方形である。東西長4.0m、南北長4.35mである。カマドは東壁南側寄りに1基検出されている。煙出しの方向はE12°Sである。

〔堆積土〕 Ⅰ層のみで、床面の中央部に焼土が残存し、地山シルト質土が散見される。

〔壁〕 南側には小土壙があり内外に突出している。東側で縄文時代の溝状土壙を切っているが、境界は不明瞭である。

〔床面〕 貼付等の痕跡は見られない。川原石が直上及び少し浮いた形で見られる。

〔柱穴〕 小規模の落込みはあるが柱穴と認められない。

〔カマド〕 東壁南寄りの物は、両袖に粘土で固めた立石をもつ。床面上に散在する石が全てカマドに用いられたとは限らないが天井部にも石を用いた事も考えられる。煙道及び煙出しを有する。煙出し底面は煙道底面より低く掘り込まれている。東壁北寄りに同様な煙道及び煙出しが見られるが袖等残存していない。南壁にもカマドの痕跡が不明瞭ながら見られる。床面中央の焼土は炉跡とも考えられる。

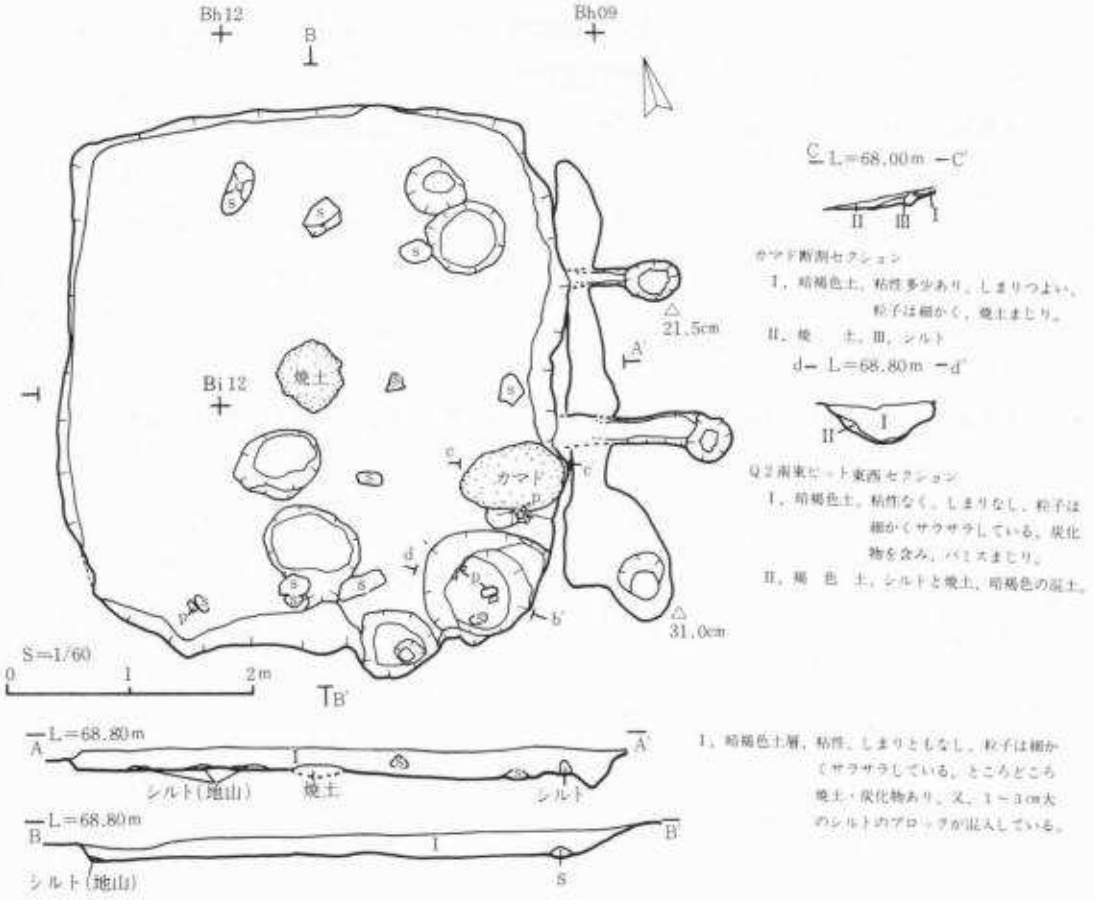
〔貯蔵穴〕 前述のカマド南側の物に土師器内黒ロクロ坏が主として出土している。炭化物を含む埋土が主である。

〔重複・切合い等〕 調査記録として確認出来ないがカマド及び施設の変遷より3時期を想定出来る。北側のカマド本体の存在を仮定し、南側のカマド袖・排煙施設も同様に考えての事であるが、それらの時期が長期間の隔たりを有するとは考えにくく、拡張、建て替え等の範囲で考えられる事と思われる。北寄りのものが一番古く、南壁のものが次に続き、南寄りのものがこれらでは最後になる。中央部の焼土が炉跡とすれば併設または以後との見方も出来るがそれらを裏付ける積極的証拠は見当らない。

〔遺物〕（須恵器甕4、土師器坏18・甕5、刀子、鉄製品）（10図・写真2・3図・2表）

〔須恵器〕：甕 いずれも体部片で、ロクロ痕、叩目を有する。灰釉の残痕が認められる物もある。2は頸部近くの破片で外面には自然（緑）釉が残存している。1と4は内面の状況及び胎土等、類似点が多いが区別して表記した。

〔土師器〕：坏 大多数がロクロ・内黒処理・回転糸切離し技法のものである。何らかの外面調整痕の見られるものは、1) 2) 3) 8)の4個体である。1)は床面出土ではあるが第4号(Ca68)住出土物と接合している。2)は第5号(Cc65)住出土物に酷似している。3)は回転糸切の後底周囲を箆削り調整している。8)は口唇部に沈線様工具痕にて低い段を有し全体的には厚手である。この4個体の内2個体は床面小土壙より出土している。1)—18)は小部分であるので、計測



第9図　第1号(Bh15)竪穴式住居跡

値または計算値と状況を示し図は省略してある。4) 7)は内黒処理のものであるが未様物質が付着しているのが認められる。6)は床面焼土中からの出土であるが、鈴ケ沢（一関市）遺跡等で認められた石綿様物質を含んでいる。9)は雲母、11)は角閃石等を含む。器の大きさとしては口径14cm内外のものと9cm内外の2種に区分出来そうである。器形に於いて口縁部はほぼ緩く外傾するのみである。

：甕　5個体でいずれも小片のみである。1)は頸部下で一担膨らみを持つ器形で口唇部は強く引き出され口唇下及び内面口唇下に沈線様工具痕が見られ、口唇の反りが強調されている。内面の粘土は剥離しかかっている。2)は焼土中よりの出土（底部より体部にかけての類似片は黒斑を有し、第5号（Cc65）住破片とも接合している）で、器形としては、頸部下はほぼ直に下りるもので、5)はこの2)に酷似している。3)も器形として2)に近い。器壁は薄く硬堅で胎土・焼成の具合は須恵器に近い。第4号（Ca68）住・Q_2 Q_3土層断面中に類似片が出土している。口唇は極少部の残存で口径値は精確さを欠くと思われる。4)は全体的に磨耗し調整等も不明であ

る。内面下部は幾分灰色を帯びている。5)は底体部の破片もあるが第5号(Co65)住・Q_1埋土片と接合している。口縁内面には炭質物が付着している。

〔鉄製品〕：刀子　全長約18.7cm、刃部巾約1.2cm、厚さ約0.4cmであるが全体的に銹化を受け、全体法量値、及び各部の法量値が算出し難い。残存茎子部長約4.0cm、巾約0.7cmである。喫先が上に向いた反り気味の刀身である。銹瘤中に炭質物が認められる事は鞘に納められて放置されたものであろうか。瘤状の一部は硬堅で鈍く黒褐色の光沢を放つ所もある。

：その他　刀子の一部と思われる破片で、薄く幾分ねじれた形である。以上の鉄製品は南東隅の貯蔵穴と思われる所より出土している。

〔その他〕：縄文土器　磨耗している破片であるが中期の物と思われる。貯蔵穴より出土。

第2表				図番号	写真番号	出土位置	法量(cm)			口縁形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整		焼成		備考
							口径	底径	器高						外面	内面	良	[illegible]	
第1号(Bh75)竪穴式住居跡出土遺物	[illegible]	[illegible]	1	10-14	3-14	Q_1・Q_3Pit	−	−	−	−	−	不明	−	細砂 普	[illegible]	[illegible]	[illegible]	普	[illegible]
			2	10-15	2-15	Q_1(Pit?)	−	−	−	−	−	ロクロ	−	〃 〃	箆磨き	−	〃	〃	[illegible]
			3	10-16	2-16	Q_1	−	−	−	−	−	ロクロ	−	〃 〃	箆磨き	−	〃	〃	[illegible]
			4	10-18	3-18	埋土	−	−	−	−	−	不明	−	〃 〃	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
	土師器	坏	1	10-1	2-1	床面、東P	13.8	5.6	3.3	外傾気味	平底	ロクロ	回転糸切	石英 普	撫で、磨研り	磨き	軟質	〃	[illegible]
			2	10-2	2-2	床面Q_1	15.2	7.4	3.5	〃	〃	〃	〃	〃 〃	箆磨き	−	〃	〃	[illegible]
			3	10-3	2-3	床面Q_1	13.0	5.0	4.7	〃	〃	〃	〃	細砂 〃	[illegible]	磨き	〃	〃	〃
			4	10-4	2-4	床面Q_1		7.5				〃	〃	〃 〃	撫で	磨き	〃	〃	[illegible]
			5	10-5	2-5	床面Q_1埋土		3.0				〃	〃	〃 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
			6	−	−	床面埋土	12.8			外傾気味	−	〃	−	〃 〃	〃	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			7	10-6	2-6	Q_1埋土	14.8	6.0	5.1	〃	−	〃	回転糸切	〃 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			8	10-7	2-7	南Pit	11.4	5.4	4.5	〃	平底	〃	〃	〃 〃	箆磨き	〃	〃	〃	[illegible]
			9	10-8	2-8	Q_1	11.6			〃	−	〃	−	[illegible] 〃	撫で	磨き	〃	〃	[illegible]
			10	10-9	2-9	Q_1		5.8		−	平底	〃	回転糸切	[illegible] 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
			11			床面	13.5			外傾気味	−	〃	−	[illegible]	〃	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			12			Q_1床面	9.6			〃	−	〃	−	細砂 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
			13			Q_1	13.3	4.6		〃	平底	〃	回転糸切	石英 〃	〃	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			14			Q_1Pit	9.4			外傾気味	−	〃	−	石英 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			15			Q_1埋土	4.0			〃	平底	〃	回転糸切	細砂 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
			16			Q_2東Pit	11.6			〃	−	〃	−	細砂 普	撫で	[illegible]	軟質	普	[illegible]
			17			Q_1埋土		6.0		−	平底	〃	不明	〃 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			18			Q_1埋土		4.7		外傾気味	平底	〃	回転糸切	〃 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
		[illegible]	1	10-10	2-10	Q_1埋土	29.4			[illegible]		〃		石英 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			2	10-11	2-11	Q_1埋土	26.8			〃	−	〃	−	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
			3	10-12	2-12	Q_1	13.8			〃	−	〃	−	[illegible] 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			4	10-13	2-13	Q_1	11.8			[illegible]	−	[illegible]	−	石英 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			5	10-17	2-17	Q_1	20.0	5.4		[illegible]	−	ロクロ	[illegible]	石英 〃	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
		[illegible]		10-19	3-19														

第2号（Bj74）住居跡（11図、写真6図）

〔遺構〕〔保存状況〕　残存部壁高約20cm内外、東部壁の一部、全体の約8分の1辺のみ。

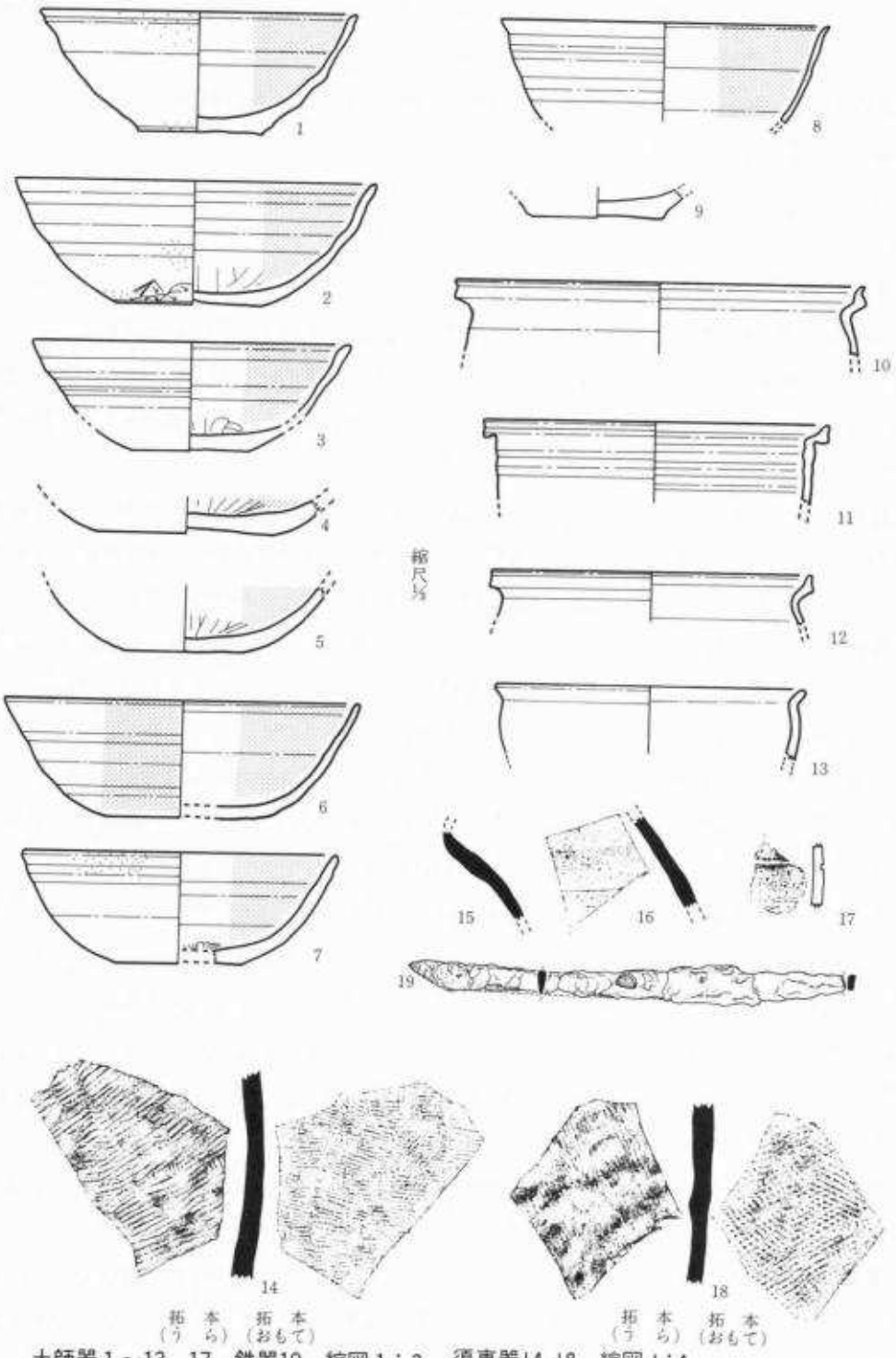
〔平面形・規模・カマド方位〕　ほぼ方形で東壁北部に幾分の張り出しを有すると思われる。

第3号（Bj71）住居跡より一回り小型である。カマド方位はほぼ北（N15°E）である。

〔堆積土〕　不明

〔床面〕　残存東部と同じ標高を持つとすれば67.82m位であろう。（第3号（Bj71）住居跡のそれとは16cmの差がある。

〔柱穴〕　不明



土師器1～13、17　鉄器19　縮図1：3　須恵器14.18　縮図1：4

第10図　第1号(Bh15)竪穴式住居跡　出土遺物

〔**カマド**〕　破壊されており、残存煙道長約50cm（推定長1.0m）、一部側面に焼土が認められる。煙出し底は煙道底より深く掘り込まれている。

〔**重複・切合い等**〕　第3号（Bj71）住居跡にて触れてあるので省略する。

〔**遺物**〕（**土師器：坏：甕**）

他の遺構出土物と接合したものが多く、それぞれの遺構の遺物の項で扱ってあるが、広範囲の分布をするものもある。

第3号（Bj71）住居跡（11図・3表、写真6～7図）

〔**遺構**〕〔**保存状況**〕　残存部壁高約70cm内外である。本遺跡住居跡中最深である。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕　ほぼ方形の住居跡で東西約4m、南北約4.4mの広さを持つ。カマドは東壁の南東隅に設けられほぼ対角線延長の方向を向きS43°Eの値である。北壁の北東隅にも煙道と煙出しらしきものが残存している。

〔**堆積土**〕　土層南北断面よりは自然流入堆積と見られるが、Ⅲ層の様に部分的につき固められた形跡が認められ、後述の第4号（Ca68）住居跡構築に関する地業による堆積が行なわれたと思われる。Ⅱ層パミス層の黄色土は歴史時代火山噴出物の2次堆積物である。

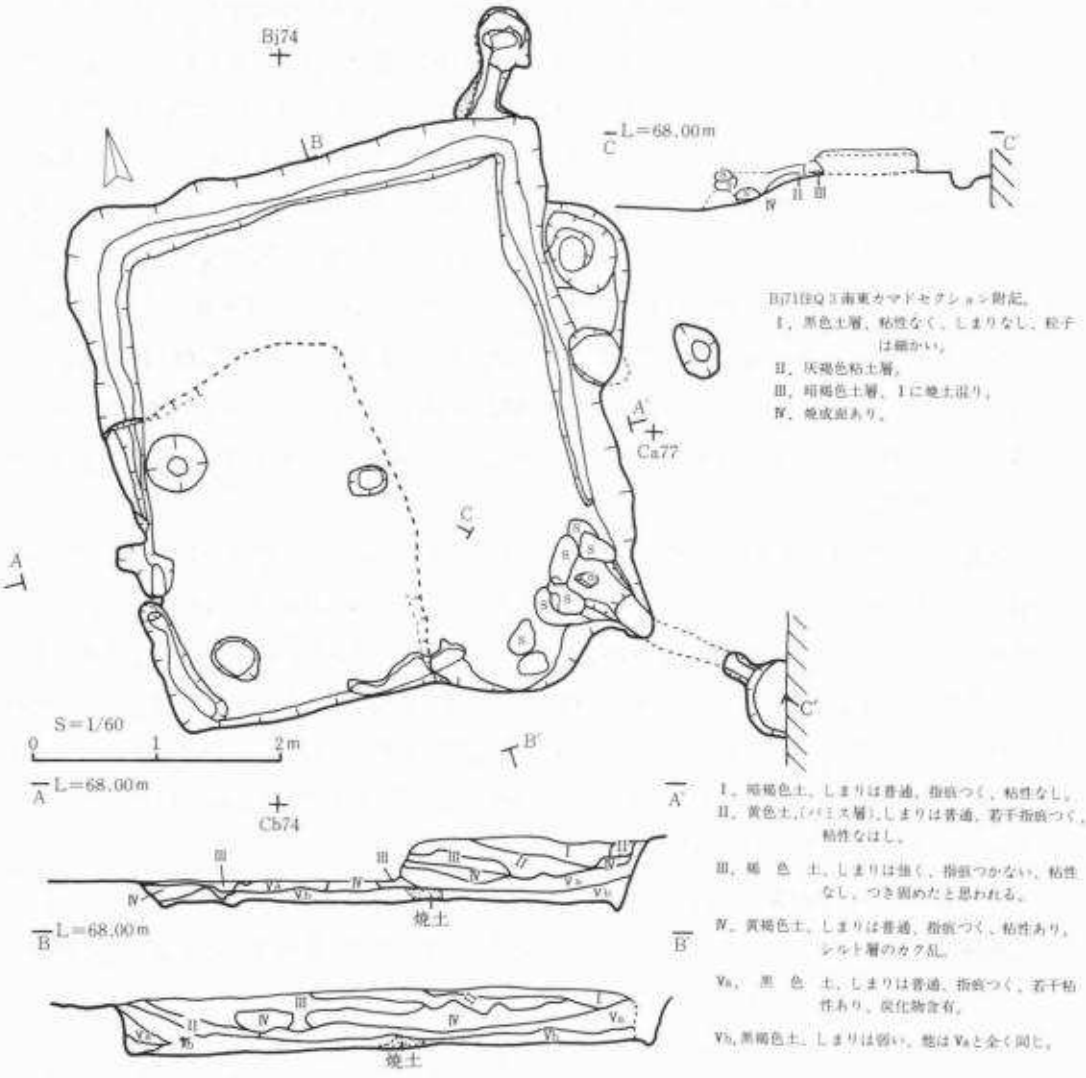
〔**床面**〕　四辺に周溝（深さ6cm、巾15～20cm）が見られる。南西隅に3カ所の落込みがある。後述の第4号（Ca68）住居跡に関する物か不明である。床面は地山パミスV層まで掘込んでいるので踏み固めてあるが、南東端のカマド附近は薄くシルト質土を貼ってある。

〔**柱穴**〕　前述の3カ所の他、住居跡の東側外に1つの小土壙が見られる。また東壁北寄りの張り出し部にも小土壙が見られるが、これらが本住居跡の柱穴であるという積極的な根拠は見あたらない。特に後者は前述した第2号（Bj74）住居跡に関するものと思われる。

〔**カマド**〕　南東隅に作られている。40cm位の川原石を片袖に2個づつ用い天井部にも石を渡してあり焚き口を確認出来る。カマド上部には粘土を巻いてある。支脚と思われる石がカマド中にある。煙道までカマド底の立ち上がりが大きい。煙道はほぼ水平の繰り抜き式である。煙出しの底部は煙道の底部より深く掘り込まれてある。検出形にては煙出しが大きくなっている。北壁の北東隅近くにも、焼土・煙道及び煙出しが見られるが、これは前述の第2号（Bj74）住居跡のものと思われる。

〔**貯蔵穴**〕　南壁カマド近くに壁の外側への張り出しがありそこに土壙が設けられている。内部には石が残存し、土師器片も出土した。

〔**重複・切り合い**〕　北壁の煙道・焼土・煙出しより、第2号（Bj74）住居跡の存在した事が考えられる。この様な関係を有するものは第1号（Bh15）住にても見られたが、カマドが残存しないという事は、カマドのみの単なる作り替えの場合と住居の拡張をともなう作り替えが考えられる。またそれらの時間的隔たりをも考慮しなければならない。第3号（Bj71）住の様な



第11図　第３号(Bj71)・第２(Bj74)竪穴式住居跡

煙道を第２号(Bj 74)住も有していたとすれば拡張をともなう場合と考えられる、また残存する煙道がほぼ原形に近いという事ならばカマドの作り替えのみとも考えられなくもないがその場合の周溝のあり方床面の高さが考慮されなければならない。いずれにしても２住居の時期差はあまり長くないと思われる。前述した東壁焼土を伴なう小土壙に関して67.82mの標高に床面が考えられるとすれば、第２号(Bi 74)住居の北壁は土壙北縁を西に延長した線になり、煙道の長さも１m近くになる。それらを本住居は切り拡張されたと考えられる。

〔遺物〕（土師器：坏18：高坏１：甕２）（12図・３表・写真７図）

〔**土師器**〕：**坏**（ほぼ完形２、図上等での復元３）

半数以上はロクロ成型・回転糸切離し・内黒処理で一部に削り等の調整技法が見られる。1)は内黒坏の内で最大の物である。内面の磨きは撫で痕が確認できる程度のものである。胎土は大きい物の割には均一である。底部は箆削り調整を行っている様であるが磨耗にて明確でない。2)は底体部調整が明確に行なわれている。口縁部外部に糸の痕跡が見られる。底部内面の磨きは不明であるが、体部内面は水平方向に磨かれている。3)は外面朱塗りである。幾分薄手になり小振りになる。4)は一部に調整痕が見られ、第4号(Ca68)住居跡出土物と接合している。8)は体部外面凹凸がはげしいが、漆様付着物もあり、また第4号(Ca68)住居跡出土遺物に類似の物がある。11)は東焼土土壙出土のもので、A区西溝及び第4号(Ca68)住居跡出土物坏20)と同一である。前述の第2号(Bj 74)住居跡関連遺物でもある。14)15)は石綿様物質を含み第4号(Ca68)住居跡出土物坏3)4)に類似である。18)は第4号(Ca68)住居跡出土坏14と接合した焼土土壙出土のものである。

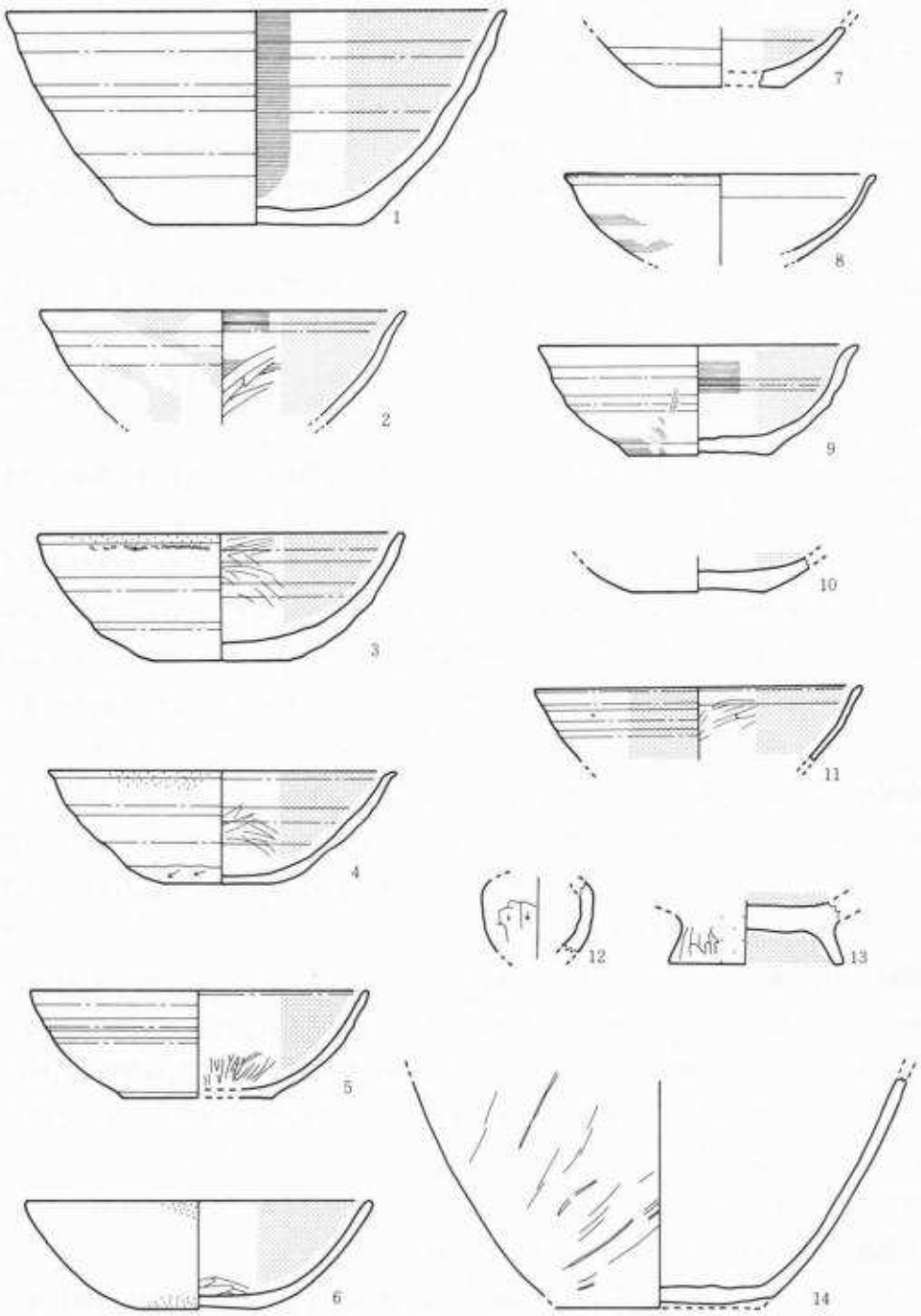
:高台 この住居跡唯一のもので、底部のみで上部が不明である。一応坏と分類したが他の所属の可能性もある。台部中心と上部器底中心とは一致しない形で貼り付けられている。

:甕 ごく少数でしかも第4号(Ca68)住居跡出土物と同一であり、伴出との断定はできない。1)は埋土出土物で前述第4号(Ca68)住居跡カマド西土壙出土物と類似のものである。全体的に薄手であり、軽量に作られているが、剥離・磨耗等により残存状態は不良である。2)は焼土土壙(第2号(Bj 74)住居跡関連)出土の第4号(Ca68)住居跡出土物と同一の物である。また第1号(Bh15)住居跡出土物にも類似である。

第4号(Ca68)住居跡(13図、4表、写真5図)

〔遺構〕〔保存状況〕 ゆるやかな南斜面にて検出されたので、北側程残りが良く壁高30cm内

第3表				図番号	写真番号	出土位置	法量 口径	法量 底径	法量 器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	調整 内面	焼成 良	焼成 色調	備考
第3号[illegible]竪穴式住居跡	土師器	坏	1	12-1	7-1	Q1床面	21.2	8.3	8.0	外反	平底	ロクロ	不明	粘土 粗	撫で	黒色磨き	酸化	黄	坏、内黒
			2	12-3	7-2	Q1,焼土P	15.6	5.8	3.4	外傾気味	〃	〃	回転糸切	雲母 普	撫で、箆削り	黒色磨き	〃	〃	〃 〃
			3	12-4	7-3	Q1床面	14.8	4.7	4.8	外反気味	〃	〃	〃	石英 〃	〃 〃	〃	〃	〃	[illegible]
			4	12-5	8-4	Q1床面	14.4	4.4	4.6	外傾	〃	〃	〃	〃	〃 箆削り	〃	〃	〃	[illegible]
			5	12-6	8-5	カマドQ1	14.7	5.1	4.8	〃	〃	〃	〃	口石 普	〃	〃	〃	〃	〃 〃
			6	12-7	8-6	Q1床面		4.6		—	〃	〃	〃	口石 〃	黒色磨り	〃	〃	〃	[illegible]
			7	12-8	8-7	Q1カマド	10.2			外反	—	〃	—	砂粒 〃	黒色磨り、[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			8	12-9	8-8	Q1カマド	13.2			〃	—	〃	—	〃	撫で	撫で	〃	〃	[illegible]
			9			Q1床面	11.6			外反気味	—	〃	—	石英 〃	黒 撫で	撫で	〃	〃	[illegible]
			10	12-10	8-9	Q1~Q3		5.2		—	平底	〃	回転糸切	細砂 〃	磨 耗	撫で	〃	〃	[illegible]
			11			東P、西P				外傾	—	〃	—	石英 〃	[illegible]	黒色磨き	〃	〃	[illegible]
			12	12-11	8-10	Q1埋土	14.8			外傾	—	〃	—	粘土 〃	撫で	〃	〃	〃	[illegible]
			13	12-12	8-11	Q1埋土	—	—		不明	不明	手捏ね	—	口石 粗	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			14			Q1埋土	13.0			外傾気味	—	ロクロ	—	雲母 普	撫で	黒色磨き	〃	〃	[illegible]
			15			Q1カマド	7.2			外反気味	—	〃	—	砂粒 〃	〃	撫で	〃	〃	[illegible]
			16			カマド		5.8		—	平底	〃	不明	口石 〃	黒色磨り	黒色磨き	〃	〃	坏、内黒
			17			Q1埋土	7.2			外傾気味	—	〃	—	石英 〃	撫で	〃	〃	〃	[illegible]
			18			焼土P	20.4			〃	—	〃	—	〃	撫で	〃	〃	〃	[illegible]
		72		12-13	8-12	Q1埋土		7.4	1.4	—	高台	ロクロ	回転糸切	雲母 普	黒色磨き	黒色磨き	酸化	黄	[illegible]
		甕	1	12-14	8-13	Q1月暦	20.0	10.0		[illegible]	平底	[illegible]	[illegible]	砂粒 〃	黒色磨り	撫で	〃	〃	[illegible]
			2			焼土P	—	—	—	—		[illegible]	—	〃 〃	磨 耗	磨 耗	〃	〃	[illegible]



第12図　第3号(Bj71)竪穴式住居跡　出土遺物　縮図1：3

外であるが、南側は僅かに壁の立ち上がりが認められる程度である。

〔**平面形・規模・カマド方位**〕　ほぼ方形で東西長約4.7m、南北長約4.2mの広さである。カマド方位はほぼ南（S10°E）を指す。

〔**堆積土**〕　既述のごとく埋土も南半部は削られているが、自然流入堆積を示す。ただし東西断面図上、西側の落込み近くの焼土の周囲は幾分の特異さが感じられる。流入方向は多方向である。

〔**床面**〕　西半部は地山の掘込み面を床面としているが、東半部は第3号（Bj 71）住居跡を埋めて形成した貼り床である。床面上には柱穴や落込みが見られるが、図示西側の方形の落込みはこの住居跡廃棄後に形成されたとも考えられている。その他の施設は南側に集中している。中央部には前述した焼土がある。

〔**柱穴**〕　柱穴は西側に3カ所、南側に1カ所認められた。西側の3カ所の内、北寄りの2カ所は両壁との距離も程良いが、残り1カ所は幾分ずれた位置にある。

〔**カマド**〕　南壁の南東隅近くに焼土の広がりと、川原石の散乱が見られる。焼土は床面より下にまで広がっている。石は規則的な配列をしている訳でなく雑然とした形で、袖や天井を構成している様子は全く見られない。煙道、煙出しの存在についても、全く手掛りとなるものはない。床面中央部の焼土の広がりは薄いが、南東隅の床面と合せ考えて、炉等の施設を有したのではないかとも思われる。

〔**貯蔵穴**〕　南壁、南東隅に有る土壙には、焼土混じりの3層の埋土が存在し、その中からは、土師器の甕片も出土している。南壁中央寄りの焼土混じりの落込み（土壙）からは、回転糸切離し、両面黒色処理の耳皿等が出土している。（西側の落込みについては、前述の通り、住居廃棄の後に掘り込まれたものと考えられている。）

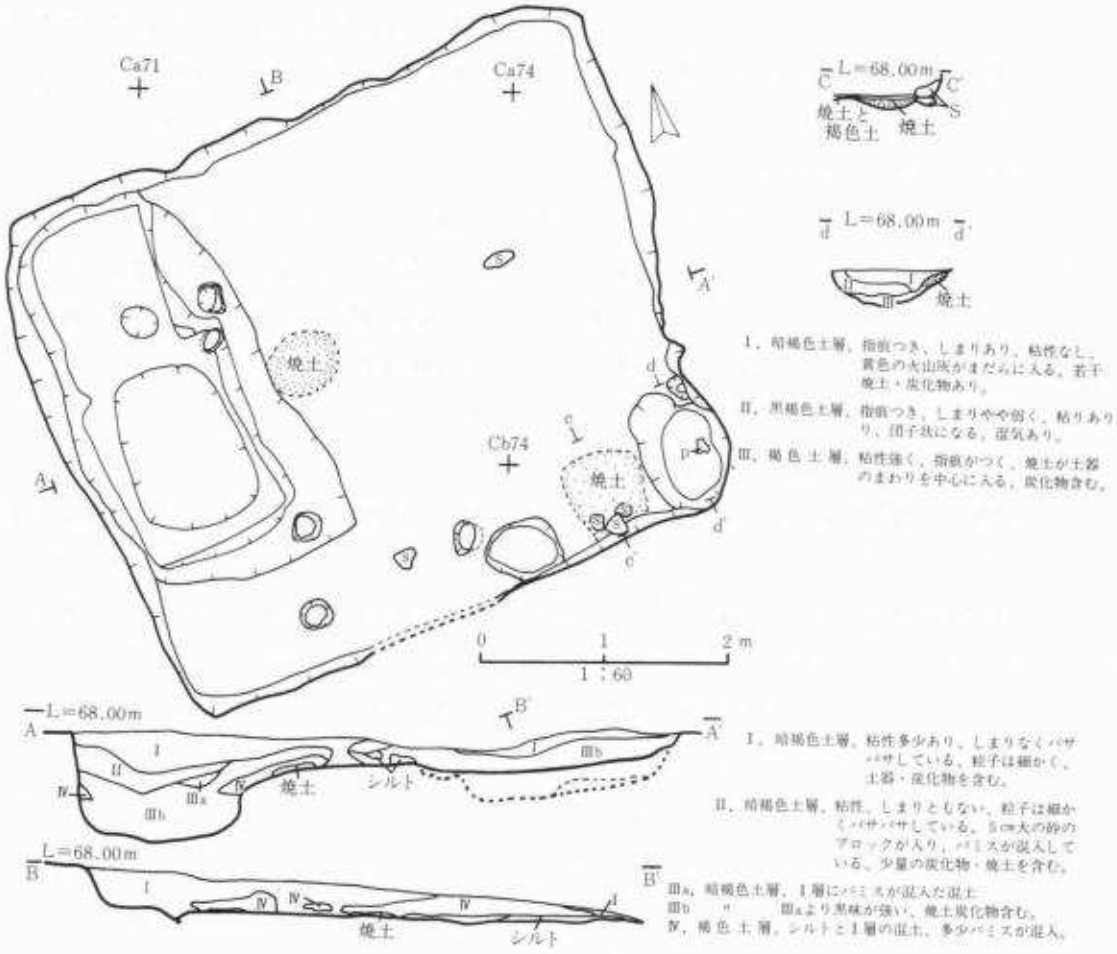
〔**重複・切合い等**〕　第3号（Bj 71）住でも述べた通り、当住居跡が第3号（Bj 71）住居の西側壁を切り更に埋め土をし、貼床及び壁を貼ってあると認められる。従って当住居跡が新しい事は言うまでもない。（第3号（Bj74）住については確認する手段もないが、南西部の残部があったとすれば、当住居跡にて破壊された可能性もある。）（当住居西側の方形落込みについては、前述の通りである。）

〔**遺物**〕　土師器・坏24・甕5・耳皿1、須恵器・1（14図、4表、写真5・6図）

〔**土師器**〕：**坏**（第14図1～14、第4表）ほぼ完形

大半が計測作図してある。半数以上が回転糸切離し内黒処理であるがその内の半数には何等かの調整技法が見られる（但し明確な形で痕跡が残存しているのは更に数少くなる。）

1）には漆様付着物がある。外面に篦磨きが見られる。2）は厚手で大振りの両面黒色処理を施こした物である。器高はあまり高くないと思われる。4）は口縁より底部まで接合する有調のも



第13図　第4号(Ca68)竪穴式住居跡

のである。内面の黒は受熱の為か消えている。5)の器壁は薄くしかも整った器形をしている。口縁は軽く外反している。8)は厚手ながら小振りである。3)7)16)にも見られる朱様の物質が内面に付着している。9)の器壁は薄い。胎土中に石綿様の物質を含む。12)は強い立ち上がり方をする器形である。胎土中には石綿様の物質を含む。16)は前述したが、外面に朱様物質を付着させ、内面には漆様物質を付着させている。外面に刷毛目様痕跡も見られる。19)は厚手ながら幾分小振りの物である。21)は薄手小振りの浅い器形である。内外着色された感じで鈍橙色を呈している。3)7)11)13)の胎土中には雲母が見られる。12)～15)はカマド西土壙よりの出土である。

：耳皿　口縁部の両端を内側に折り込み、口唇部はつまんだ形で上を向いている。内部底面には掻傷様に工具痕が見られる。この工具痕は短軸方向に残り、折り込み部で留められている。この掻傷様工具痕は南矢中遺跡出土の内外黒色処理の小型壺底内部にも同心円状に残っている。本遺跡のこの遺物の黒色処理は幾分粗雑で前述の様に全面が磨かれている訳でなく削ったまま

の所もある。外面の磨きはほぼ長軸方向に施されている。底部には回転糸切の痕跡が見られる。底部には折り込みに際しての歪みが残っている。折り返しの少ない方は口唇が内彎の形となるが充分な方は直に立つ。

：甕（第14図16～20図、第4表、写真6図）

1)は焼土を有するカマド東土壙より出土、外面は磨耗している。底部とは接合しない。(2)は薄手の中型の甕である。土壙中より炭質物にまみれ出土した。3)は折返しのままの口縁を有する。底部とは接合しない。4)は小型と推定されるが、複合口縁の頸部より上が長く、外反している。5)は堝様の器型とも見える。輪積痕が認められる程粗雑な作り方である。

〔須恵器〕：甕　体部に叩目を有する、胎土は幾分粗である。

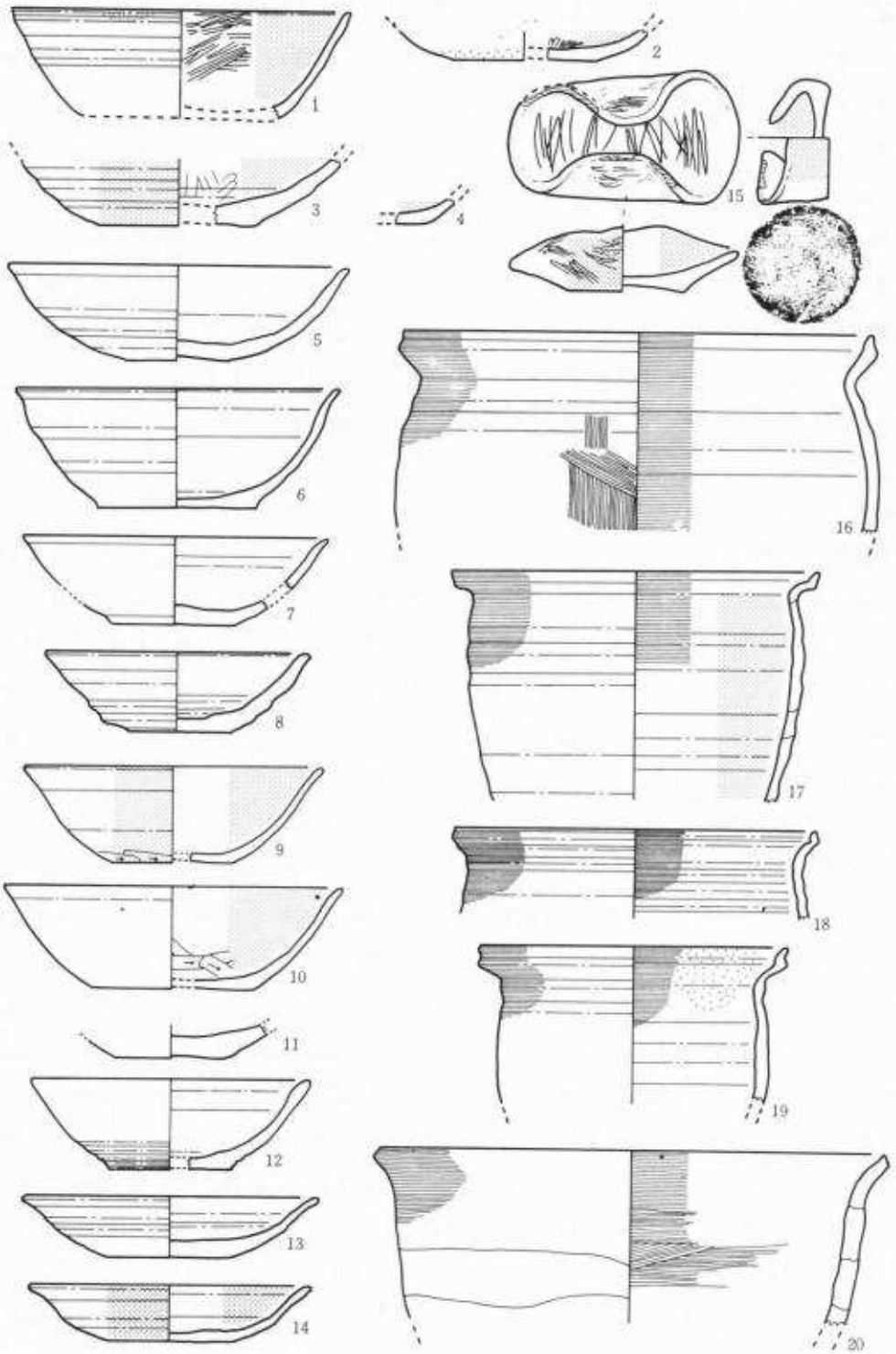
第5号（Cc65）住居跡（15図、写真3図）

〔遺構〕〔保存状況〕　住居跡南側は削平されている。残存壁高は10cm内外である。東壁も僅かに残る程度であるが、西壁が一番残り良い。

〔平面形・規模・カマド方位〕　南壁側を削られているが、ほぼ方形を成すものと思われる。西壁南半部に階段状張り出しが見られる。東西長約4m、南北長約4m（推定）の大きさとなろう。カマドはほぼ東（E13°N）向きに構築されたものと思われる。

〔堆積土〕　I層のみであるが床面に地山質シルトが散見される。

第4表			No.	図番号	写真番号	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土混有物	調整 外面	内面	焼成 色	良否	備考
第4号（Cc68）竪穴式住居跡出土土器	土師器	坏	1	14-2?	5-5?	Q1床面	13.0	6.0	5.7	外反気味	平底	ロクロ	[illegible]	石英	[illegible]	[illegible]	酸化	良	[illegible]
			2	14-3	5-1	Q1,2床面	(17.0)	7.5	5.0	外反気味	〃	〃	回転糸切	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			3	14-4	5-4	Q1床面		8.0		—	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			4	14-5	5-5	Q1床面	12.8	4.5	4.5	外反気味	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			5	14-6	5-6	Q1P3	14.0	6.9	5.1	外反気味	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			6	12-2	5-7	カマド西P	12.4			[illegible]	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			7	14-7	5-8	西側	(13.3)	5.5	(4.6)	—	平底	〃	回転糸切	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			8	14-8	6-1	Q1カマド西P	12.0	5.0	3.3	外反気味	〃	〃	不明	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			9	14-9	6-10	東P3	(13.0)	(6.4)	(4.2)	外反気味	〃	〃	回転糸切	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			10			Q1床面		6.4		—	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			11			東P3	16.0			外反気味	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃	〃	不良	[illegible]
			12	14-10	6-11	カマド西P	(14.7)	(7.0)	(4.5)	外反気味	平底	〃	不明	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]	[illegible]
			13			〃	11.2			[illegible]	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			14			〃	10.4			外反気味	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			15			〃	8.2			〃	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			16	12-9	6-12	Q1P3	(13.6)	(6.3)	(4.7)	外反気味	平底	〃	回転糸切	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			17	14-11	6-13	Q1床上	(12.0)	4.8		外反気味	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
			18			Q1床上	12.5	6.1	(5.2)	外反気味	〃	〃	〃	[illegible]	〃	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			19	14-12	6-14	Q1床上	12.4	5.1	3.9	外反気味	〃	〃	〃	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			20			Q1床上		6.6		外反気味	〃	〃	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃
			21	14-13	6-15	Q1床上	12.1	5.5	2.3	外反気味	〃	〃	回転糸切	[illegible]	—	〃	〃	〃	[illegible]
			22	14-14	6-16	〃	11.3	6.2	2.7	〃	〃	〃	〃	[illegible]	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			23			〃	13.0			外反気味	—	〃	—	〃 〃	〃	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			24			〃		6.0		—	平底	〃	回転糸切	[illegible]	[illegible]	〃	〃	〃	[illegible]
		耳皿		14-15	6-17	カマド西P	10.0	5.1	2.5	[illegible]	[illegible]	ロクロ	回転糸切	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
		甕	1	14-16	6-12	東P3	21.2			[illegible]	平底	[illegible]	不明	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			2	14-17	6-19	Q1P3東	15.4			〃	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	〃	[illegible]
			3	14-18	6-20	カマド西P	14.8	6.4		〃	平底	〃	不明	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	[illegible]	[illegible]
			4	14-19	6-21	〃	10.8			〃	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃 〃	〃	[illegible]	[illegible]
			5	14-20	6-18	Q1〃	14.9			[illegible]	—	〃	—	[illegible]	[illegible]	〃 〃	〃	〃	[illegible]
	須恵器					東P3								[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	〃	[illegible]



第14図　第4号(Cq68)竪穴式住居跡遺物　縮図1：3

〔**壁**〕　北東隅より西にかけて段状の平坦部及び凹部があり、壁は直に立たない。西壁は既述の通り張り出しを有するが中央部には凹部も認められる。東壁北半部カマド近くは土壙様落込により張り出している。南東部にも小凹凸がある。

〔**床面**〕　断面図に示されるごとく平坦ではなく、緩い凹凸となっている。土壙及びカマド周辺の落込みが見られる。

〔**柱穴**〕　明確に断定出来るものはない。落込みにおいても配置等より関連づけは難しい。

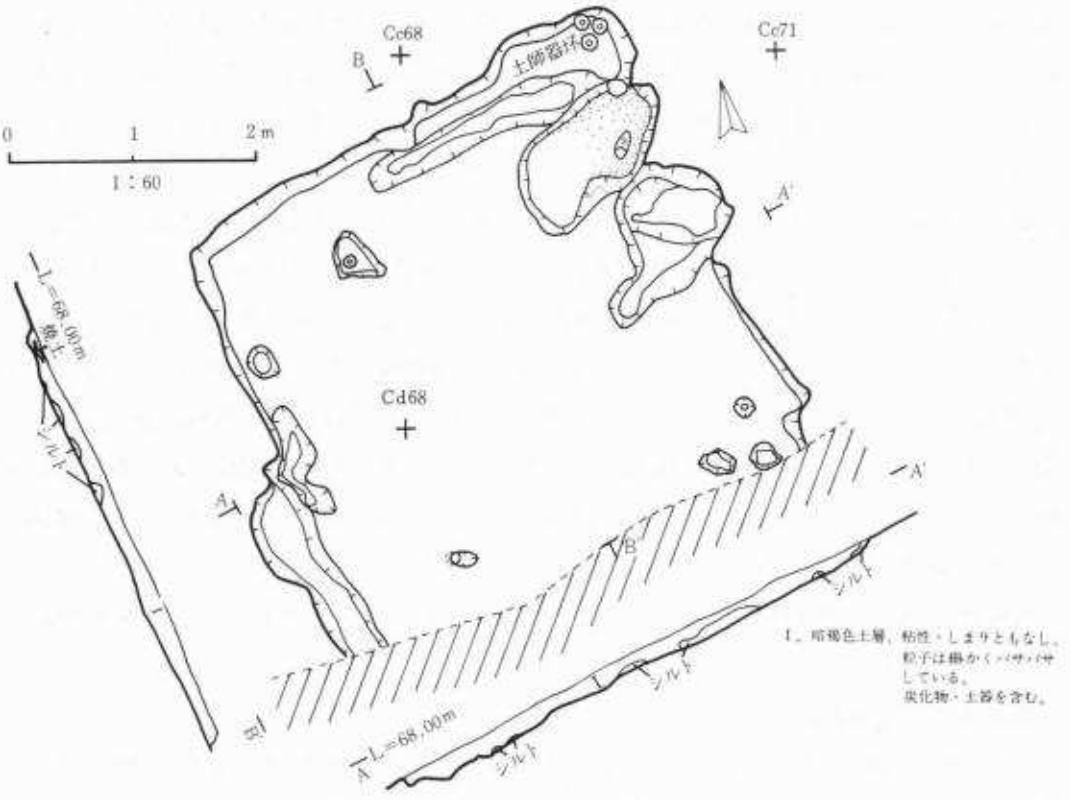
〔**カマド**〕　川原石２個を用いて袖を構築している。焼土も厚くよく焼けている。東端に土師器甕の口縁部を置いている。煙道、煙出し等は確認できない。東壁の北東隅近くに構築されて居り、壁を抉ぐり張り出させてある。その壁際に土師器片が散布している。

〔**貯蔵穴**〕　埋土中より土器が出土、深さは約35cmである。既述の通りカマド南側に設けられている。

〔**遺物**〕（第16図、５表・写真３～４図）

〔**土師器**〕：**坏**　台を除く他は全てロクロ成型である。磨耗にて不明な二三を除けば全て回転糸切離し技法を施してある。完形品は 2)と 4)の２個体である。完形に近い物は 3)の１個体である。これらは他遺跡にて赤焼き土器と呼んでいる。これら 2) 3) 4)はカマド北側、住居跡北東隅にまとまって出土したものでその状況は写真３図に示してある。この事から唯一のセット関係を示す資料と考えたい。出土位置としても日用品を使用しやすいカマド近くであり上記関係を充分満足すると思われる。2)は外面にロクロ成型痕が凹凸をともなって見られるが、表面は虫喰状に剥離している。全体的には厚手で幾分ゆがみも見られる。3)は半欠品である。技法等 2)と同様であるが、底部内面に臍様の凹部があり、2)より１回り小さい。4)は 3)より更に1回り小さい。外面には媒様のものが少量付着している。歪みは少しあるが(2)の様な外面の凹凸は見られない。底部内面には、中央部に凸部が残っている。2) 3)に比して口縁は外反している。5)は 3)とほぼ同じ大きさであるが口縁は外反気味である。角閃石が目立つ。6)は 2)～5)と比して薄手である。下部外面は 2)の様に凹凸が激しい。7)は底部と体部が接合しない内黒処理のものである。高台で出土位置が同じもので胎土、外見とも酷似しており同一と思われる。これらを図上にて合成して図示してある。器形としては高台に見られる開いたものである。8)は当住居跡出土坏中で最大の径をもっている。内黒処理が施され放射状の箆磨きが明瞭に認められる。(口縁近くは水平に磨いてある。)底周部は箆削りであり、体底の境界は不明瞭である。体下部にも同様な調整が認められる。9)は幾分小振りで内黒処理を施されている。箆磨きは 8)と同様に行なわれている。外面調整についても同様に行なわれている。10)は外反する口縁を持ち 7)と同様高坏に似た器形を取る。幾分厚手である。底体部と口縁部は接合しないが同一と思われる。底体部の境界は 8)と同様な外面調整を施されている。11)はカマド及び小土壙中より出土し、

SYT74Cc65住居址



第15図　第5号(Cc65)竪穴式住居跡

器面が虫喰状に剝離したものである。口縁部と底部は接合しないので器高値は算出出来ない。12は厚手で大振りの器形である。外面底体部境界は削りの後磨いてある。口縁までの撫では粗末である。内面は底部に幾分の凹凸はあるがほぼなめらかな曲線をもって立ち上がっている。内面に朱様の物質が付着している。13は軟質の磨耗片である。14は円盤状に平らな口縁片である。2片のみ。15は14より彎曲が増し下部側に段を有するものである。16は第4号(Ca68)住居跡出土物に類似のものである。17は小振りで当住居跡出土中最小のものであり口縁は極弱く外反する。18は6)に似た外反の具合を示し、虫喰状の剝離が器面に見られる。19は小振である。小破片ながら口縁部より底部まで接合する。20は立ち上りが急で口径も大きい。炭質物の浸透のためか暗い色調を帯ぶ。

以上の内1) 7) 8) 9) 12) 20)は内黒処理を施されているが20)のQ_3埋土出土を除いては、カマド焼土中よりの出土である。3) 4) 5) 7) 8) 10) 11) 12) 14) 15) 18) 19)の胎土中には角閃石と思われる有色鉱物が混入している。

：高坏（台）　坏中にも台付のものがあるが、類似（同一物）片が判別出来ないものをここにまとめた。出土位置もほぼ同じ物5片である。その中には底部の小片もあるが図化に際して省略した。(台)については最大厚約1cmで外面はほぼ直線的に端部に達するが、内面は厚さを減ずる形で反り端部に至る。台部径、器部底径の算出不可能である。手捏ねであり、胎土は後述の甕と似ている。

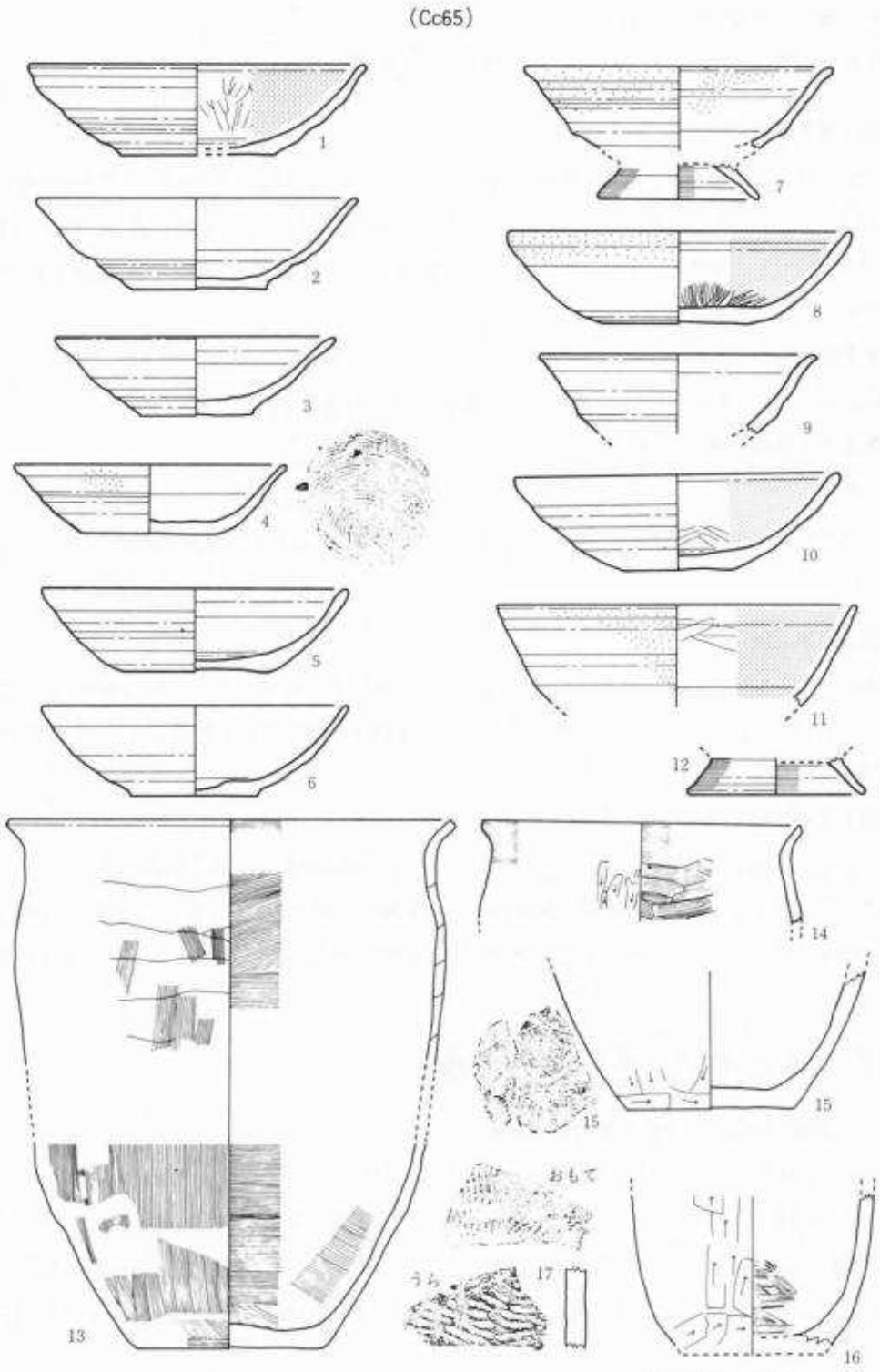
：甕（第16図13～16、第5表、写真4図13～17）　出土数は少い、口縁部より底部まで接合出来たものは 1)だけである。1)はカマド煙出し口として口縁部が使用されたと思われる。外面は受熱により、部分的に光沢を有する。出土状況は写真3図に示してある。2)外反気味であるが短かくて反るまでに至らない。外面及び内面調整よりはロクロ成型とは認め難い。胎土は台として図示したものに類似する。3)は口縁部を欠くが、1)に次いで接合片の多かった遺物である。内面は変色が大で胎土面の様な明るい色調は示さない。4)は外面・内面及び胎土面もほぼ同一の色調を示す。計測の仕方によるのか、胴部はあまり膨らまない器形に作図出来る。3)と同様に底体部は整形のための調整が施されている。

〔須恵器〕：甕　体部1片のみである。叩目は交差して施している。割れ口内面寄りの中間部は灰赤色を呈する。

第6号（Bf71）住居跡

本住居跡は検出に際し、四辺の内、西北部の一部と見られる落込みが確認されたのみで調査の対象とし得ない物であった、従って遺構配置図よりも省略してある。

第5表				図番号	写真番号	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 炎	良否	備考
第5号(Bf○)竪穴式住居跡出土土器	土師器	坏	1	16－1	3－1	Q₁カマド	13.4	4.6	3.4	外反気味	平 底	ロクロ	回転糸切	石英 [illegible]	撫 で	黒 色	酸化	良	完, 内黒[illegible]
			2	16－2	3－2	Q₁P₄	14.5	5.4	4.0	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	撫 で	〃	普	[illegible]
			3	16－3	4－3	Q₁P₄	13.4	5.5	3.8	〃	〃	〃	〃	角閃石〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			4	16－4	4－4	Q₁P₄	13.3	5.8	3.2	外 反	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	良	[illegible]
			5	16－5	4－5	Q₁P₄	12.8	6.2	3.7	外反気味	〃	〃	〃	〃 〃	撫で一部削り	撫で一部磨き	〃	普	[illegible]
			6	16－6	4－6	覆土	11.6	4.6	3.7	外 反	〃	〃	〃	石英 [illegible]	撫 で	撫 で	〃	良	[illegible]
			7	16－7	3－7	Q₁覆土	13.5	5.2	5.5	〃	〃	〃	〃	角閃石〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			8	16－8	4－8	Q₁覆土	15.2	6.6	4.1	外 [illegible]	〃	〃	〃	〃 〃	[illegible]	黒 色	〃	〃	[illegible]
			9			Q₁覆土	13.3	5.4		外反気味	〃	〃	〃	石英 [illegible]	〃	〃	〃	普	[illegible]
			10	16－9	3－9	Q₁カマド	10.6	4.4		外 反	〃	〃	〃	角閃石[illegible]	〃	撫 で	〃	〃	[illegible]
			11			Q₁カマド	11.4	5.2		〃	〃	〃	〃	〃 〃	撫 で	〃	〃	〃	[illegible]
			12	16－10	4－10	Q₁カマド	14.2	5.0	4.1	外反気味	〃	〃	〃	〃 [illegible]	撫で一部磨き	黒 色 [illegible]	〃	良	[illegible]
			13			Q₁覆土		5.0		〃	〃	〃	〃	石英 〃	撫で削り	〃	〃	普	[illegible]
			14			Q₁覆土	9.3			外反気味	－	〃	－	角閃石〃	撫 で	撫 で	〃	〃	[illegible]
			15			Q₁	8.3			〃	－	〃	－	〃 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			16			Q₁		4.8		－	平 底	〃	回転糸切	[illegible] 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			17			Q₁	8.8			外反気味	－	〃	－	石英 [illegible]	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			18			Q₁	10.7			外 反	－	〃	－	角閃石〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			19			Q₁	10.3	5.2	3.9	外反気味	平 底	〃	回転糸切	〃 〃	〃	〃	〃	〃	[illegible]
			20	16－11	3－11	Q₁	15.2			〃	－	〃	－	石英 [illegible]	〃	黒 色 [illegible]	〃	〃	[illegible]
		台付		16－12	3－12	Q₁カマドP		7.2		－	[illegible]	ロクロ	－	角閃石[illegible]	撫 で	撫 で	酸化	普	[illegible]
						カマド				－	〃	不 明	－	〃 [illegible]	〃	〃	〃	〃	[illegible]
		甕	1	16－13	4－13	カマド・Q₁覆	20.4	11.0	23.7	[illegible]	平 底	非ロクロ	－	石英 〃	撫で、刷毛目	撫で刷毛目	〃	〃	[illegible]
			2	16－14	4－14	カマド	9.8			外 [illegible]	－	〃	－	角閃石〃	〃	〃 〃	〃	〃	[illegible]
			3	16－15	4－15	カマドQ₁		8.2		－	平 底	不 明	不 明	〃 〃	刷毛目、削り	〃 〃	〃	〃	[illegible]
			4	16－16	4－16	カマド[illegible]		8.4		－	〃	〃	〃	石英 〃	[illegible]	〃 〃	〃	〃	[illegible]
	須恵器			16－17	4－17	Q₁覆土								[illegible] 〃	叩目[illegible]	[illegible]	還元	〃	[illegible]



第16図　第5号(Cc65)竪穴式住居跡　出土遺物 (1～12＝1：3 / 13～17＝1：4)

(3) 溝 （3図、写真1図）

全部で6条検出した。その内の3条は掘りも深く連続の具合も比較的追跡しやすい。

第1号東西溝

巾約1m、長さ約48m、深さ平均約40cm、高低差約14cmで西から東に向って傾斜し、東端では、巾2m、深さ1m以上になっている。堆積土は黒色腐植質とシルト質の混土である。出土遺物は土師器片3である。Ba56地点付近にて第3号南北溝が接続している。調査範囲外の東西にそれぞれ続くものと考えられる。

第2号東西溝

巾約0.5m、長さ約9mで浅い、削平された東端部にて消滅している。

第1・2号南北溝

それぞれ、巾平均約30cm、長さ16cmである。地形は北に傾斜しており、その途中より始まって、第1号東西溝をBc03付近において横切っている。堆積土は灰褐色土でゴマ塩状に火山灰が入っている。

第3号南北溝

巾約1m、長さ約40m、深さ平均約47cmで北に走る。北側底部は南側より約30cm低い。堆積土は南側にて黒色腐植土が大半だが北側は第1号東西溝と同じになり接続していく。方形土壙を切っており南側は2条になっている。

第4号南北溝

巾平均約50cm、長さ約57m、深さ平均約39cmである。西側において南北約30mの長さ、その北端にて東に約7m、その東端で北に約10m、その北端にて東に約11mと延びる曲折した形状である。底面の標高は、西側の西北部で次の東西部より50cm程低いが、その東西部より先では東に約70cmの差をもって傾斜している。

Ⅳ まとめ及び今後の問題点

1．遺構とその出土遺物の年代について

本調査地検出遺構の竪穴式住居跡の概要とその年代について考察して見る。

既述の8棟の各項目に関するものを第6表のごとくまとめて見た。

〔遺構〕〔保存状況〕 残存壁高平均約30cmであるが、第3号（Bj71）住居跡の残存量が一番大きい。（この住居跡については他の2棟との重複切り合い問題がある。）他については住居範囲の不明なものもある。

〔平面形・規模・カマド方位〕 第4号（Ca68）住居跡の東西に長い方形を除けばほぼ正方形

に近く等規模である。方位は大略、東及び南向きで、第2号（Bj 74）住居跡だけが北を向く。

〔**堆積土**〕　第3号（Bj 71）住居跡における人為的埋設は多層に恒るが、他は単層が多い。

〔**壁**〕　保存状況でも述べた通り、上部以上の構造を知る手掛りは少い。第4号（Ca68）住を除いては壁の張り出し等が見られる。

〔**床面**〕　明確な貼床は第4号（Ca68）住居跡でこれは構築上の制約から来るものである。第3号（Bj 71）住に於いてはカマド付近に薄く貼り土が見られる。第5号（Cc65）住居跡にては床面の凹凸状況より存在の可能性も考えられる。

〔**柱穴**〕　明確に配置が知り得たものはなく、第3号（Bj 71）住居跡及び第4号（Ca68）住居跡で複数確認したのみである。住居外の存在も考慮しなければならないかと思われる。

〔**カマド**〕　構築に際して石が使用され残存状況が良いのは第3号（Bj 71）住居跡である。煙道は、第4号（Ca68）・第5号（Cc65）住居跡のごとく削平等の影響で不明のものもある。

〔**貯蔵穴等**〕　一般的傾向のごとくカマドに付属した形の設置が見られる。伴出遺物等では、第5号（Cc65）住居跡の北側のもの、第4号（Ca68）住居跡の西側の物が重要性をおびている。

〔**重複・切合い等**〕　第1号（Bh15）住居跡の縄文時代溝状土壙との関係、第3号（Bj 71）住居跡と第2号（Bj 74）・第4号（Ca68）住居跡との関係があるが各項の記述に重複するので省略する。竪穴式住居跡と見なし得なかった方形（Ca59）土壙と第3号南北溝との切り合いにおいて粉状パミスの介在は重要な意味をもつ。

〔**遺物**〕〔**須恵器**〕：**坏**（赤焼きのものを区別すると竪穴式住居跡にては見られない。）

「（Cb03）土壙に見られるのみである。」

：**甕**　第3号（Bj 71）住居跡にて欠く。第1号（Bh15）住は比較的多く胎土分析資料ともしたが結果については巻末資料を参照されたい。（蓋等は前述の（Cb03）土壙及び溝埋土中より出土している。）

〔**土師器**〕：**坏**　ロクロ成型で篦による整形または調整を有する底部をもつ内黒処理したものは第4号（Ca68）住居跡床面出土、第1号（Bh15）住居跡床面出土であり、その量は後者に多い。また、後者出土物と前者出土物が接合している。他に第3号（Bj 71）住にも出土が見られるが前者よりは多く後者とほぼ同じ位の量である。第5号（Cc65）住居跡小土壙及び焼土よりの出土物は篦による調整が認められる。量的には先の前者並かそれ以下であり少い。

ロクロ成型、回転糸切離し技法（無調整）で赤焼きのものは、第5号（Cc65）住居跡貯蔵穴

第6表	東西 m	南北 m	壁高 cm	カマド方位	煙道等	柱穴	周溝	出土遺物等
1号Bh15住	4.0	4.4	2.0	E12°S	有	無	無	土師（内黒坏ロクロ有調（回転糸切）、刀子
3号Bj71住	4.0	4.4	7.0	S43°E	有	有	有	土師器（大型内黒坏、台）
2号Bj74住	不明	不明	2.0	N15°E	有	不明	不明	（土師・回転糸切）
4号Ca68	4.7	4.2	3.0	S10°E	無	有	無	土師器（内黒坏ロクロ・有調（両黒坏、甲類）
5号Cc65住	4.0	（4.0）	1.0	E13°N	不明	不明	無	赤焼き土器、高台坏、土師器（甲・十ク）

出土が多い。

：甕　ロクロ不使用で完形に近いものは第５号（Cc65）住カマド出土の１個体のみである。他に破片等では第４号（Ca68）住居跡東小土壙・第１号（Bh15）住居跡Q_3埋土出土の物がある。

：その他　第４号（Ca68）住居跡カマド西小土壙に耳皿が出土している。

〔その他〕：鉄製品　第１号（Bh15）住居跡に刀子が１振出土している。

〔時期及び年代・その他〕　巻末資料に基づく編年を当遺跡住居跡に対応させて見る。第５号（Cc65）住居跡出土物の赤焼き土器に着目するならばⅩ群（平安時代後期～末期）の11世紀代に、他はⅨ群（平安時代前期～後期）の様相を示すように考えられる。その内で第４号（Ca68）住居跡は切合い関係より幾分新しい物になろうが耳皿のみに限って見ると水沢市胆沢城出土の類似黒色土器は９世紀前葉の時期をあてて居りⅧ群に相当する。（９世紀代埋土には須恵器蓋も出土している。当遺跡にては円形土壙及び溝よりの出土が見られるが、円形土壙の物はその鈕の形及び器面の開き方より最終期の７世紀前半～７世紀後半以降のものにあたる。これら特殊用途をもつ器はその使用される場所の機能が停止されるまで保管されるという事であり廃棄時期がずっと後になる。例えば９世紀代のものが11世紀代の埋土層にまとまって出土するとかの事も知られている。）

２．遺跡の年代等

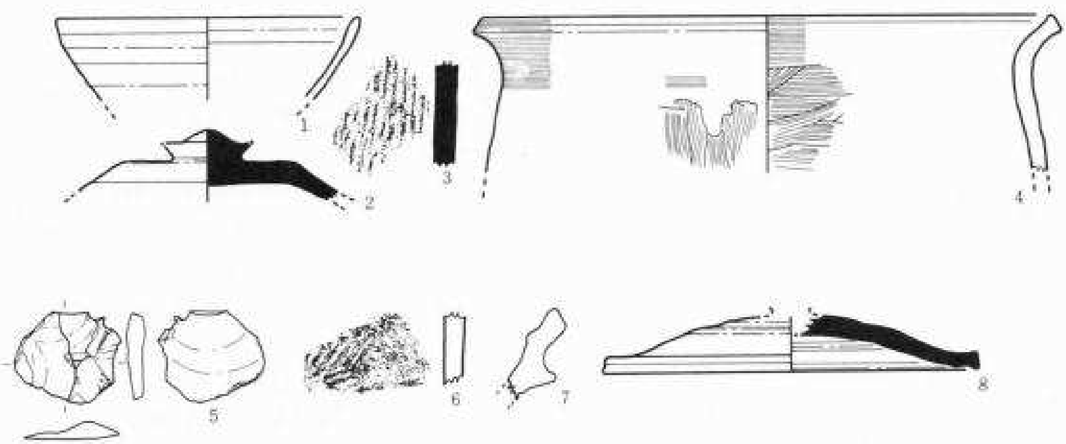
本遺跡の年代については既述のごとく縄文時代中期の出土物よりそれ以降、平安時代までの時間経過が考えられるが、本調査関連、南矢中遺跡と同様に長い空白の時間経過を有している。遺跡としての空間使用は一番平安時代が多かったと思われるが、縄文期の或る一時期の猟場としての可能性は留意したい。

遺跡としての空間的広がりは地形の広がりに沿った東西への延長が考えられさらに平安期においては見分森遺跡、南矢中遺跡、西田、前谷地遺跡との関連が深かったろう事が考えられる。それらの詳細についての解明は今後の研究結果に待ちたい。

第7表				図番号	写真番号	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 [illegible]	[illegible]	備考
A区溝	土師器	坏	1			埋土	(9.0)	5.8		(外反気味)	平底	ロクロ	回転糸切	細砂 粒	—	—	酸化	普	黄橙 内黒 [illegible]
			2			埋土	8.4			外傾気味	—	ロクロ	—	細砂 粒	—	ヘラ磨き	〃	〃	黄橙
		甕	1			埋土		6.1		—	平底	非ロクロ	(網 痕)	浮石 普	箆削り	刷毛目	〃	〃	黄橙 第5号住居跡[illegible]
			2			埋土	(29.0)	(13.0)		複合	〃	ロクロ	まくら	石英 粒	箆削り	箆撫で	〃	不良	灰白，第4号住居P[illegible]
Ba区溝	土師器	坏	1			埋土		4.7		—	〃	ロクロ	回転糸切	粘土 普	—	—	〃	〃	浅黄橙，摩耗，[illegible]
			2			埋土	—	5.0	—	—	—	ロクロ	回転糸切	〃 〃	—	ヘラ磨き	〃	普	黄橙，内黒，焼土まみれ
		甕	1	—		埋土	—	—	—	複合	—	非ロクロ	—	角閃石〃	箆削り，撫で	撫で箆削り	〃	〃	黄橙，第5号住居跡[illegible]
	須恵器		蓋	17－8	第1図	埋土	(13.1)	—	—	(複合)	—	ロクロ	—	粗砂 〃	—	—	還元	〃	灰，[illegible]
[illegible]	[illegible]	坏				黒色土	—	—	—		平底	不明	不明	細砂 〃	摩耗	摩耗	酸化	〃	浅黄橙，内黒？
	[illegible]	甕				黒色土	—	—	—	—	—	不明	不明	石英 〃	(摩耗)	不明(撫で)	還元	〃	灰黄，体部片

第8表				図番号	写真番号	出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	口縁部形態	底部形態	成形技法	底部切離技法	胎土含有物	調整 外面	内面	焼成 [illegible]	[illegible]	備考
円形(Cb03)土壙遺物	土師器	坏	1	—		Q5，Q7	10.4	(6.2)		外反	平底	ロクロ	回転糸切	石英 普	磨耗	磨耗	酸化	普	黄橙(内黒？)
			2	17－1	10－1	Q5，Q6	11.8	(7.2)		直口	平底	〃	〃	角閃石〃	撫で	磨き	〃	〃	橙，内黒
			3	—		Q5		5.6			〃	〃	〃	浮石半点	磨耗	磨耗	〃	不良	浅黄，[illegible]
			4	—		Q5		7.6			〃	〃	〃	石英 普	磨耗	磨き，磨耗	〃	普	橙，内黒
		甕	1	17－4	10－2	Q7				複合	—	〃	—	角閃石〃	撫で，箆削り	撫で，刷毛目	〃	〃	[illegible]
			2	—		Q7				複合	—	〃	—	[illegible] 〃	撫で	撫で	〃	〃	[illegible]
	須恵器	坏	1	—		Q5	9.4			外傾気味	—	〃	—	石英 〃	撫で	撫で	還元	〃	灰白
			2	—		Q5	7.1			外傾気味	—	〃	—	〃 〃	撫で	撫で	〃	良	灰白，[illegible]
		甕	1	—		Q5				—	—	〃	—	浮石 〃	撫で，箆削り	刷毛目	〃	普	灰(黒)
			2	17－3	10－3	Q7				—	—		—	角閃石〃	[illegible]	刷毛目	〃	良	灰
			蓋	17－2	10－4	Q7				—	—	ロクロ	—	〃 〃	撫で	撫で	〃	普	灰，[illegible]

第9表	図番号	写真番号	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(m)	方位	埋土	出土遺構	備考
第1号溝状土壙(Bi15)	6－1	8－a	3.20	0.40	0.60	N16°W	4層 自然堆積		
第2号溝状土壙(Be06)	6－2	8－c，d	3.21	0.40	0.76	N34°E	4層 自然堆積		
第3号溝状土壙(Bj68)	6－3	8－b	2.90	0.46	0.88	N5°W	4層 自然堆積		
第4号溝状土壙(Bk12)	6－4	—	3.12	0.35	1.08	N4°E	不明	第1号(Bk15)住居跡	



第17図　〔1〜4．円形土壙(Cb03)出土遺物〕　縮図1：3
〔5．石器，Bj71〕〔6．縄文片，A区 I層クリーニング〕〔7．甕口縁〕〔8．須恵器蓋，Ba区溝〕

《参考文献》

(自然科学関係)

中川　ほか　北上川中流沿岸の第四系及び地形(地史)　地質学雑誌第69巻812号　1963.5
日本地質学会第80年総会見学旅行２資料　北上川低地帯の鮮新統第四系地形　1973

佐藤二郎　考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料—　1978.8

町田　洋　火山灰　岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料　1979.6
考古学と自然科学　第１号～第10号

経済企画庁　土地分類基本調査　水沢(１：５万)　国土調査　1963

岩手県農政部北上山系開発室　北上山系開発地域土地分類基本調査　北上(1：5万)　国土調査　1978

北上市教育委員会　北上市教育センター理科講座資料

(縄文時代関係)

今村啓爾　縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較　物質文化№27

宮沢・今井　縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について—　1976
調査研究集録第１集　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

霧ヶ丘調査団　霧ヶ丘　1973

岩手県教委・日本道路公団　岩手県文化財調査報告書第31集　本調査関連報告書—Ⅰ—　1979

(財)埋文センター　岩手県(財)埋文センター報告書第２集　都南村湯沢遺跡　1977

(古代関係)

水沢市教育委員会　岩手県水沢市佐倉河　胆沢城跡—昭和49～54年度発掘調査概報—

多賀城跡調査研究所　宮城県多賀城跡調査研究年報—昭和47～50年度発掘調査概報—

福島県考古学会　福島県の土師器編年(第18回福島県考古学大会シンポジュウム資料)　1976

桑原・岡田　多賀城周辺における古代坏形土器の変遷　研究紀要Ⅰ　多賀城研究所

岩手ビルKK・都南村教育委員会　百目木遺跡発掘調査報告書(岩手県都南村)　1979

県教委・国鉄　岩手県文化財調査報告書第48集　東北新幹線関係報告書Ⅳ宮地遺跡　1980

県教委・日本道路公団　〃　第32集　本調査関連報告書Ⅱ　1979

〃　〃　第52集　〃　Ⅲ「上平沢新田」　1980

渡辺泰伸　東北古墳時代須恵器の様相と編年(試論)　考古学雑誌　第65巻第４号　1980

青森県教育委員会　青森県埋蔵文化財調査報告書第52集　大平遺跡(東北自動車道関連)　1979

〃　〃　第54集　碇ヶ関村古館遺跡(東北自動車道関連)　1980

県土木部・(財)埋文センター　岩手県(財)埋文センター報告書第８集　力石Ⅱ遺跡　1979

〃　〃　第９集　54年度略報　上里遺跡　1980

〃　〃　第13集　繋Ⅲ遺跡　建設省御所ダム事務所

水沢市史編纂委員会　「水沢市史Ⅰ　原始—古代」　水沢史刊行会　1974

本堂寿一　「極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告書—付、寺院跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第３号　1980

草月・玉川　長沼古墳(岩手県和賀町)　和賀町教育委員会　1974

広島県教育委員会((財)埋文センター)　恵下遺跡　1980

神奈川県教育委員会　神奈川県埋蔵文化財調査報告17—新羽大竹遺跡—　1980

福島県教育委員会・(財)県文化センター　福島県文化財調査報告第84集　母畑地区Ⅳ　1980

石田茂作(監)　新版仏教考古学講座第７巻　墳墓　雄山閣　1975

斎藤　忠　墳墓(日本史小百科)　近藤出版社　1978

巻末資料

〔I〕 岩石学的方法による分析結果

Ⅰ．はじめに

土器の製作地推定のため岩石学的方法で分析を行なった。

Ⅱ 資　料

胎土分析用資料一覧（第1表・第2表）

Ⅲ 分析方法

① 資料25個をカナダバルサムで固定し100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。

② 偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類及び構成を調べた。

③ 1つの資料について500～1000個の粒子について検討を行なった（0.05mm以下の鉱物は基質として扱った）。

④ 鉱物、岩種別構成から粘土の産地の地質を推定し、製作地を考察した。

Ⅳ 結　果

1．各資料の鉱物組成、岩片構成、特徴は第2表のとおりである。

2．灰色、緻密で硬い須恵器、土師器はかなりの高温（トリデマイト、ムライトが生ずる以上の温度）で焼かれたことが確認された。

3．どの土器についても、石英・斜長石の鉱物の破片結晶が大半を占め、少量の輝石・角閃石・黒雲母の他にジルコン・ザクロ石・リン灰石・ルチル鉄鉱を含むことがある。

4．岩片としては、チャート・珪岩・ホルンフェルス・花崗岩・花崗斑岩・アプライト及び安山岩が含まれる。

5．共在する岩片や顕微鏡下の特徴から推定すると、石英・斜長石・黒雲母・角閃石はほとんど花崗岩起源であり、ジルコン・リン灰石なども花崗岩中によく含まれている鉱物である。これらの鉱物は全く円磨された証拠は認められない。

6．輝石類の供給源は多くが自形の柱状結晶であること、変質が少ないこと、脱ガラス化しない新鮮な火山ガラスと共存すること、安山岩片はかなり少いことなどから考えると、ローム起源であることが推定される。

7．粘土の給供源としては、チャート・ホルンフェルス・珪岩などからなる古生層と花崗岩類が分布し、さらに安山岩質のロームにおおわれる地域が推定される。

8．肉眼的および顕微鏡的特徴から8つのタイプに区分された。

typeA：灰色、緻密、硬く、石英・長石類を主とし輝石を伴なう。岩片としてチャート・ホルンフェルス・花崗岩を含む。　資料№1・4～6・8・9・11・13・17・18・22

typeB：typeAに鉱物・岩石の組成が類似するが少々異なり、色や製作上の技術にも差が見

られるタイプ。　資料No 3・7・15・16・19・20・25

typeC：輝石安山岩・文象斑岩の岩片を多量に含むタイプ。　資料No10

typeD：レンガ色で軟かく、チャート・ホルンフェルス岩片と石英・長石類で構成され、輝石を含まない。　資料No12

typeE：レンガ色、緻密、細粒で硬い。石英・長石類で構成され、有色鉱物を含まないタイプ。　資料No14

typeF：こげ茶色で花崗岩起源の石英・長石および珪岩から構成される。　資料No21

typeG：黒雲母・角閃石・ホルンフェルス・花崗岩などから構成される。　資料No23・24

typeH：灰色、緻密、輝石・角閃石の有色鉱物と流紋岩・ホルンフェルス・チャート岩片を含む。　資料No 2

各タイプの供給源は、typeA・Bは古生層・花崗岩・ローム、typeCは輝石安山岩・花崗岩類、typeD・E・F・Gは古生層・花崗岩、typeHは古生層・花崗岩・酸性火山岩地帯である。typeAやBのように、異なる時代及び比較的離れた地域で同類あるいは類似のものが見られることは非常に興味ある問題を含んでいる。今後さらに時間的、面的な資料の分析を行ない、検討することが大切になろう。

第1表　胎土分析用資料

No	遺跡名	遺構名	種別	技法	備考
1	盛岡　太田方八丁	Rh06住、床	須恵器　坏	麗切or 麗削	志和城郷定地、官衙遺跡内の住居跡
2	水沢　相沢城	C区　SD190、9層下部	〃　〃	口縁部	
3	江刺　瀬谷子		〃　〃	回転糸切・無調整	集跡
4	北上　藤沢		〃　〃	〃　〃	〃
5	紫波　杉の上		〃　〃	回転麗切・無調整	〃
6	水沢　見分森		〃　〃	口縁部	〃
7	〃　南矢中	Bc71住	〃　〃	回転麗切・無調整	集落跡
8	〃　石田	Da30住	〃　〃	口縁部	〃
9	〃　〃	Bj65住　Po	〃　〃	体部	〃
10	〃　〃	Ch71遺構	江別式？	〃	集落跡内の掘り込み
11	〃　西大畑	CjDa27　Ib	須恵器　甕	〃	集落跡内の包含層
12	〃　〃	Cf53住	土師器？　〃？	〃　ロクロ成形	集落跡、酸化焔焼成
13	〃　今泉	Ca09住　埋土	須恵器　甕	〃	〃
14	〃　〃	Ai62住	土師器　坏	口縁部　ロクロ成形	〃　酸化焔焼成
15	〃　〃	Bd12住　埋土	須恵器　甕	体部	〃
16	金ヶ崎　鳥ノ海A	5号住　床	土師器　坏	回転糸切・無調整	〃　酸化焔焼成
17	〃　鳥ノ海B	Bg62住	須恵器　〃	口縁部	〃
18	〃　西根	Ba71住　埋土	〃　〃	〃	〃
19	〃　〃	Cf03　Pit	土師器？　〃	〃	〃　酸化焔焼成
20	〃　土鮮田	Bc62住　No28	土師器　〃	丸底・ミガキ・内黒	〃　〃
21	〃　〃	Cc53住　No19	須恵器　甕	体部	〃
22	石鳥谷　大地滝	Cf65住	〃　坏	口縁部	〃
23	〃　〃	De50住　Qi	土師器？　〃	〃　ロクロ成形	〃　酸化焔焼成
24	〃　〃	De50住　Qi	土師器　〃	〃　ロクロ成形・内黒	〃　〃
25	水沢　無谷地	Bi15住	須恵器　甕	体部	〃

図版説明　—凡　例—

Q：石英　Ho：角閃石　a：リン灰石　C：チャート　G：花崗岩　Po：玢岩

P：斜長石　Py：輝石　ga：ザクロ石　H：ホルンフェルス　Gp：花崗斑岩　An：安山岩

K：カリ長石　Z：ジルコン　g：火山ガラス　q：珪岩　A：アプライト　R：流紋岩

第2表　資料分析結果

〔Q：石英、Pl：斜長石、K-F：カリ長石、Bi：黒雲母、HO：角閃石、Py：輝石〕

No	遺跡	時代	遺構	種別	技法	性格	肉眼的特徴	鉱物 Q	Pl	K-F	Bi	HO	Py	鉱物 所見	組成 岩片	組成 源岩	備考
1	太田方八丁	平安時代(初)	Rf06住	須恵器坏	ヘラ切りかヘラ削り	官衙内住居跡	(色) 灰 (組織) 砂質シルト岩状緻密 (鉱物) 石英、無色鉱物 (岩片) 白色	+++	+	+	−	−	+	Q：波動消光を示さない。虫食状の溶蝕が認められる。(酸性火山岩起源?) Py：斜方輝石 Pl：アルバイト双晶	Chert 〜 Granitic Rocks (Aplite)	古生層　花崗岩 + ローム(輝石安山岩質)	Plate 1 1〜4
2	田沢城	同上	CIX SD190 9層下部	同上	口縁部	官衙	(色) 灰 (組織) 緻密、硬い (鉱物) 多量の無色鉱物と少量の有色鉱物を含む (岩片) 白色	+++	+	+	−	+	+	Q：波動消光を示す汚れた外観を与えるものと、それを示さないものがある。 Ho：Z=褐色、X=淡褐色の柱状結晶 Py：単斜輝石(Augite) その他：ルチル	Chert 〜 Hornfels 〜 Rhyolite(?)	古生層　花崗岩 + 酸性火山岩 + ローム(単斜輝石安山岩)	Plate 3 1
3	瀬谷子窯跡	平安時代		同上	回転糸切り無調整	窯跡	(色) 外側こげ茶、中央部黒 (組織) 緻密、硬い (鉱物) 無色鉱物)有色鉱物 (岩片) 白色	+++	++	−	−	−	+	Q：波動消光を示すものと示さないものがある。 Pl：累帯構造、カルスバド双晶、アルバイト双晶を示す。 Py：斜方輝石、鉄鉱の反応縁を示すことが多い。	Chert 〜 Granite	古生層　花崗岩 + ローム(斜方輝石安山岩)	Plate 2 1〜4
4	藤沢窯跡	平安時代?		同上	同上	同上	(色) 灰 (組織) 粗粒、硬い (鉱物) 無色)有色 (岩片) 白色	+++	+	+	−	−	+	Q：弱い波動消光を示す。 Py：斜方輝石 その他：鉱物の組織を持つ破片、trydymiteを生じる。	Chert 〜 mudstone	古生層　花崗岩 + ローム(斜方輝石安山岩質)	Plate 5 2〜4
5	桧ノ上窯跡	平安時代(初)		同上	ヘラ切り無調整	同上	(色) 灰 (組織) 緻密、硬い (鉱物) 石英結晶がめだつ。無色鉱物も多い。 (岩片) 細かい白色岩片、茶色	+++	+	+	−	−	−	Q：波動消光を示すものが多い。 Pl：かなり変質、累帯構造を示す。	Chert 〜 Quartzite	古生層　花崗岩	Plate 4 1〜2
6	見分森窯跡	同上		同上	口縁部	同上	(色) 灰 (組織) 緻密 (鉱物) 無色鉱物)有色鉱物 (岩片) 白色	++	++	−	−	−	++	Q：波動消光を示さない。 Pl：アルバイト双晶 Py：斜方輝石、多色性極めて弱い。 その他：少量の単斜輝石(Augite)が認められる。	Chert 〜 Aplite (あるいはQuartzite)	古生層　花崗岩 + ローム(複輝石安山岩質)	Plate 5 1〜4
7	南矢中	平安時代	Bc71住	須恵器坏	回転箆削り	集落	(色) ネズミ (組織) 緻密 (鉱物) 石英がめだつ。 (岩片) 白色細粒岩片	+++	+++	+	+	−	+	Q：波動消光 Py：斜方輝石	Chert 〜 ガラス質安山岩	古生層　花崗岩 + ローム(安山岩質)	Plate 6 1〜4
8	石田	奈良時代(末)	Da30住	同上	口縁部	同上	(色) 淡灰 (組織) 細粒、緻密 (鉱物) 石英がめだつ (岩片) 少量の白色岩片	+++	+++	−	−	−	+	Q：波動消光を示さない。 Pl：アルバイト双晶、累帯構造 Py：斜方輝石、鉄鉱の反応縁を持つ。 その他：鉄鉱が多い。	Chert 〜 Aplite (あるいはQuartzite)	古生層　花崗岩 + ローム(斜方輝石安山岩質)	Plate 7 1〜4
9	同上	平安時代(前)	Bj45住	同上	体部	同上	(色) 灰 (組織) 粗粒、緻密 (鉱物) 少ない。無色鉱物)有色鉱物 (岩片) 白色	+++	++	−	−	−	+	Q：波動消光 Py：単斜輝石(Augite) その他：trydymiteのクサビ型双晶が認められる。	Chert 〜 Granite Porphyry	古生層　花崗岩 + ローム(単斜輝石安山岩質)	Plate 4 3〜4
10	同上	奈良時代?	Cf71溝	[illegible]	同上	集落内の溝状遺構	(色) 表面こげ茶、中央黒* (組織) 粗粒、緻密、軟かい。 (鉱物) 肉眼的には、ほとんど認められない。 (岩片) 少量	++	+++	−	−	−	++	Py：斜方輝石 その他：安山岩に2つのタイプが認められる。 1、輝石の斑晶を多く含み、石基が斜長石の柱状結晶からなるもの。 2、輝石の斑晶が少なく、石基が針状の斜長石からなるもの。	Chert Hornfels 〜 Pyroxene Andesite 〜 Granophyre Porphyrite	古生層 + 輝石安山岩 + 花崗斑岩　珪岩類	Plate 8 1〜4 Plate 9 1〜2
11	西大畑	平安時代	CiDa27	須恵器甕	同上	遺物包含層	(色) 灰 (組織) 細粒、緻密、硬い (鉱物) 石英斑晶が目立つ。無色及び有色鉱物を含む。 (岩片) 白色	+++	+++	−	−	−	++	Q：α石英、β石英の両者を含み、波動消光を示すものもある。 Py：斜方輝石、z=淡緑、x=淡褐色の極めて弱い多色性を示す。	Chert 〜 Hornfels Quartzite (あるいはAplite) 〜 Pyroxene Andesite	古生層　花崗岩 + 輝石安山岩(及びローム)	Plate10 1〜4
12	西大畑	古墳時代(末)	Cf53住	土師器坏?	体部	集落	(色) レンガ色 (組織) 軟質 (鉱物) 石英が認められる。 (岩片) 赤レンガ色、白色	+++	+++	−	−	−	−	Q：弱い波動消光を示す。抜石物が多く Pl：Granite起源と考えられる。	Chert 〜 Hornfels	古生層　花崗岩	Plate 9 3〜4
13	小泉	不明	Ca60住埋土	須恵器甕	体部	集落	(色) 灰 (組織) 細粒、緻密 (鉱物) 無色鉱物)有色鉱物 (岩片) 白色	++	+++	−	−	−	++	Py：斜方輝石)単斜輝石。斜方輝石は紫蘇輝石であるが多色性が著しく弱い。 火山ガラスをかなり含む。	Chert 〜 Quartzite	古生層　花崗岩 + ローム(複輝石安山岩)	Plate11 1〜2
14	同上	平安時代	Aj62住	酸化炎焼成坏	ロクロ口縁部	同上	(色) レンガ色 (組織) 細粒、緻密 (鉱物) 無色鉱物のみが認められる。 (岩片) 認められない。	++	++	−	−	−	−		Chert	古生層　花崗岩	Plate11 3〜4
15	同上	同上	Bd32住	須恵器坏	体部	同上	(色) 灰 (組織) 細粒、緻密 (鉱物) 石英が多く認められる。 (岩片) 白色	+++	++	−	−	−	+	Q：波動消光を示さない。 Pl：アルバイト双晶、累帯構造 Py：斜方輝石、変質は全くうけていない。 その他：リン灰石	Chert 〜 Quartzite 〜 Rhyolite(?)	古生層　花崗岩 + (流紋岩) + ローム(斜方輝石安山岩質)	Plate12 1〜3
16	鳥ノ海A	平安時代(末?)	5号住床面	酸化炎焼成坏	回転糸切り無調整	同上	(色) 黄灰 (組織) 細粒、軟質 (鉱物) 無色鉱物)有色鉱物 (岩片) レンガ色が多い。	+++	++	−	−	−	+	Py：斜方輝石 その他：biotite hornfels(しま状) Andesite；レンガ色、ガラス質安山岩変質せず。 斜長石以外の鉱物みられず。	Chert Hornfels 〜 Quartzite 〜 Andesite Porphyrite	古生層　花崗岩　珪岩 + 安山岩 + ローム(輝石安山岩質)	Plate13 1〜4
17	鳥ノ海B	同上	Bg60住	須恵器坏	口縁部	同上	(色) 灰 (組織) 細粒、緻密 (鉱物) 石英めだつ、有色鉱物も多い。 (岩片) 白色	+++	++	−	−	−	++	Py：斜方輝石 その他：紫蘇輝石、Z—淡緑、X—淡褐色 多色性の認められないことが多い。周囲を鉄鉱質のものでおおわれる。	Chert Quartzite 〜 Granophyre	古生層　花崗岩 + ローム(斜方輝石安山岩)	Plate14 1〜4
18	西根	同上	Ba71住埋土	同上	同上	同上	(色) 灰 (組織) 細粒、緻密、硬い。 (鉱物) 細粒の石英が認められる。 (岩片) 細粒の白色岩片。	+++	++	−	−	−	+	Q：波動消光を示すものと示さないものがある。 Py：斜方輝石、柱状。	Chert Quartzite 〜 Granophyre	同上	Plate15 1〜4
19	西根	平安時代(末?)	Ci60ピット	酸化炎焼成坏	ロクロ口縁部	集落内ピット	(色) レンガ色 (組織) 粗粒、軟かい。 (鉱物) 石英、長石、黒雲母及びその他の有色鉱物。 (岩片) 白色、黒色	+++	+	−	+	−	+		Pyroxene Andesite 〜 Granite 〜 Chert	安山岩 + 花崗岩　古生層	Plate12 4
20	下餅田	奈良時代(初?)	Be02住 No.28	土師器坏	丸底内黒	集落	(色) こげ茶 (組織) 粗粒、軟かい、混入不良 (鉱物) 石英を多く含む柱状の有色鉱物が認められる。 (岩片) アズキ色、白色	+++	+	+	−	−	++	Py：斜方輝石；柱状、自形 その他：きわめて稀にAugiteを含む。	Chert Quartzite Hornfels Granite	古生層　花崗岩 + ローム(輝石安山岩質)	Plate16 1〜3
21	同上	平安時代	Ce53住 No.19	須恵器甕	体部	同上	(色) こげ茶 (組織) 粗粒、硬い (鉱物) 無色鉱物多い (岩片) 茶色	+++	+	−	−	−	−	Q：波動消光を示す Pl：アルバイト双晶	Quartzite	古生層　花崗岩	Plate16 4
22	大地瀬	同上	Cf65住	須恵器坏	口縁部	同上	(色) ネズミ (組織) 細粒、緻密、硬い (鉱物) 石英がめだつ、有色鉱物を含む (岩片) 白色のみ	+++	++	−	−	−	+	Py：単斜及び斜方輝石 その他：火山ガラス	Chert 〜 Sandstone	古生層　花崗岩 + ローム(複輝岩安山岩)	Plate17 1〜2
23	同上	同上	Da50住 Q1	酸化炎焼成坏	同上	同上	(色) 黄灰 (組織) 粗粒、硬い (鉱物) 石英多い、柱状の有色鉱物を含む mica を含む (岩片) 灰〜白色をかなり含む	+++	++	+	++	+++	−	Q：波動消光を示す Bi：Z—濃褐色、X—褐色、多色性強い Ho：Z—濃褐色、X—褐色、自形 その他：ジルコン、火山ガラス、鉄鉱	Granite Hornfels	花崗岩　古生層 + ローム	Plate17 3〜4 Plate18 1〜4
24	同上	同上	同上	土師器坏	ロクロ内黒	同上	(色) 黄灰 (組織) 細粒、緻密、硬い (鉱物) 石英、有色鉱物まれ (岩片) 白色	+++	+	−	−	−	−	Q：包有物多い、波動消光を示す その他：サクロ石、リン灰石の微小結晶、ジルコン	Chert Hornfels Granite	古生層　花崗岩	Plate19 1〜4
25	神谷地	同上	Bi15住	須恵器甕	体部	同上	(色) 表面灰色、中央部褐色 (組織) 緻密、不規則、ラミナ状 (鉱物) 石英　無色鉱物)有色鉱物 (岩片) レンガ色及び灰褐色	+++	++	+	−	−	+	その他：ジルコン(無色、自形) 火山ガラス	Chert 〜 Quartzite (あるいはAplite)	古生層　花崗岩 + ローム	Plate20 1〜4

蛍光X線分析結果

岩手県工業試験場

第3表　須恵器・土師器・縄文土器の蛍光X線法による定性分析結果

No	試料名	検出元素										
		Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Zn	Sr	Zr
1	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○
2	〃	○	○	○	○	○		○				○
3	〃	○	○	○	○	○	○	○			○	○
4	〃	○	○	○	○	○	○	○			○	○
5	〃	○	○	○	○	○		○				○
6	〃	○	○	○	○	○	○	○			○	○
7	〃	○	○	○	○	○		○			○	○
8	〃	○	○	○	○	○		○			○	○
9	〃	○	○	○	○	○		○			○	○
10	江別式	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
11	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
12	土師器	○	○	○	○	○		○			○	○
13	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
14	（赤焼き）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
16	土師器	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
17	須恵器	○	○	○	○	○		○		○	○	○
18	〃	○	○	○	○	○		○		○	○	○
19	土師器	○	○	○	○	○		○				○
20	〃	○	○	○	○	○	○	○		○		○
21	須恵器	○	○	○	○	○	○	○			○	○
22	〃	○	○	○	○	○		○			○	○
23	土師器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	〃	○	○	○	○	○		○		○	○	○
25	須恵器	○	○	○	○	○		○			○	○

（測定条件）　対陰極：W　Cr
分光結晶：LIF　EDDT
電圧・電流：50kv・40mA
検出器：シンチレーション計数管（SC）

〔註〕蛍光X線法による分析では、含有する元素に特徴的なものは見い出されなかった。
（※試料番号は岩石学的方法による胎土分析資料に同じ）

分析結果にに関する若干の問題提起

胎土分析の結果は以上のとおりである。分析の目的は古代各期の土器流通検討の基礎資料の蓄積にある。現状での即断は避け、提起された新しい問題点のみをあげておく。

(1) 素地粘土の供給源に、北上川河東の地域が想定されるものが多い。それは奥羽山脈直近の大地渡出土のものにも該当するところであった。したがって製品のみならず、素地粘土の移動の可能性をも想定する必要が出てくる。今後は北上河西の粘土の分析が不可欠となる。さらに、既検出の須恵器窯跡周辺地域の粘土の分析も当然必要である。なお高橋文明氏によると、江釣子村（北上市藤沢窯跡と同一段丘崖・その西方）にも平安時代初期（ヘラ切り・無調整）の窯跡の存在が考えられる由である。

(2) 奈良時代末期集落出土の須恵器の素地粘土の供給源も同様に想定されたところから、該期における須恵器の在地（岩手県南部）生産の可能性をも想定する必要がある。これは既に沼山源喜治氏の発表されたところでもあった。宮城県北の資料の分析・比較、窯跡そのものの探査などが必要である。

(3) 江別式土器も同様であった。この種土器の製作者に一定の定着性を想定できることとなり、従来から看取された“土着的要素”の背景説明の一つとなしえよう。土師器類と比較し、その含有物が大きく異なる事実もあり、東北地方出土の同種資料・土師器・弥生式土器などとの比較が必要となろう。

(4) より基礎的作業とし、(1)で述べた粘土類の、耐火性その他の須恵器の素地粘土としての適否の分析・確定を急ぐ必要もある。

(5) 分析対象器種をさらにふやす必要がある。とくに円筒埴輪などの分析も不可欠である。

末筆ではあるが、試料を提供された北上市教育委員会・江刺市教育委員会・水沢市教育委員会に深甚の謝意を表す。これらの協力なしには本試みはなしえなかったであろう。

（文責　相原）

巻末資料

〔Ⅱ〕参 考 資 料

最後に、参考資料として(1)岩手県南部における古代の土器群編年試案、(2)岩手県南部を中心とした古代の住居跡変遷について提示する。(1)については後掲する第1図、(2)については第2図を参照されたい。これらの表記と記述は、何れも北上川中流域を中心とする一帯における古代の遺構・遺物のあり方を総合的に検討した結果として、本課職員相原康二が集成したものである。

本報告内の各遺跡における遺構・遺物の記述において多くは、基本的にこれら参考資料に基づいて考慮されており、基準資料としても有意義なものである。また、本資料をもって岩手県南地方における古代集落のあり方や遺物の編年観がより明確になされ得たと解釈している。

本資料の作成にあたっては、註記に伺われる如く多くの先学の業積や考古学研究会岩手支部例会における討議内容、そして会員諸氏の個人的研究課題における貴重な集積資料の呈示に負うところが大であることは言うまでもない。先学の学恩並びに会員諸氏の快諾の資料提供及び資料作成におけるご尽力に対して深謝する次第である。

資料1　岩手県南部における古代の土器群編年試案

巻末に掲げた編年表の簡単な説明を行なう。編年にあたっては〝組みあわせ〟を重視した。それは器種・技法ともにである。また諸先学の諸業積に従ったのはもちろんである。紙数の関係からその詳細な説明は省き、結論のみを記す。

第Ⅰ群土器　水沢市高山TK02住居跡、同西大畑遺跡溝跡出土資料。表では併記したが、後者が若干古くなる可能性もある。器種組成の詳細は未詳であるが、器台の不在が特徴的である、南半の塩釜式に類似しよう。

第Ⅱ群土器　江釣子村猫谷地遺跡の仮称Ⅰ期の住居跡群（CH74・DA62・CJ50住など）出土資料。これらも器種組成は未詳である。同様に南小泉式のやや古い部分に相当しよう。

第Ⅲ群土器　水沢市面塚SI02住居跡、同西大畑Cf53住居跡出土資料。後者の組成内容は比較的良好である。報告書によると、長胴甕型に近い甑も存在するらしい。南小泉式の新しい部分であろう。坏型への赤色顔料塗彩が見られる。

第Ⅳ群土器　水沢市膳性G15住居跡出土資料。器種組成は不明であるが、内外面赤色顔料塗彩の丸底坏を有する。引田式的な色彩が強い。

第Ⅴ群土器　同膳性E06住居跡出土資料。坏への黒色処理の開始期とも思われる。肩部無段で、胴部下半に最大径のある甕型が伴なう、南半の住社式に類似する。坏体部にミガキが存在する。

第Ⅵ群土器　水沢市今泉・膳性、金ヶ崎町上餅田、江釣子村猫谷地の仮称Ⅱa期その他の出土

資料が該当する。器種組成はきわめて豊富になる。20個体前後が1セットをなす。坏はより大型品が多い。特異な器種の須恵器を伴なう。坏体部には同様にミガキが存在する。栗囲式に類似する。

第Ⅶ群期　甕型に肩部の無段化、底径の大型化と平坦化の傾向が現われ、坏型に小型化、無段化（沈線化）・平底化の傾向が顕著になる。甑・高坏の存在が少なくなる。二分しうる。

Ⅶa群　水沢市玉貫の各住居跡、同石田Ci30住居跡他出土資料。先の特徴は既に見えるが、坏に大型品も散見でき、かつ、須恵器が日常容器としてのセットになり切っていない段階。

Ⅶb群　水沢市石田Dd03、同東大畑、江釣子村猫谷地BF21、同鳩岡崎Ea12住居跡出土資料須恵器が日常容器に組み込まれる段階。須恵器器種は遺跡毎の異同があり一様ではない。本群は宮城県糠塚例に極似し、国分寺下層式に相当し、奈良時代後半～末期を占めよう。

Ⅶa群は適当な型式名を知らないが、奈良時代前半期のものではあろう。

第Ⅷ群期　類例が激増する。本群にはロクロ使用土師器が共伴しはじめる。土師器は甕・坏ともにロクロ使用と不使用のものが混在するが、そのあり方は遺跡により異同がある。まず、ロクロ不使用坏がやや多く、甕はすべてロクロ不使用の長胴・球胴型からなる例がある。坏は無段・平底のロクロ不使用坏・削り調整をもつロクロ使用土師器（回転糸切り）、ヘラ切り・無調整を主とする須恵器などからなる。別の例ではロクロ不使用坏は皆無か、あっても稀少で、甕にはロクロ使用のものも加わる。詳細にのべると、削り調整のあるものを主体とし、若干量の無調整のものを伴うロクロ使用土師器坏と、ヘラ切り・無調整を主体とし、若干量の削り調整（回転・手持ち）をもつもの、および糸切り・無調整の須恵器坏、ロクロ不使用甕、体部上半に叩き目とロクロ成形痕・下半に削り調整痕をもつ土師器甕、須恵器広口壺、同長頸壺、同蓋などからなる。以上の二者からは、ともに高坏・甑は消えており、逆にやや軟質の酸化焔焼成と思われる土器が加わる。これらは平安時代初頭～前半頃と思われるものである。本群以降は遺跡の性格を十分考慮した上で遺物を検討する必要があろう。おそらくはいくつかの類型化が可能であろう。

第Ⅸ群期　本群にはロクロ不使用土器は原則的には伴なわない。土師器坏は回転糸切り・無調整と、調整あるもの（回転・手持ち）の両者からなる。土師器長胴甕胴部の叩き目はほぼ消える。他に中型甕・鍋などがある。須恵器には坏（回転糸切り・無調整のみ）・甕・蓋がある。技法の全般に〝省略化〟傾向が目立つ。本群には既述の酸化焔焼成と思われる土器が伴なう。これについては既に見解の発表がある(註)。以上は平安時代後半のものと思われる。

第Ⅹ群土器以降については不明な点が多く詳述は省き見通しのみをのべる。第Ⅹ群は所謂須恵系土器を主体的にもつグループであり、坏・台付坏・皿・台付皿・黒色処理の坏・長胴甕・小型甕・鍋・耳皿などをもつ。緑釉陶器も共伴する。平安時代後～末期の11世紀代のものと思

われる。

第XI群としては詳細未詳であるが、灯明皿的な部厚・粗雑な軟質土器をも有するものが該当しよう。坏・台付坏・皿・甕などからなる。金ヶ崎町西根・鳥ノ海などに比較的良好な資料がある、12世紀以降のものと思われる。経筒と思われる袈裟襷文ある灰釉陶器（常滑焼）を共伴する例もある。

《註　記》

本編年試案の作成にあたっては、多くの先学の業績に負うところが大きい。先学の学恩に感謝する。また、考古学研究会岩手支部の例会における討議内容にも負うところが大きい。会員諸氏に深謝する。以下に編年表・に用いた資料の出典を掲げる。

Ⅰ群　①高山遺跡　TK02住　高山遺跡　岩手県水沢市調査報告書第1集　高山遺跡調査会・水沢市教育委員会　昭和53年3月

〃　②西大畑遺跡　溝　西大畑遺跡　岩手県文化財調査報告書第60集　東北縦貫自道車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書XI　岩手県教育委員会　日本道路公団　昭和56年3月

Ⅱ群　③猫谷地遺跡　和賀郡江釣子村猫谷地遺跡　岩手県教育委員会　昭和49年3月
実測は佐久間豊氏による。

Ⅲ群　④西大畑遺跡　Cf53住　註②に同じ

〃　⑤面塚遺跡　SI02住　現地説明会資料　水沢市教育委員会　昭和55年6月

Ⅳ群　⑥膳性遺跡　G—15住居跡
Ⅴ群　⑦　〃　E—06　〃
膳性については(財)岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門氏から種々の教示・実測図の提供をうけた。深謝する。

Ⅵ群　⑧今泉遺跡　Bg62住他　註②に同じ

Ⅶa群　⑨石田遺跡　C30住居跡　同第61集　同　XII　同　同

〃　⑩水沢市玉貫遺跡の古代の資料のすべて　(財)岩手県埋蔵文化財センター資料実見による
山口了紀・吉田洋氏の教示をうけた。

Ⅶb群　⑪石田遺跡　Dd03住居跡　註⑨に同じ

Ⅶ群　⑪　〃　Da56住居跡　同上

⑫林前遺跡　SF22住他　林前遺跡　岩手県水沢市文化財調査報告書第3集　水沢市教育委員会　昭和54年3月

Ⅸ群　相去遺跡Ⅰ期
〃　Ⅱ期
相去遺跡については岩手県立博物館高橋信雄氏より種々教示と実測図の提供をうけた。なお、氏とは相去のみならず、各群の全般にわたり意見交換を行ない益する所大であった。深謝する。なお、以下の論文がある。

⑬高橋信雄　岩手県のロクロ使用土師器について　考古風土記第2号　昭和52年4月
なお、⑬に対する批判的見解として
⑭本堂寿一　極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告書—付、寺院跡出土土器の再整理とその考察—　北上市立博物館研究報告第3号　昭和55年8月　があるが、ここでは前者にしたがっておく。今後の検討課題とする。

XI群以下については、金ヶ崎町西根・鳥ノ海の個別報告中に詳細にのべられている。

⑮西根遺跡
⑯鳥ノ海A・B・C遺跡
岩手県文化財調査報告書第59集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書X　岩手県教育委員会・日本道路公団　昭和56年3月

資料2　岩手県南部を中心とした古代の住居跡の変遷（第2図）

表記について概述する。時期区分については既述の編年表にしたがう。

第Ⅰ～Ⅳ群期　古墳時代に相当するものであるが、Ⅰ・Ⅱ群期にはカマドが付設されない。四隅の角張った均整な正方形プランと、対角線上にのり、やや中央による4本の主柱穴をもつ貯蔵穴様のものは既にある。規模に異同のあるものが組みあわせになる。Ⅲ群期にはカマドが付設されはじめるが、その状況にはばらつきがあり、斉一性はない。長大な煙道は未確認である。第Ⅳ群期にはカマド本体・長い煙道をともに備えたものが出現し始める。

以上の時期の竪穴軸方位は変化に富み、一定の傾向性は示さない。なおⅢ群期の西大畑例には主柱穴以外に西辺中央の壁直下に柱穴様の2ケのピットもある。

第Ⅴ・Ⅵ群期　四隅に軽い丸味をもつほぼ正方形なプランと、先と同様に対角線上にのるが如くに配置された4本（稀な大規模例では6本以上）の主柱穴、北壁に付設されたカマドなどを有する構造をもつ。斉一性はかなり強く、構築法の確立を示すかのようである。ただし長大な煙道の有無にはばらつきがある。明白なそれをもたない若干例も混在する事実がある。カマド焚口部には礫を門状に配置する。それより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺（多くは南壁）中央壁直下にも柱穴様のものをもつ例がある。建物主軸方位は〝磁北にほぼ一致⟶やや西に偏す〟という変遷をたどるらしい。一辺8m～6m程度の大規模なものと、5m以下の中小規模のものがセットになる。

第Ⅶ群期　プラン・主柱穴配置などは前代に共通するが、建物主軸方向はさらに西に偏し、かつカマド袖部への土師器類（長胴甕型を主とするが、各種の器種がある）の芯としての埋置が見られはじめる。主柱穴は4本を中心とするが6本のものもあり、さらにその存在は不明確なものも増加する。前代に比し不均整なプランをもつものが増加する。

第Ⅶ群期以降　集落跡と思われる遺跡の例のみをとる。変化の度合がきわめて大きい。

(1)　柱穴配置　主柱は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本が壁直下に寄るものも増加する。さらに柱穴配置の判然としない例がさらに増加する。

(2)　側壁・板材を用い、〝腰板乃至壁風〟のものをつくり出す例も増加する。その四隅には支柱様のものが伴なう。

(3)　カマド構築部位、北壁も継続するが、東壁・南壁などへ変化する例が圧倒的に多くなり、かつ壁中央ではなく若干いずれかに偏した位置となる。江釣子村猫谷地においては南壁⟶東壁という変遷を示す。

　カマド構築法は、本体にも板状礫を用いるもの、煙道部に甕を横転位に据えるものなども加わる。所謂くり抜き式のものが多い。

(4)　（竪穴住居跡以外に）掘立柱建物・井戸・大溝も集落の構成要素に加わる例も現われる。

X～XI群期　長方形プランで、側壁直下に多くの柱穴をもつ例が増加する。カマドなど特別な施設はほとんど見られない。これらの中には中世に入るものも含まれる可能性がある。

第Ⅷ群期以降については、遺跡の性格別の遺構の把握（構造・組みあわせ）が必要である。それは掘立柱建物についても同様である。

《註　記》

①	高山遺跡	TK02住	高山遺跡	岩手県水沢市文化財報告書第1集　高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会	昭和53年3月
②	猫谷地遺跡	CH74住	猫谷地遺跡	CH74住居跡　岩手県教育委員会調査	
③	面塚遺跡	S102住	面塚遺跡	現地説明会資料　水沢市教育委員会	昭和55年6月
④	西大畑遺跡	Cf53住	西大畑遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－XI－ 岩手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑤	膳性遺跡	G－15住	膳性遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター なお、膳性遺跡については、高橋与右衛門氏より教示をうけた。深謝する。	昭和54・55年
⑥	〃	J－7住			
⑫	〃	F－11住			
⑬	〃	C－2－2住			
㉒	〃	G－8－1住			
㉓	〃	H－2住			
⑭	玉貫遺跡	I－12－1住	玉貫遺跡	現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター	昭和54年8月
㉘	玉貫遺跡	C－11住			
⑦	今泉遺跡	Bg62住	今泉遺跡	岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－XI－ 岩手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑧	〃	Bd59住			
⑨	〃	Bd03住			
⑩	〃	Bi24住			
⑪	〃	Cb24住			
⑮	石田遺跡	Df59住	石田遺跡	岩手県文化財調査報告書第61集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－XII－ 岩手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑯	〃	Dd03住			
⑰	〃	Df09住			
⑲	〃	Cb21住			
⑳	〃	Cf56住			
㉑	〃	Da56住			
⑱	尻引遺跡	第6号住	尻引遺跡	尻引遺跡調査報告書　文化財調査報告書第17集　北上市教育委員会	昭和52年3月
㉔	上平沢新田遺跡	Ah15	上平沢新田遺跡	岩手県文化財調査報告書第52集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－III－ 岩手県教育委員会・日本道路公団	昭和55年3月
㉕	鳥ノ海A遺跡	第2号(Aj56)	鳥ノ海A遺跡	岩手県文化財調査報告書第59集　東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書－IX－ 岩手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
㉖	〃	第3号(Ag53)			
㉗	〃	第4号(Af03)			

I 群

II 群

III 群

IV 群

V 群

VI 群

VIIa 群

VIIb 群

VIII 群

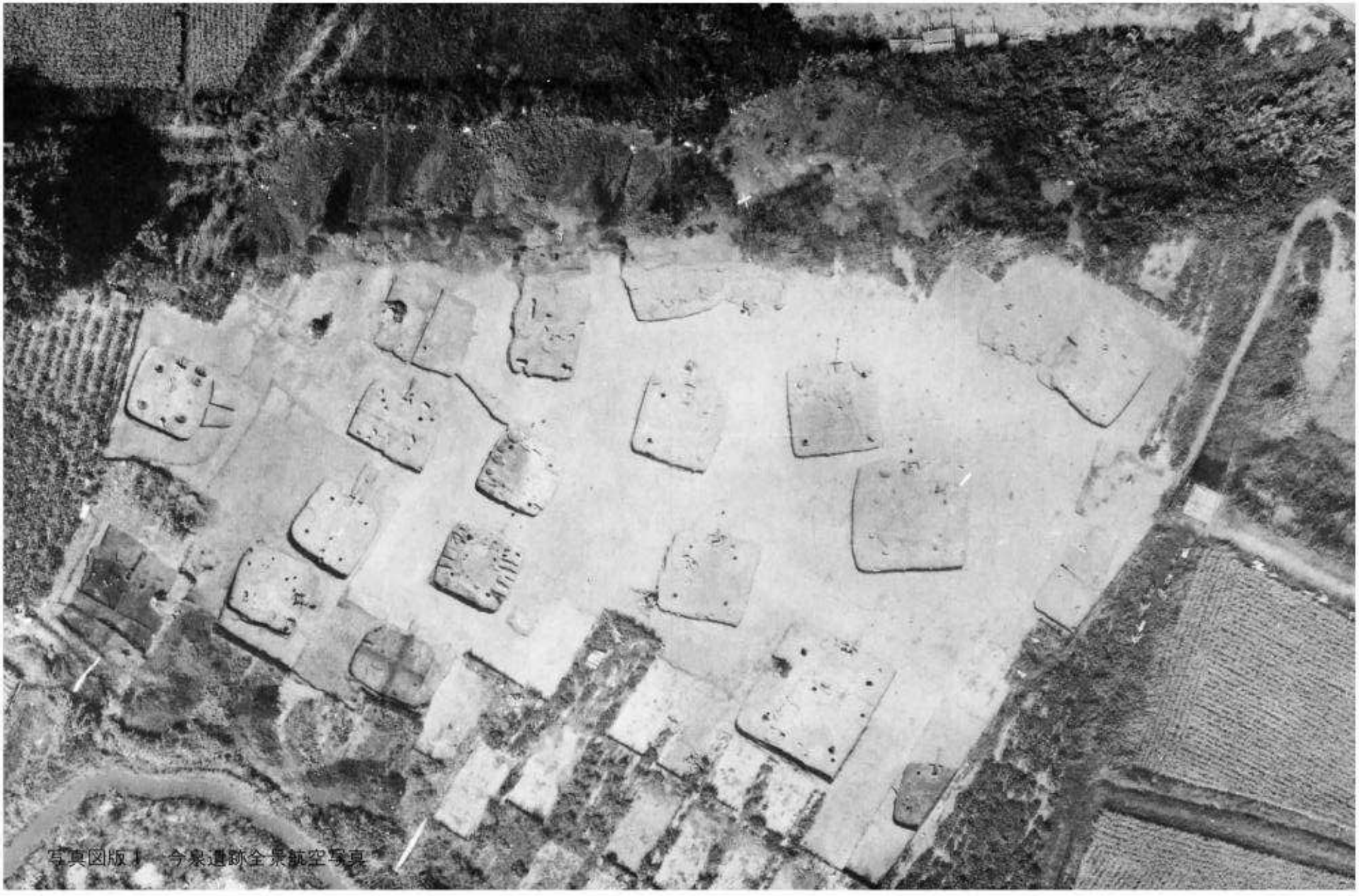
IX 群

X 群

（第１図）

図　　版

今泉遺跡写真図版



写真図版1　今泉遺跡全景航空写真

全景・北側から

東から西を見る段丘崖は右側

段丘上から北側をみる

Ai 62竪穴住居跡

同上出土遺物

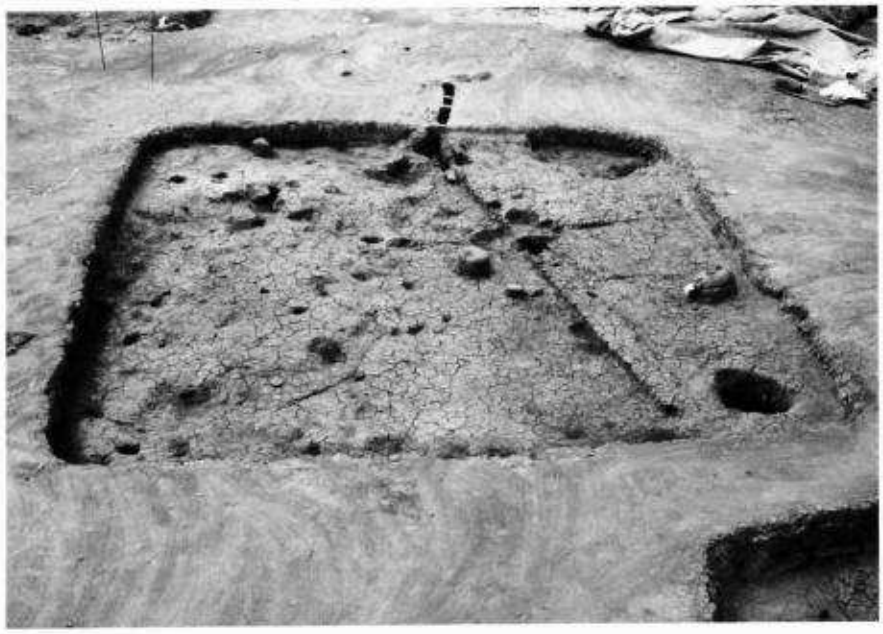
Ai 65竪穴住居跡

Ai 65竪穴住居跡
出土遺物

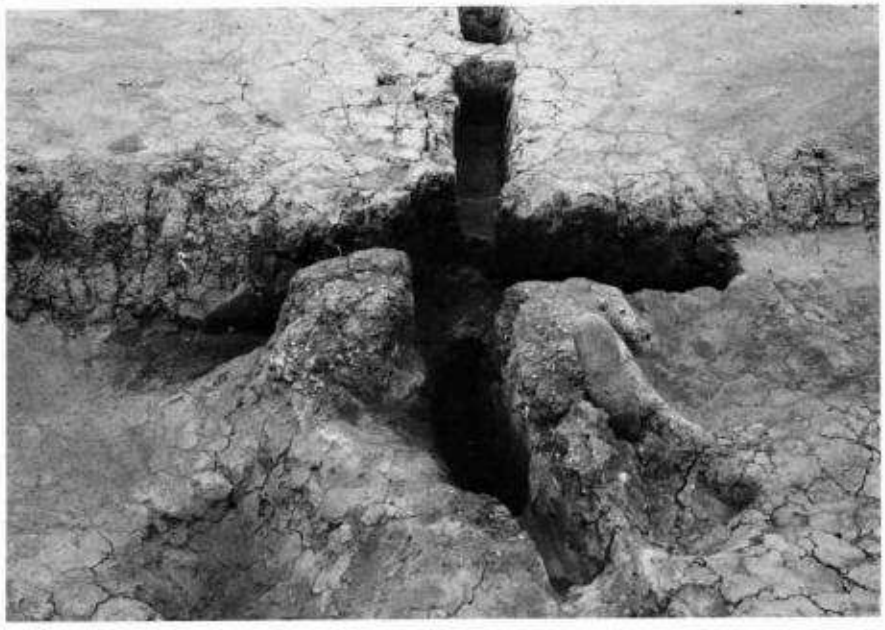
Bb 06竪穴住居跡

同上出土遺物

Bb 06竪穴住居跡
出土遺物態



Bc 53竪穴住居跡



同上カマド

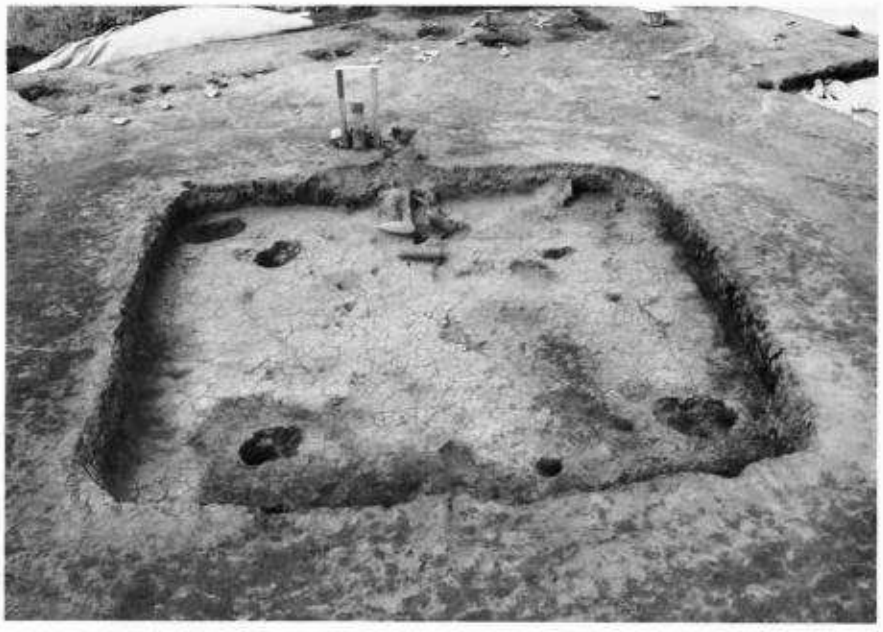
Bc 53竪穴住居跡
出土遺物

Bc 71竪穴住居跡

同上出土遺物

Bc 71竪穴住居跡
出土遺物

同上



Bd 03竪穴住居跡

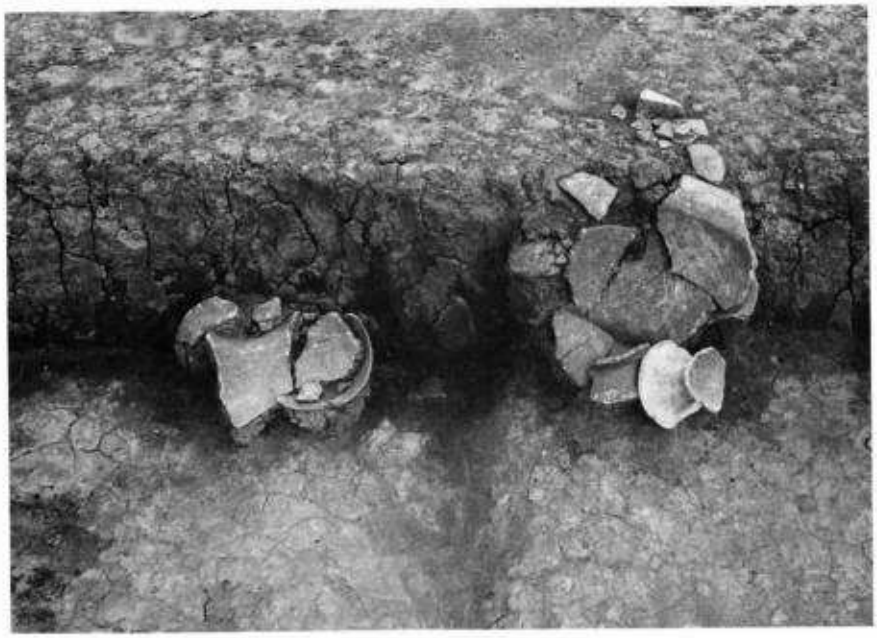
Bd 03堅穴住居跡
カマド

同上拡大

Bd 12堅穴住居跡

Bd 59竪穴住居跡

同上カマド



同上出土遺物

Bd 59竪穴住居跡
出土遺物

同上

同上

Bf 09竪穴住居跡

同上カマド

同上出土遺物

Bf 09竪穴住居跡
出土遺物

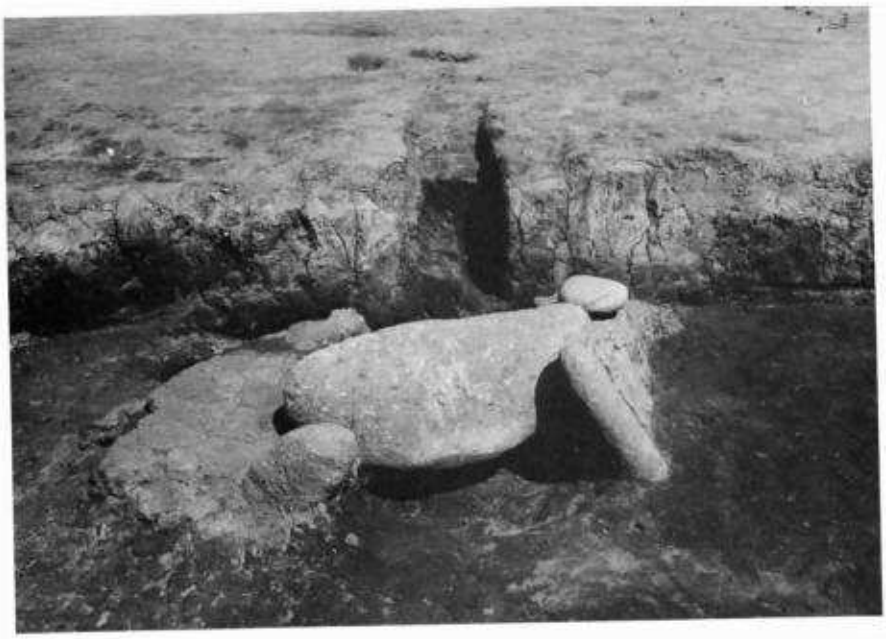
Bf 15竪穴住居跡

同上カマド

Bf 15竪穴住居跡
礫状況

Bf 53竪穴住居跡

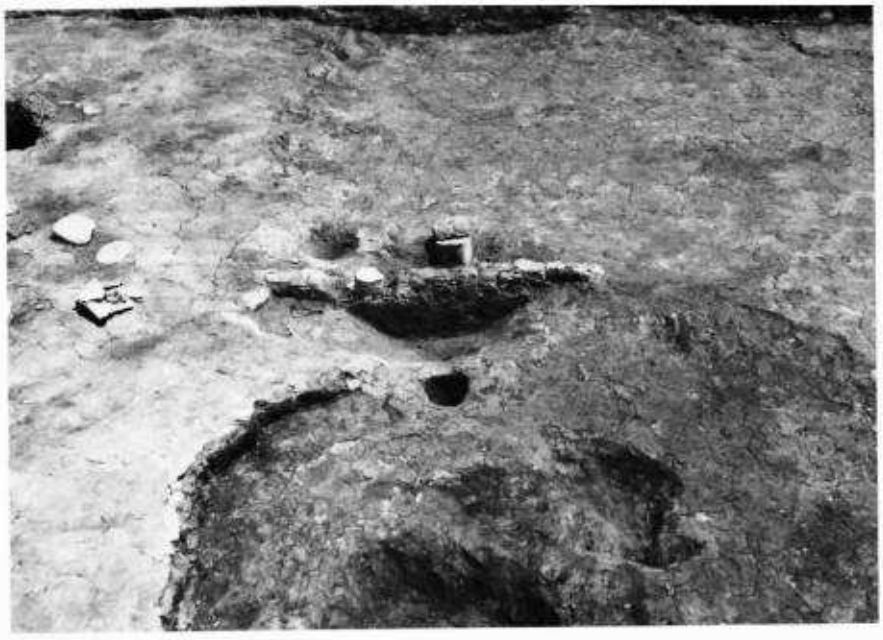
同上カマド



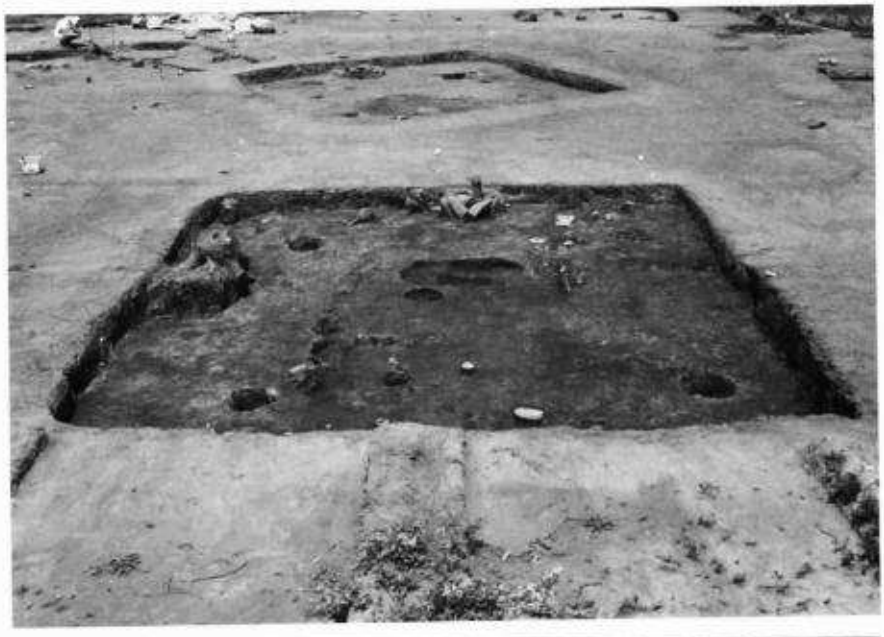
Bf 53竪穴住居跡
カマド遺物取りあげ後

同上遺物出土状況

Bg 62竪穴住居跡(旧)



Bg 62竪穴住居跡(旧)
カマド

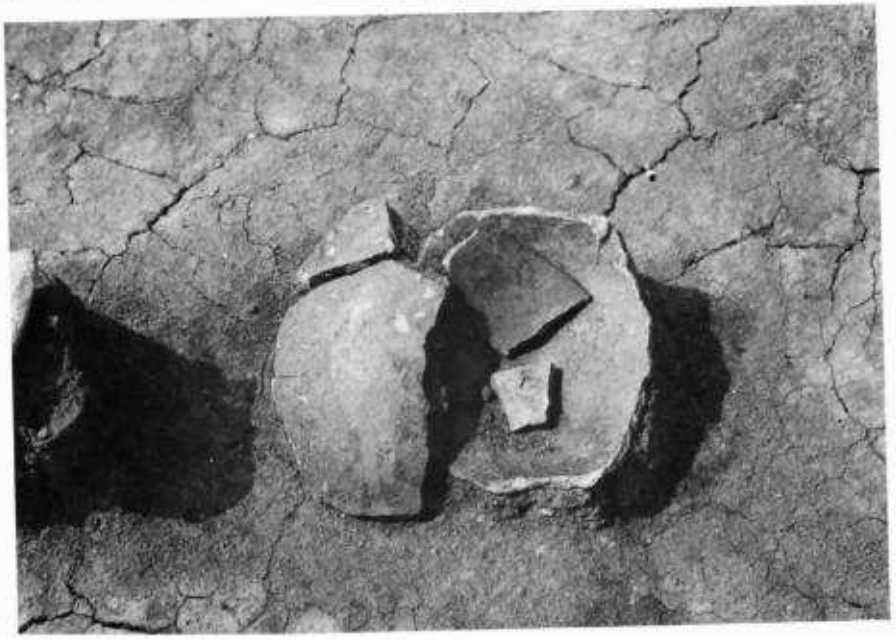


Bg 62竪穴住居跡(新)

同上カマド

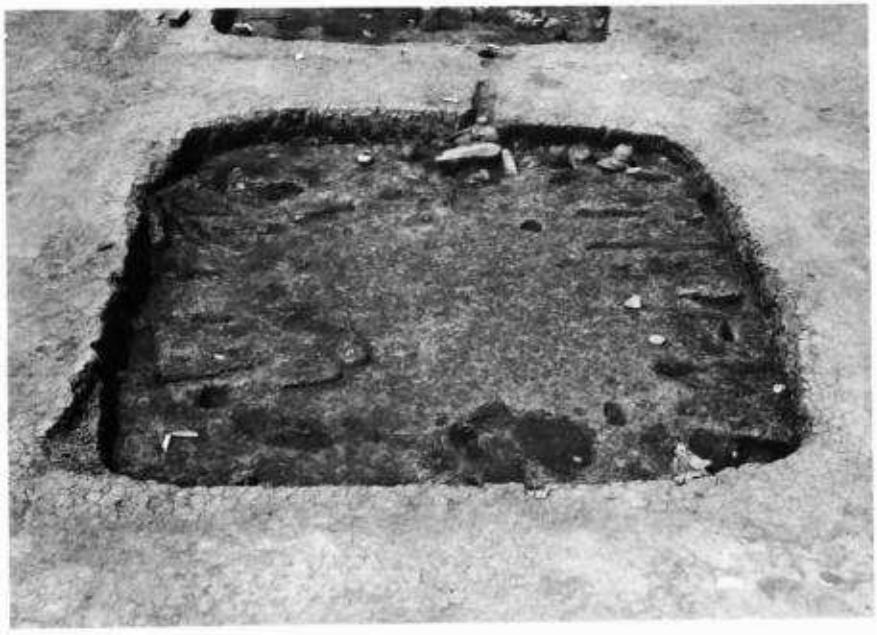
Bg 62竪穴住居跡(新)
カマド周辺

同上カマド



同上出土遺物

Bg 62竪穴住居跡(新)
遺物出土状況



Bh 09竪穴住居跡

同上カマド

Bh 09竪穴住居跡
中央より東側

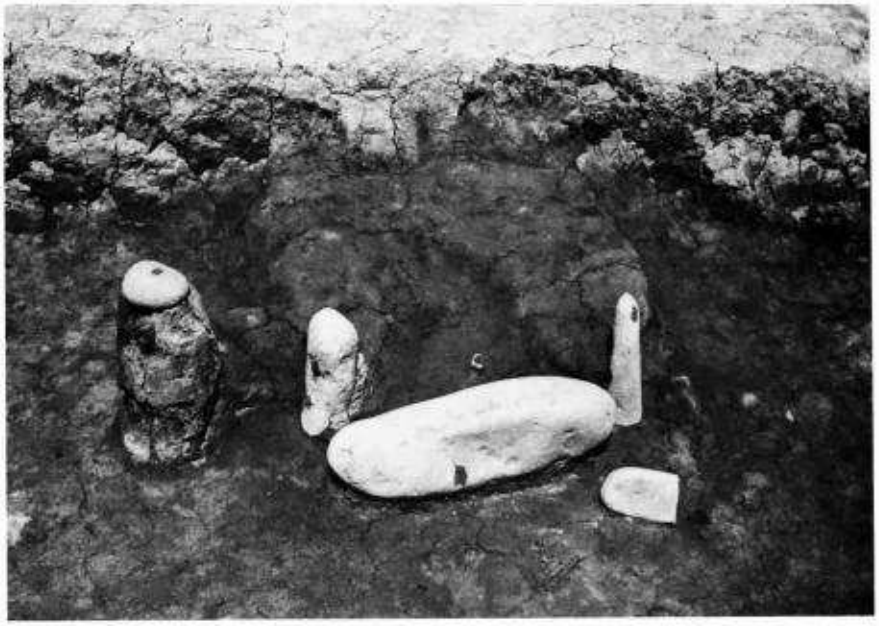
同炭化材拡大図

同上出土遺物

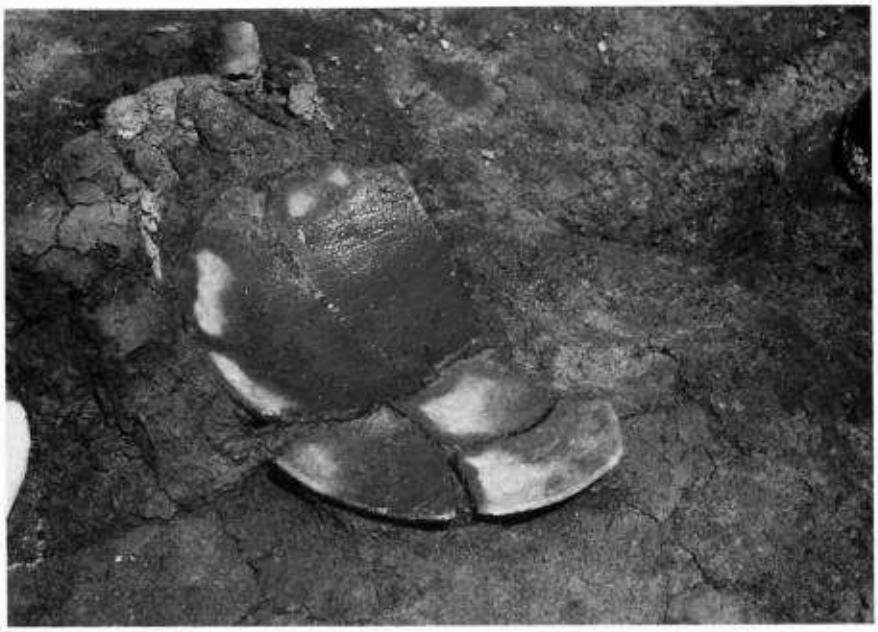
Bh 09竪穴住居跡

Bh 71竪穴住居跡

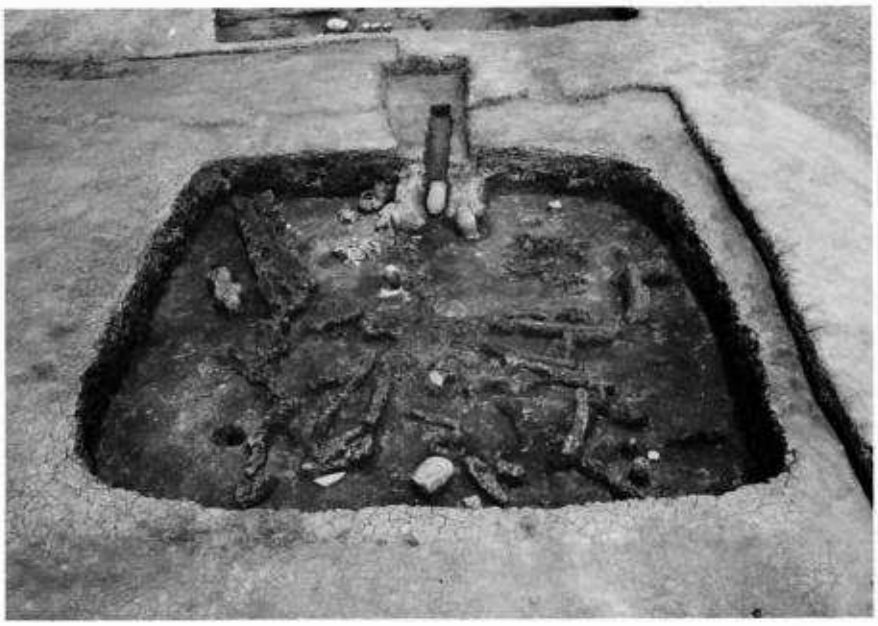
同上カマド



Bh 71竪穴住居跡
カマド



同上出土遺物

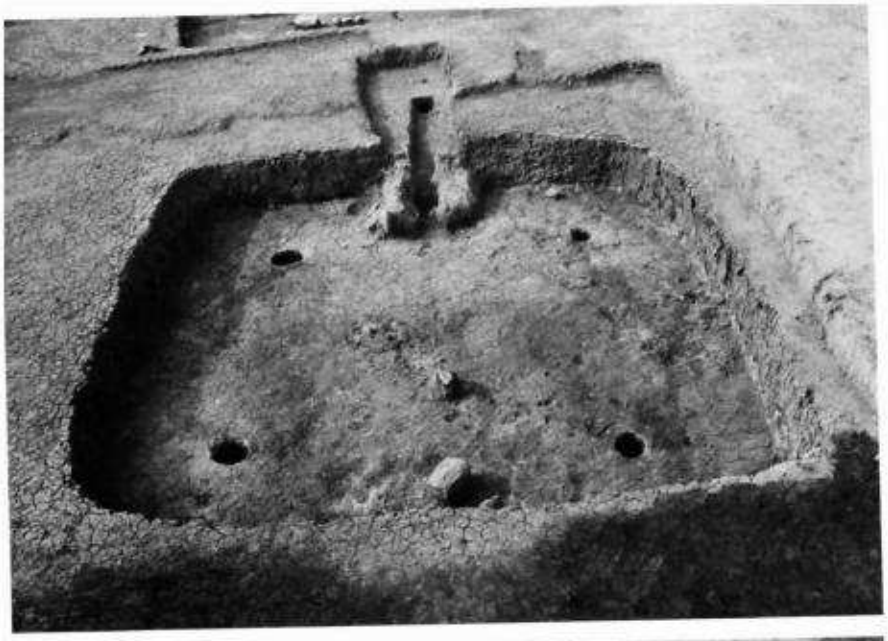


Bi 15竪穴住居跡
焼失家屋

Bi 15竪穴住居跡
カマド周辺

カマド西側
炭化材出土状況

同上南側より



Bi 15竪穴住居跡
遺物炭化材取りあげ後

Bi 24竪穴住居跡

同上カマド

貯蔵穴＋P_3
西側より

同上ピットP_2
東側より

同上ピットP_1
北側より

Ca 18竪穴住居跡

同上カマド北側より

同上カマド

Ca 18竪穴住居跡
遺物取りあげ後カマド

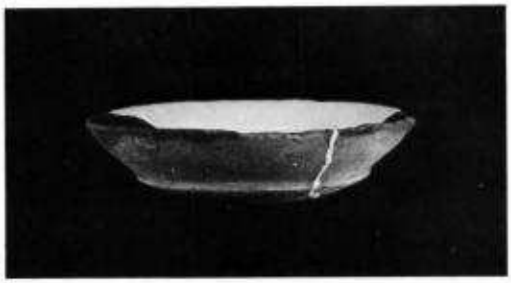
Cb 24竪穴住居跡

同上カマド

Ca 09竪穴住居跡

Bb 03周辺焼土ピット

同上出土遺物



1

2

3

4

5

6

7

8

9

石錘(実物大)

1 ～ 7……Ai65 竪穴住居跡出土遺物
8 ～ 9……Bb06 竪穴住居跡出土遺物

1

2

3

4

6

7

8

9

5

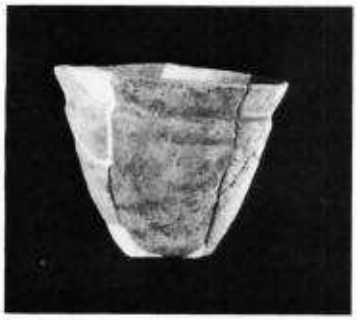
10

1－2…Bc71 竪穴住居跡出土遺物（1，坏 2，甕）
3～5…Bd03 竪穴住居跡出土遺物（3，壺 4，甕 5，花弁型装飾品）
6－9…Bd12 竪穴住居跡出土遺物（6－8 ロクロ使用の内黒坏 9，甕）

10…Bc53竪穴住居跡
鉄製品穂摘具

1

2


3

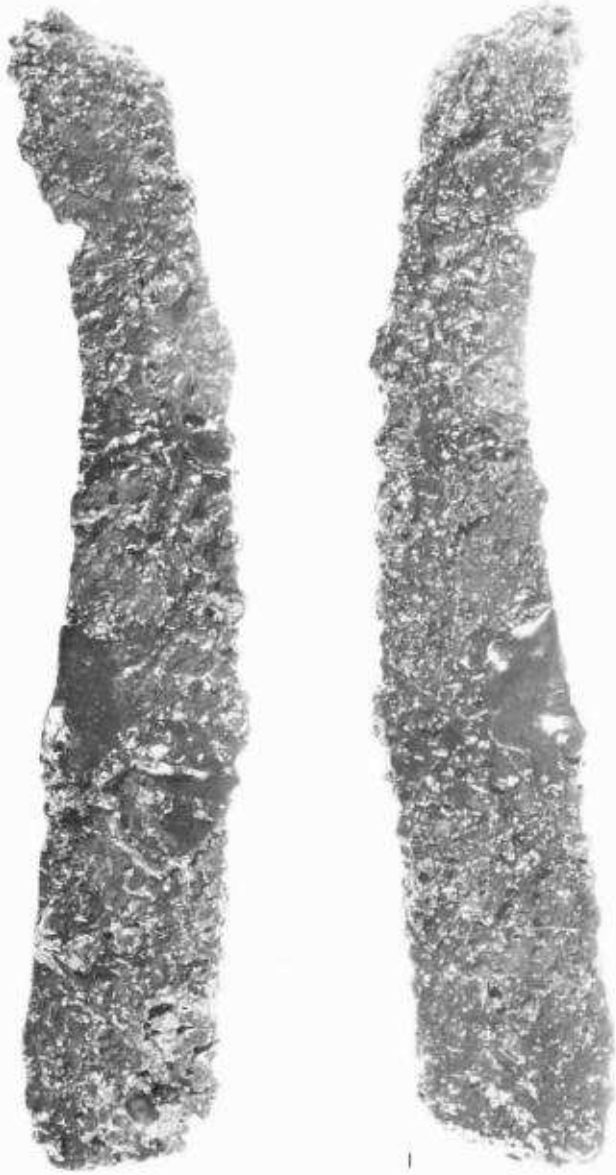
4

5

6

1～6…Bd59竪穴住居跡出土遺物
1，2．内黒高坏　3、鉢　4、甕
5，壺　6、甕

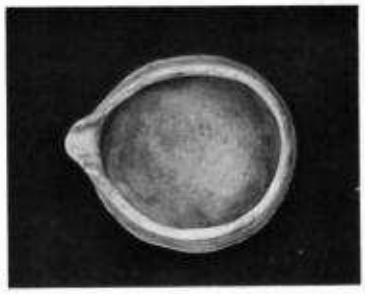
写真図版29



1

2

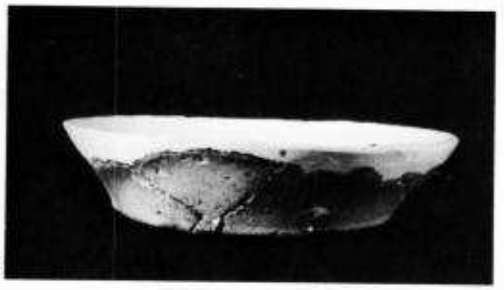
3



4

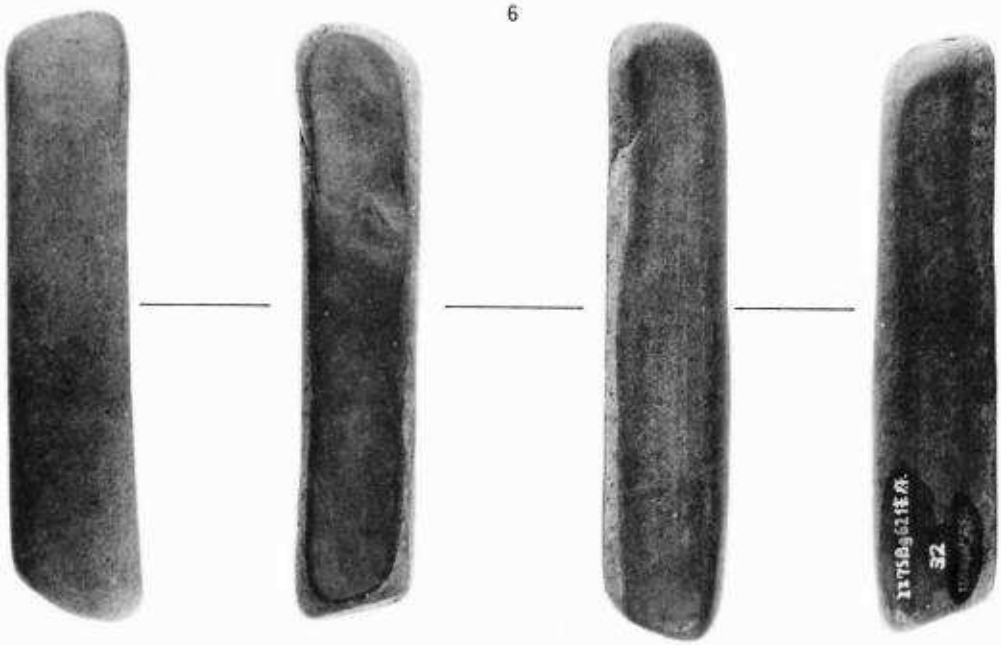
5

1 ～ 3 … Bf 09 竪穴住居跡出土（1 鉄製品鎌、2．内黒高坏、3．内黒坏）
4 － 5 … Bd 59 竪穴住居跡出土（4 片口、正面・側面・上面、5 片口）



新期Ｂｇ62 竪穴住居跡出土
１－３…内黒坏　　４、壺
５、甑正面、底面　６、７甑　　８…甕

新期Bg62竪穴住居跡出土
1～5…甕
6…砥石（実物大）



写真図版32

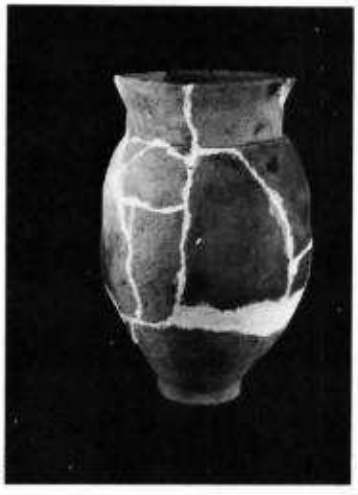
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

1 ～ 3…新期 B g 62竪穴住居跡出土
4 ～ 10… Bh 09竪穴住居跡出土

（4，内黒坏、5 ～ 8、10…甕
9、壺）

写真図版33

1

2

3

4

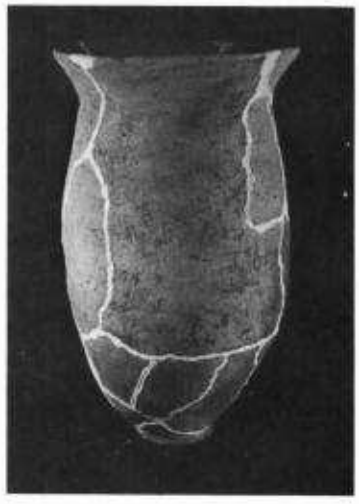
5

6

7

8

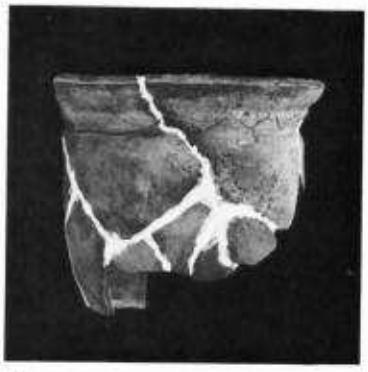
9

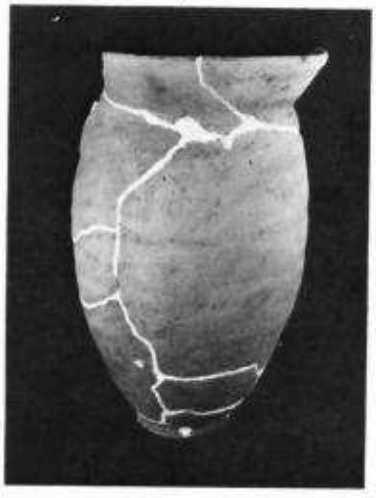


10

1 ～ 6…Bi 15竪穴住居跡出土(1、3 ～ 6…甕、2…壺)
7 ～ 9…Bi 24竪穴住居跡出土甕
10　Cb 24竪穴住居跡出土坏

写真図版34

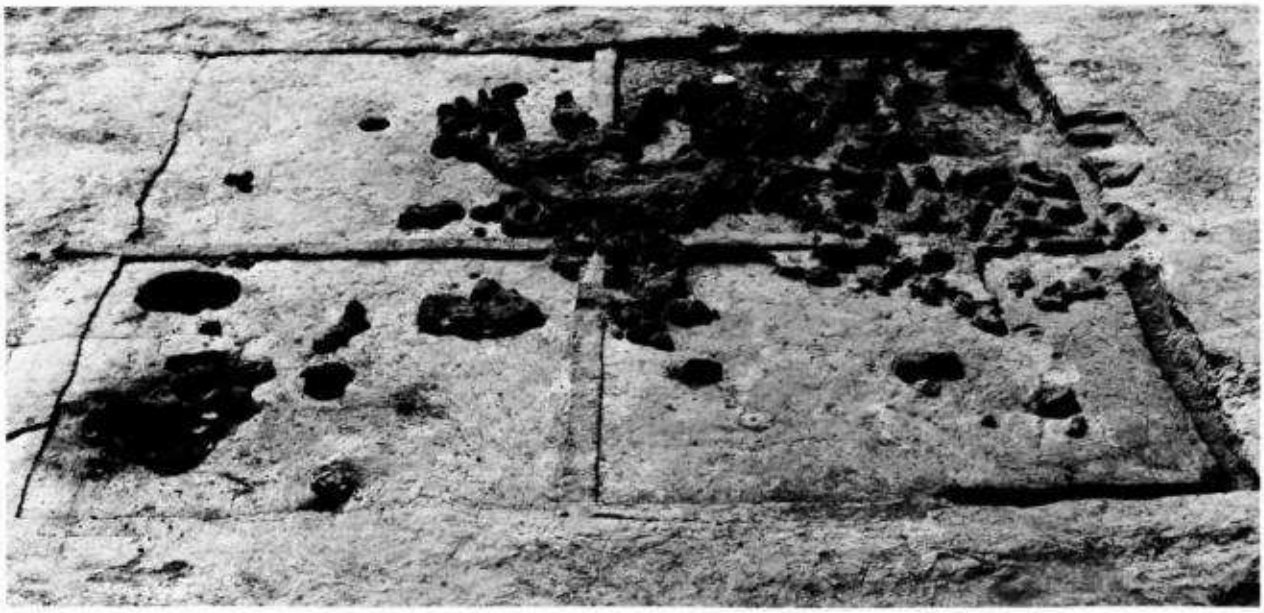




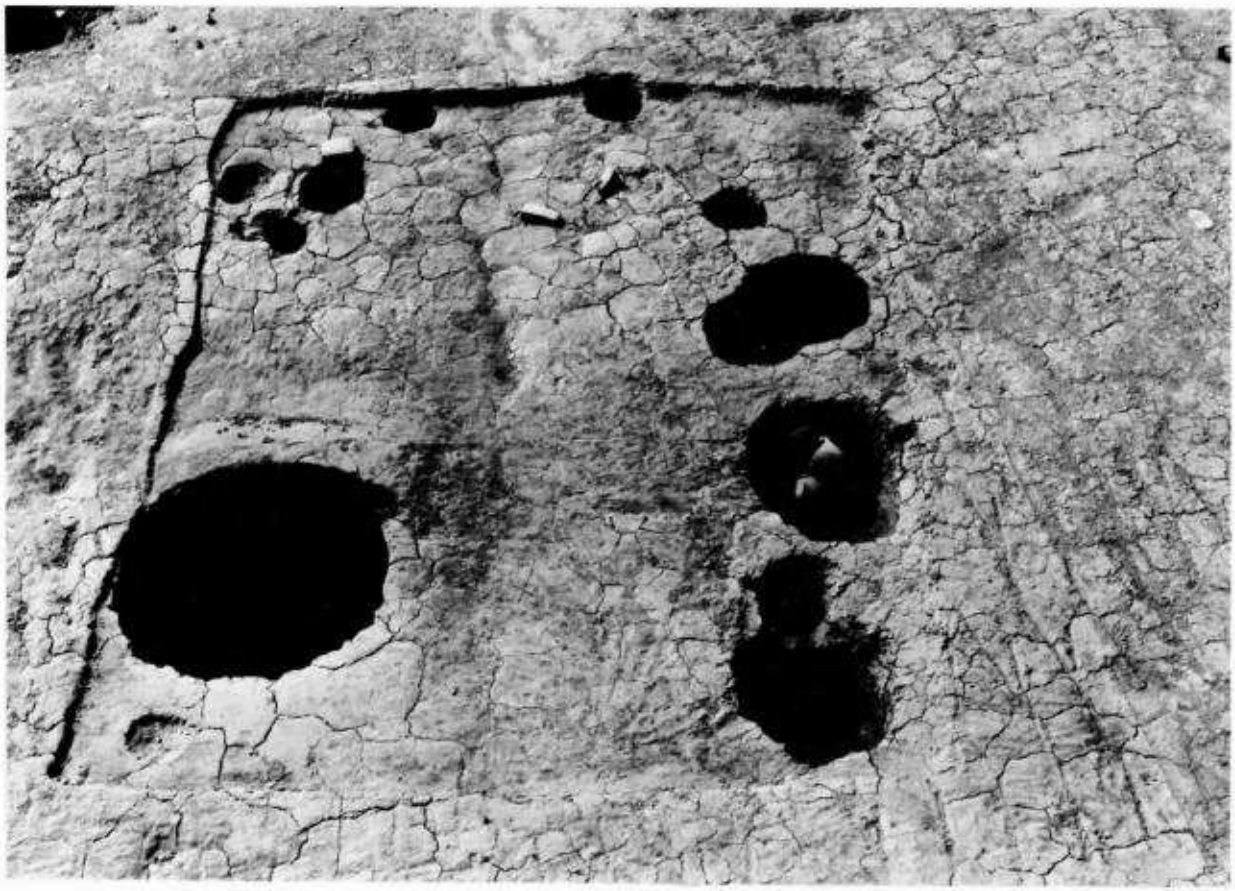
1 ～ 2…Cb 24竪穴住居跡出土遺物（1…壺、2…甕）
3 ～ 8…Ca 18竪穴住居跡出土　（4…内黒坏、5 ～ 8…甕）

西大畑遺跡写真図版

図版Ⅰ　西大畑遺跡全景（東側から撮影）



1



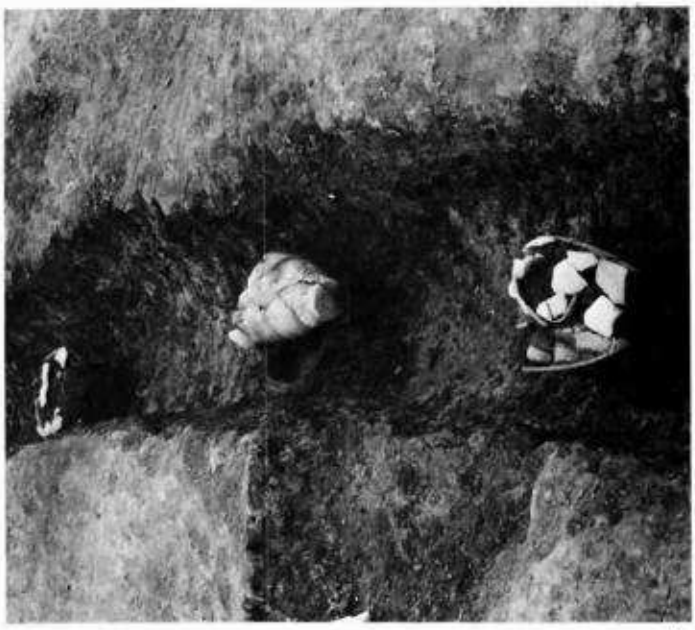
2

1：Cf53住居跡（東側から撮影）

2：Ca21住居跡（東側から撮影）

図版2　Cf53・Ca21住居跡

2



1

1：Ｂｊ３住居跡北側溝（東側から撮影）
2：Ｂｊ３住居跡カマド全景（南側から撮影）
3：Ｂｊ３住居跡全景（南側から撮影）

3

図版３　Ｂｊ３住居跡，Ｂｊ３住北側溝

1

2

3

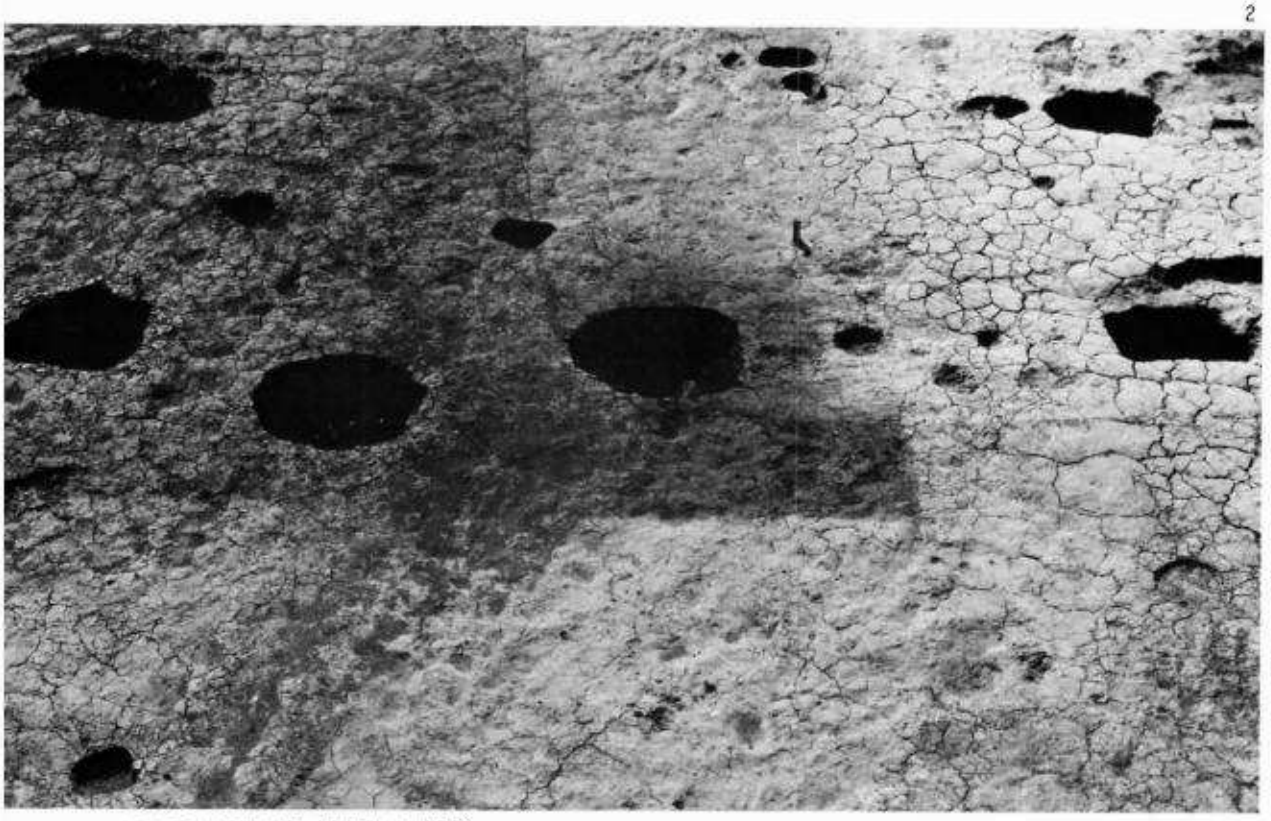
1：Ｃｃ24住居跡（南側から撮影）
2：Ｃｃ24遺構（南側から撮影）
3：南西部遺物包含地（南側から撮影）

図版４　Cc 24住居跡・Cc 24遺構・南西部遺物包含地

1

1：Ｂｅ24Ａ・Ｂ，Ｂｆ21Ａ・Ｂ建物跡（東側から撮影）

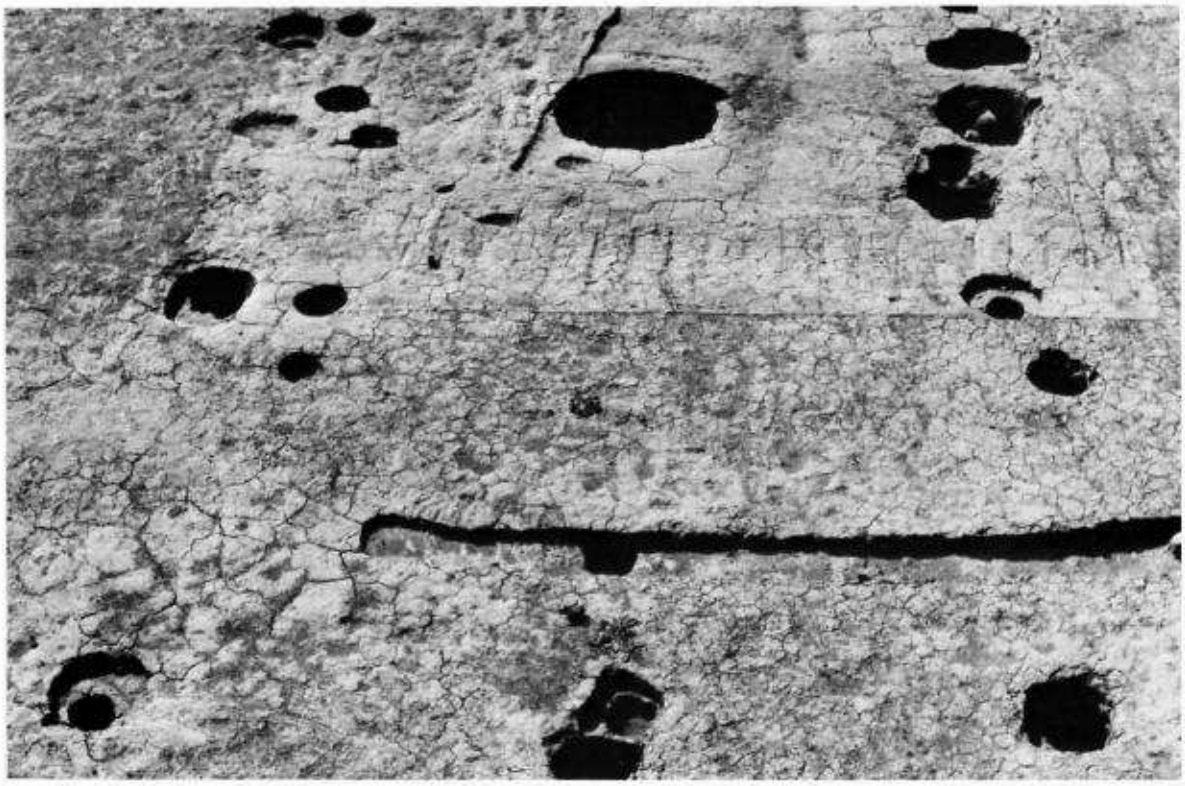
2



2：Ｂｈ27建物跡（東側から撮影）

図版５　Ｂｅ24Ａ・Ｂ，Ｂｆ21Ａ・Ｂ，Ｂｈ27建物跡

1

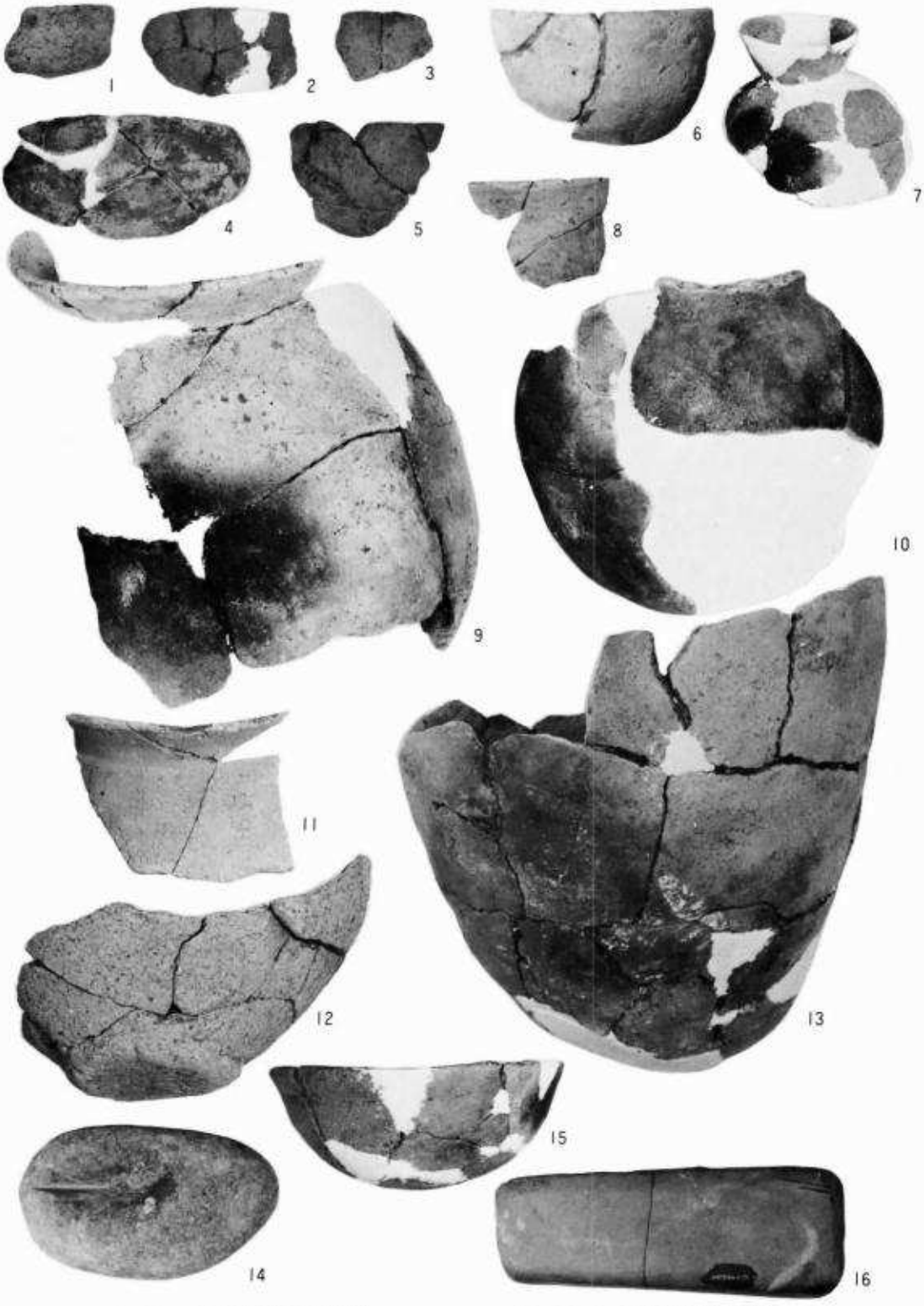


1：Ｃａ21建物跡（東側から撮影）

2

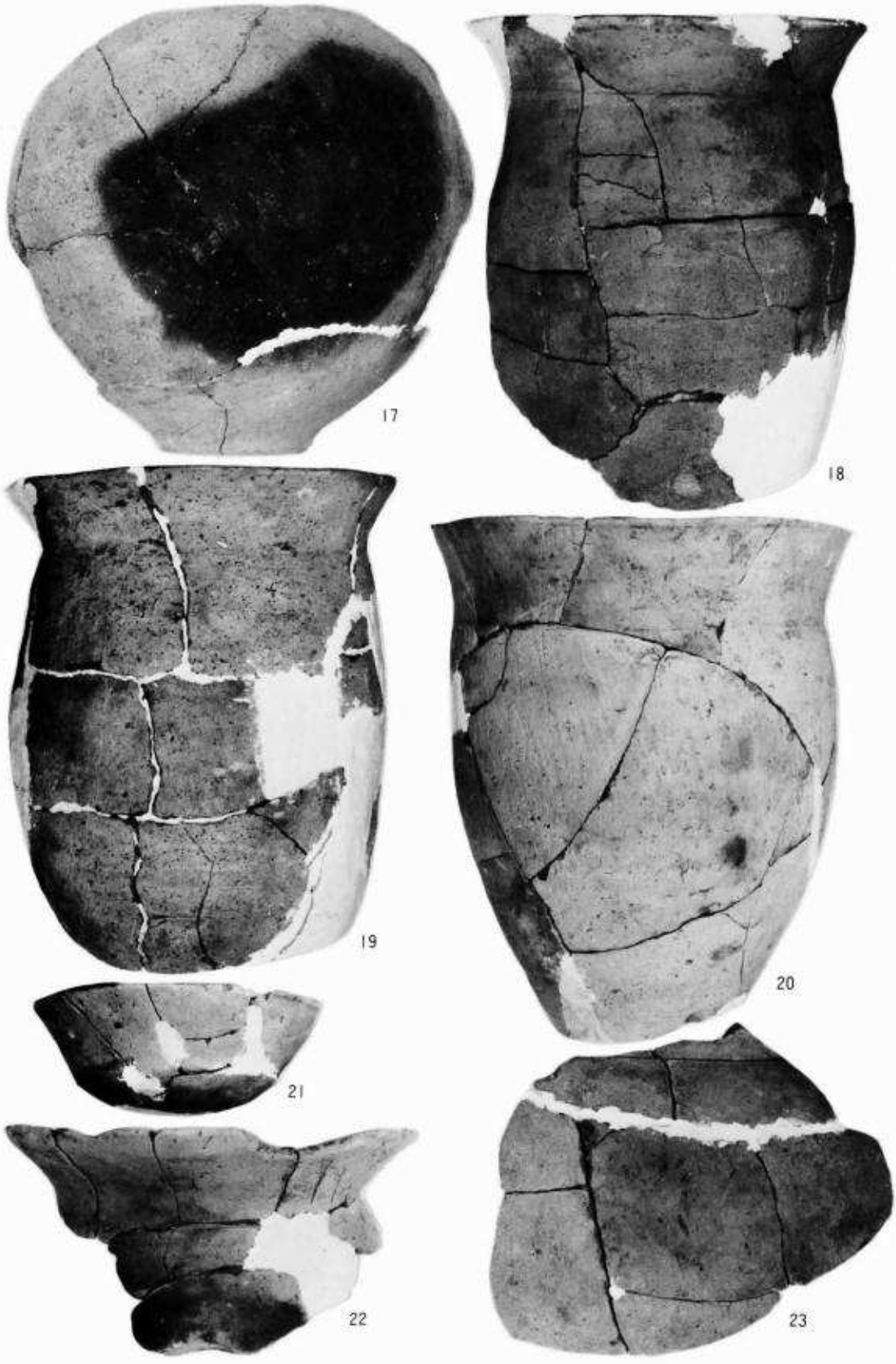
2：Ｃｅ65建物跡（西側から撮影）

図版６　Ｃａ21・Ｃｅ65建物跡

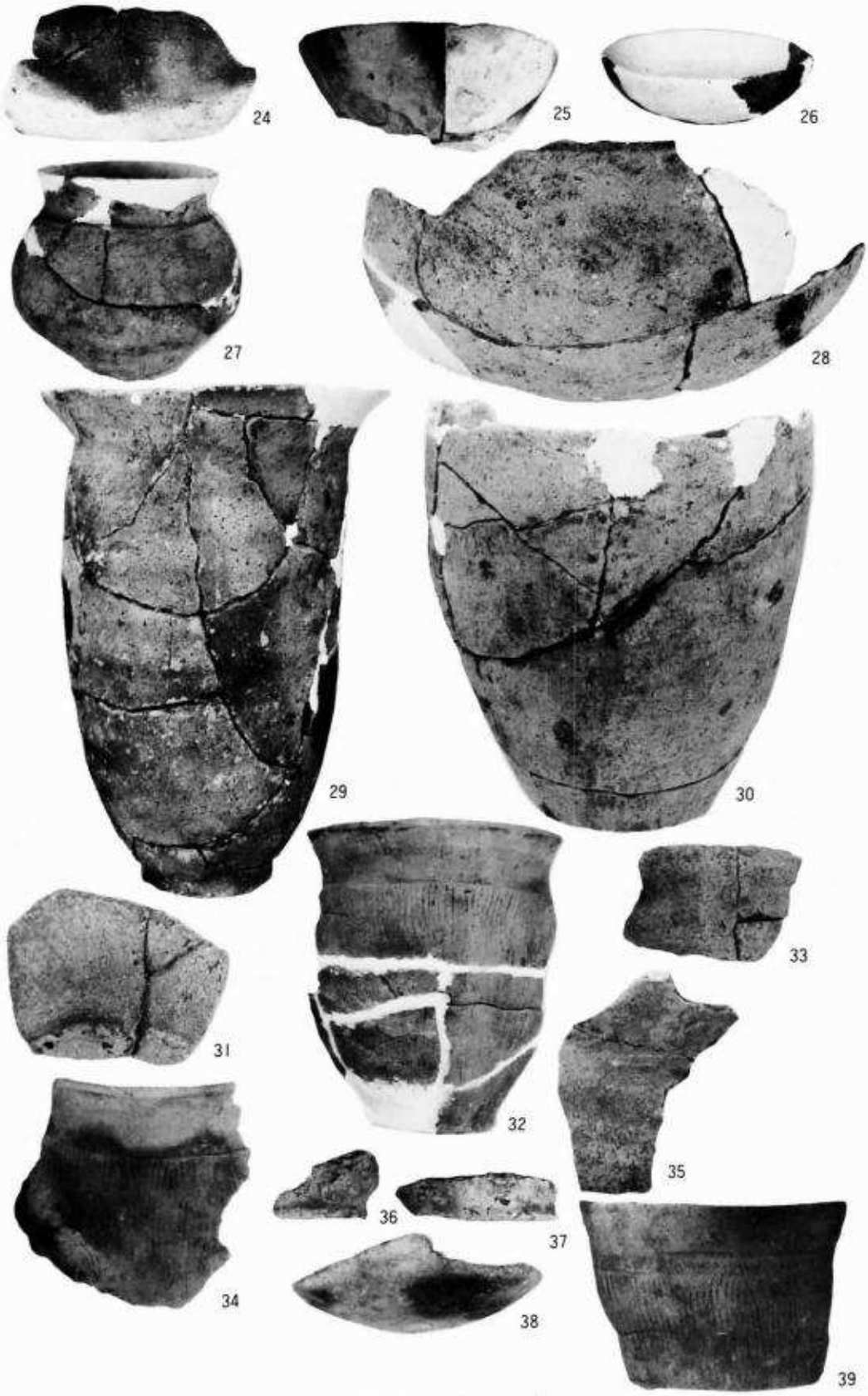


1－14：Ｃｆ53住居跡出土遺物　　15・16：Ｃａ21住居跡出土遺物

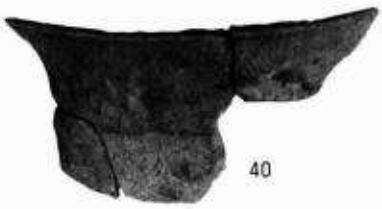
図版７　Ｃｆ53・Ｃａ21住居跡出土遺物



図版 8　Ca 21住居跡出土(17), Bj 3 住居跡出土(18～20), Bj 62住居跡出土(21～23)



図版 9　Bj 3 住居跡北側溝出土(24～30)
Cc 24住居跡出土(31～37) Cc 24遺構出土(38・39)


40

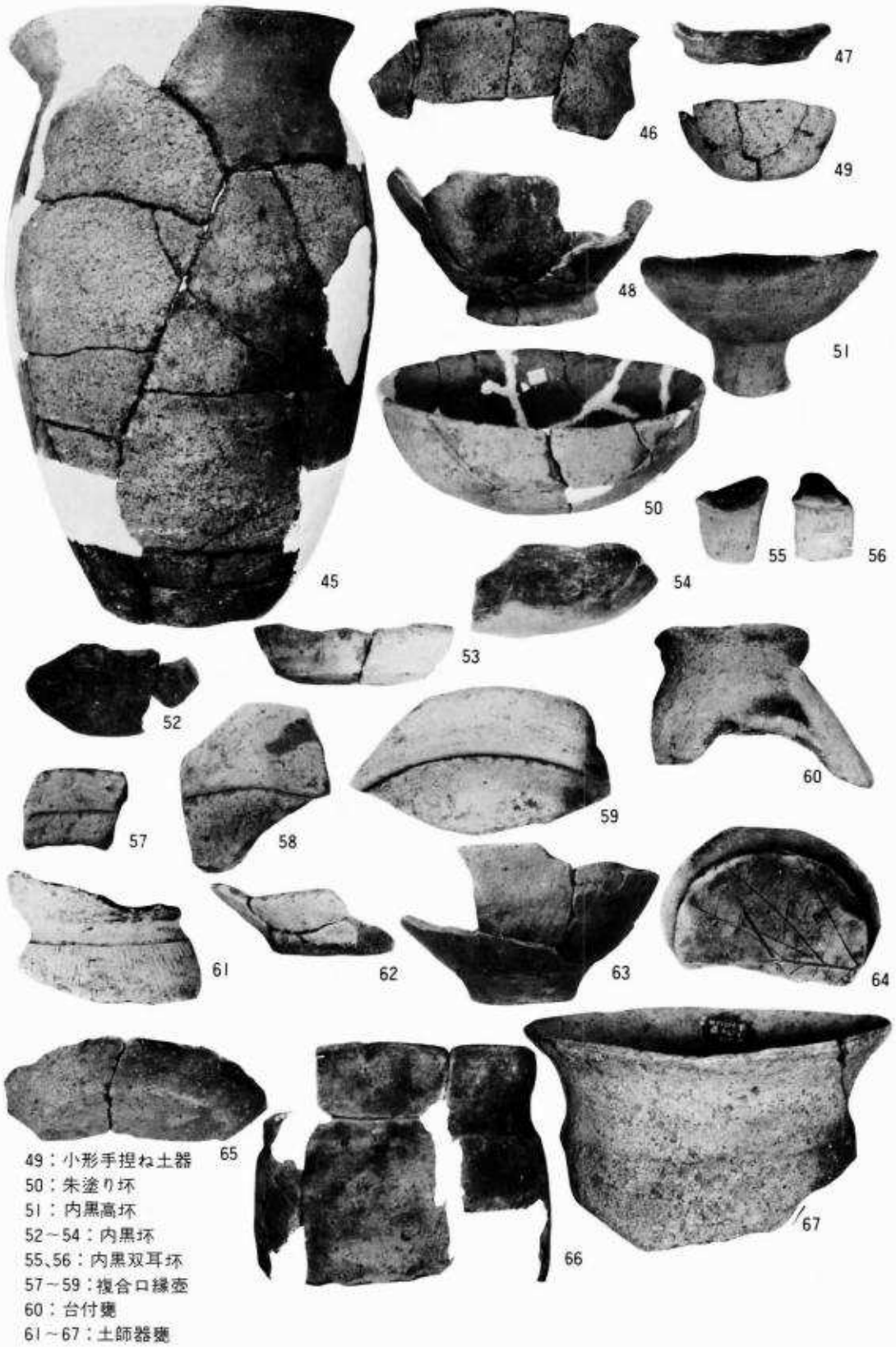
43

41

44

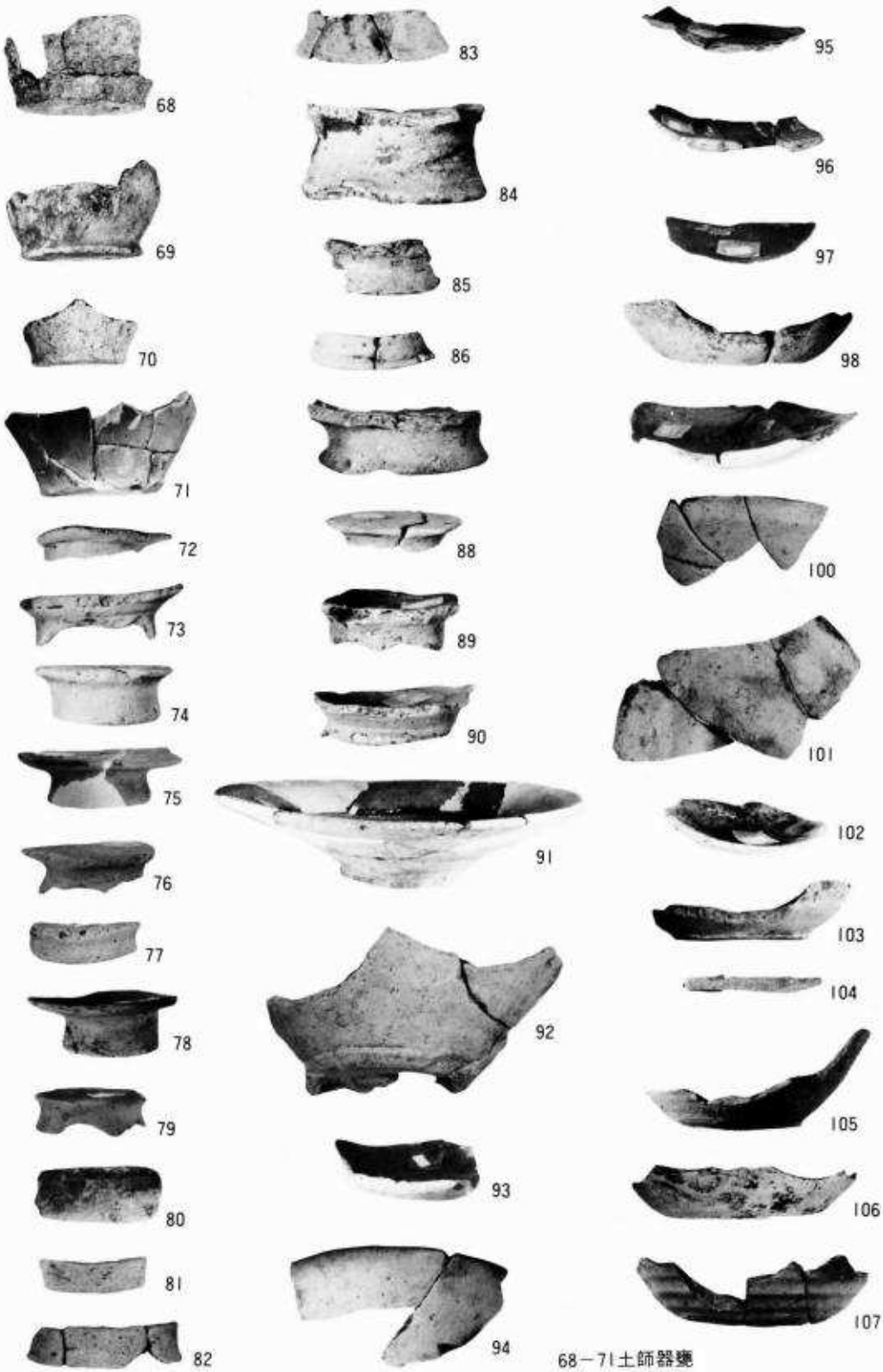
42

図版10　Cc24遺構出土(40～44)



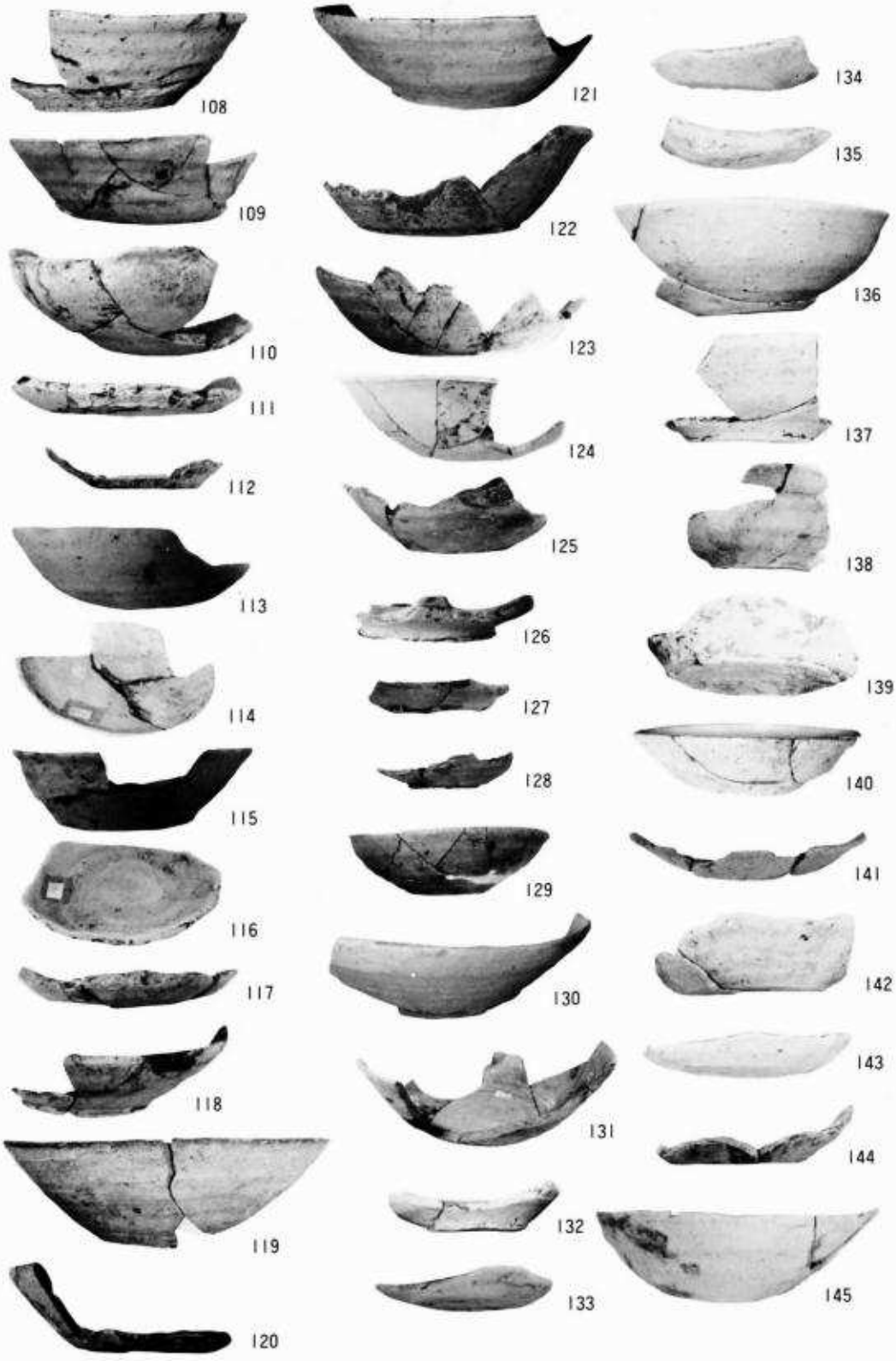
49：小形手捏ね土器
50：朱塗り坏
51：内黒高坏
52～54：内黒坏
55、56：内黒双耳坏
57～59：複合口縁壺
60：台付甕
61～67：土師器甕

図版11　Cc 24遺構出土(45)，Bf 30住居跡出土(46～48)，その他出土(49～67)

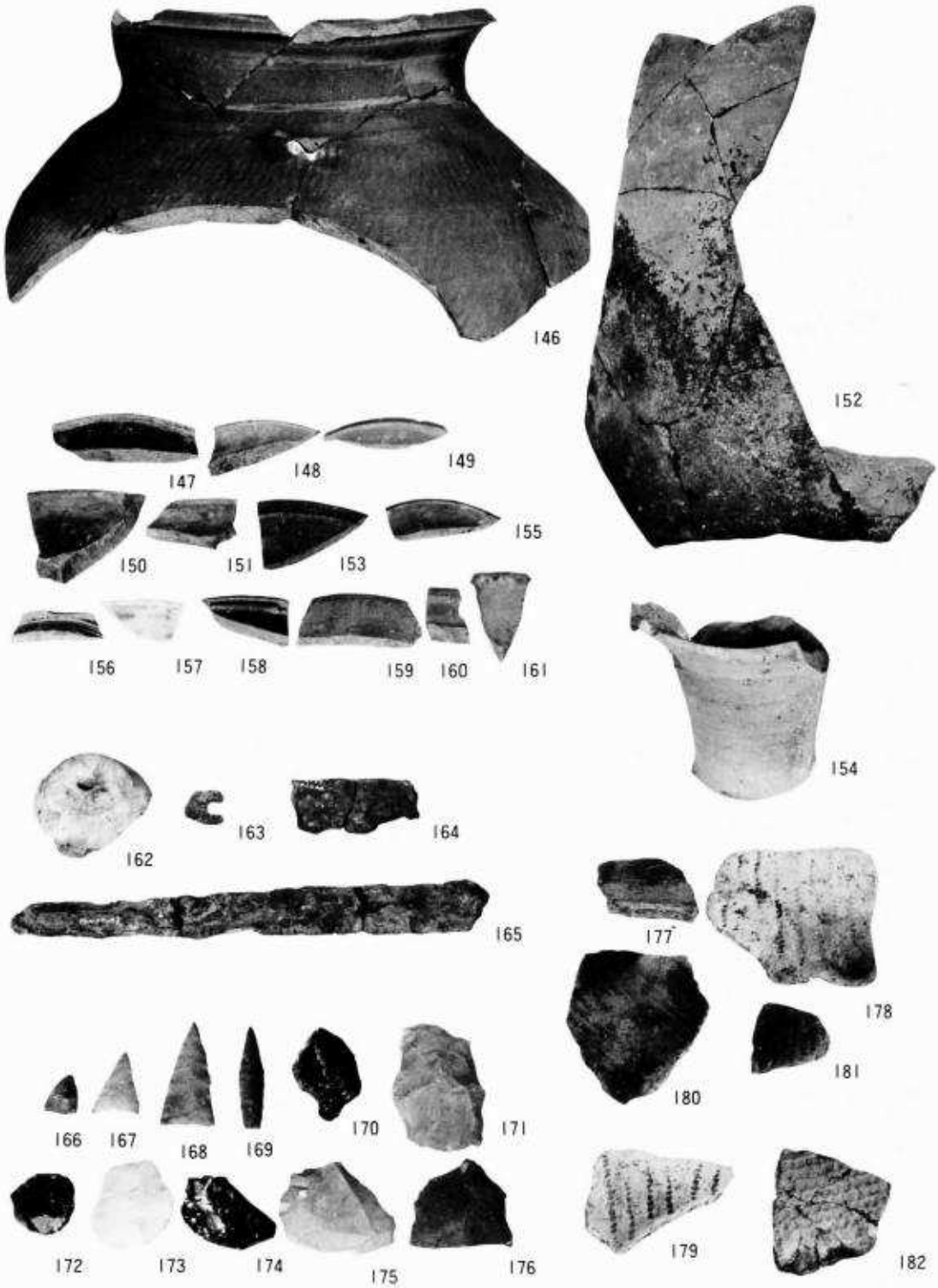


68－71土師器甕
72～92高台付坏
93～102ロクロ内黒坏
103～107ロクロ坏

図版12　溝・遺物包含地・その他出土土器



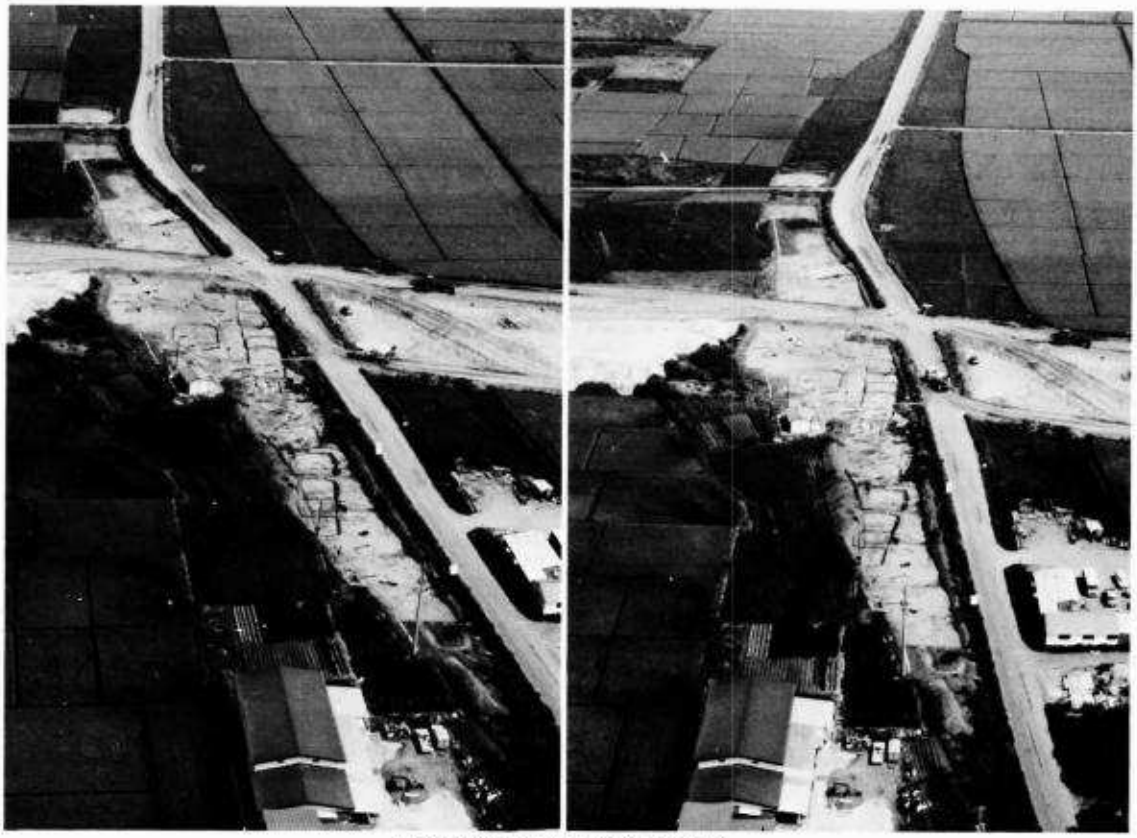
図版13　遺物包含地・その他出土ロクロ坏



146～161：須恵器壺・鉢・長頸瓶　162：土製紡錘車　163：永楽通宝
164・165：直刀　166－176：剥片石器　177－182縄文・弥生土器片

図版14　遺物包含地・その他出土遺物

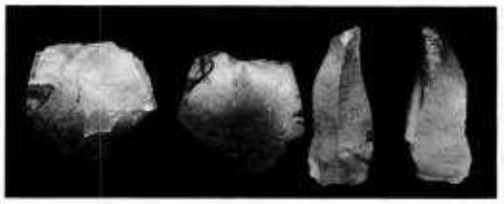
南矢中遺跡写真図版



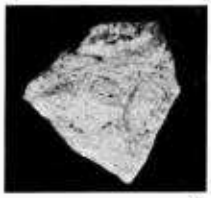
南矢中遺跡全景（立体空撮写真）

1（Ah68）出土

4



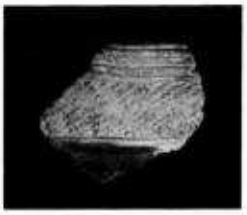
7　8



2

5

9　10

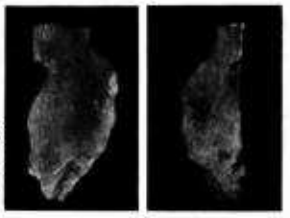


3

6

同右
鉄製品

第1号（Ca15）方形
溝炭化木ーナラ（½）

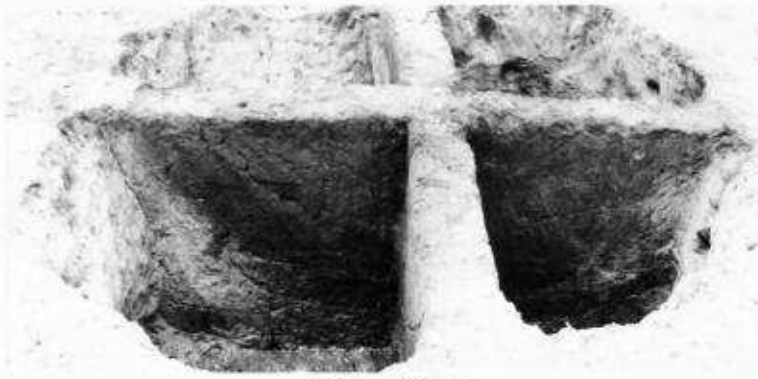


11、（Cc53）表採砥石

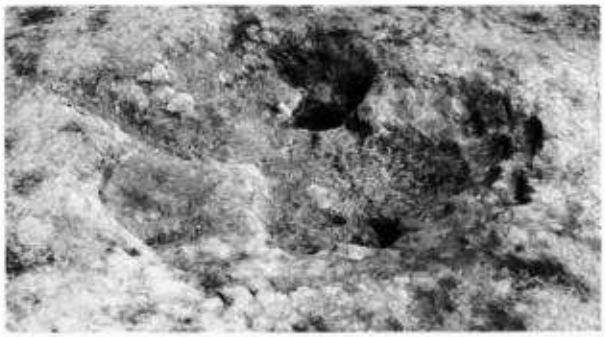
寛永通宝（実大）
方形溝地域出土

第1図　縮尺1：3

1.↑第2号(Bh53)土壙



↑同左土層断面



2.↑第2(Bi86)土壙(西より)

3.↑第3号(Cb18)土壙

4.↑第6号(Dc230)土壙(南より)

同左東西土層断面西側

5.↑第5号(Db242)土壙(北より)

同左土層断面東より

第2図　土壙

1.↑第3号(Be80)土壙

2.↑第5号(Bf53)同土層断面

3.↑第6号(Bg77)同

6.↑第11号(Bj77)同

4.↑第9号(Bi53)同

5.↑第10号(Bi89)同

9.第14号(Cc18)同

7.↓同上土層断面

8.↓第12号(Ca15)同

第3図　溝状土壙

1.↑第16号(C c 50)土壙

2.↑第20号(C e 24)土壙

3.↑第19号
(C e 27－2)土壙

5.↑第18号(C e 27－1)土壙土層断面

4.↑第18号(C e 27－1)土壙

6.↑第17号(C e 30)土壙

7.第17号(C e 30)土壙土層断面

8.↑第22号(C f 06)土壙

第4図　溝状土壙

1.↑第21号
(C f 24)土壙

3.↑第23号(C g 27)土壙

2.第21号(C f 24)土壙土層

4.↑第24号(C h 45)土壙

5.↑第26号(C h 36)土壙

6.↑第26号(C h 36)土壙土層

7.↑第28号(C i 36)土壙

8.第30号(C j 36)土壙
9.　　同　土層

8　9

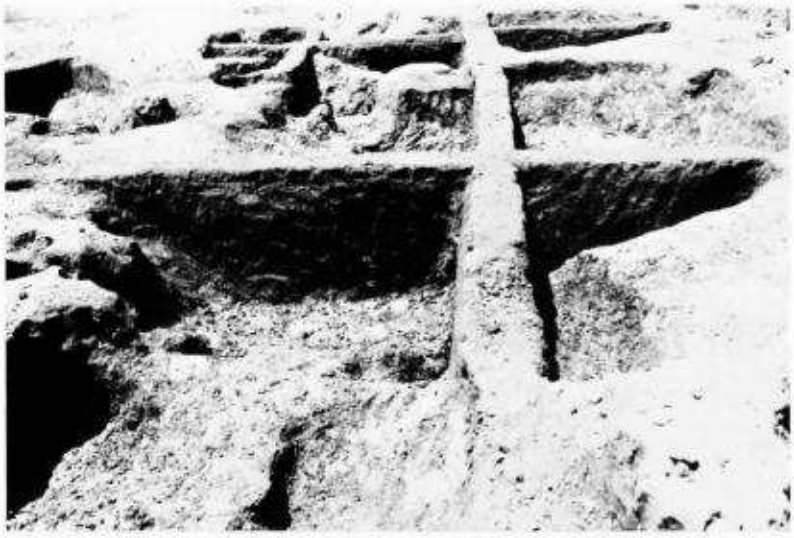
第5図　溝状土壙

1.↑第32号(Db 233)土壙

2.↑第33号(D c 242)土壙

3.↑第32号(D c 242)土壙土層

4.↑第34号(Dd 242)土壙



5.↑第5号(Ch30)焼土遺構No.1(東側)南北断面

6.↑同No.2(西側)東西断面

第6図　溝状土壙

1

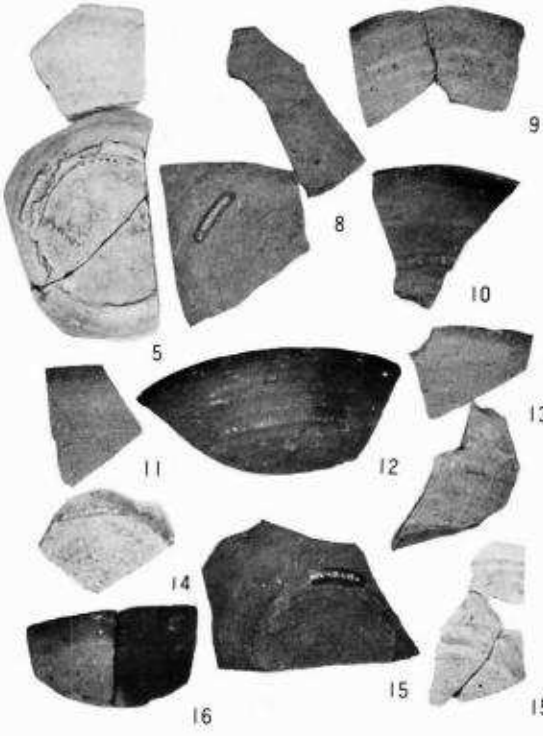
4

2

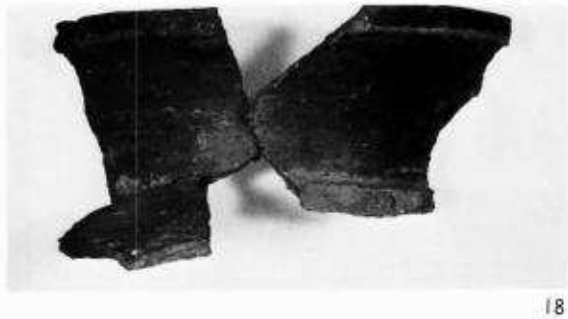
6

3

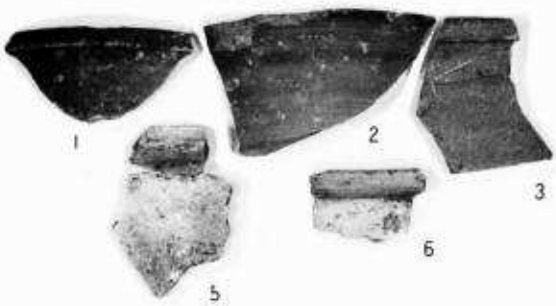
7

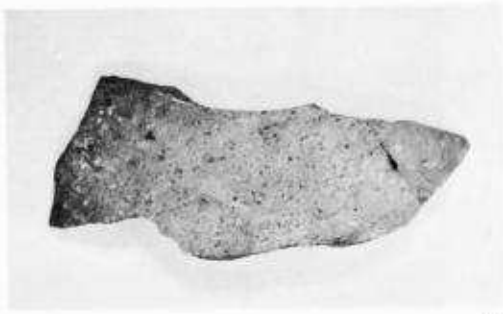


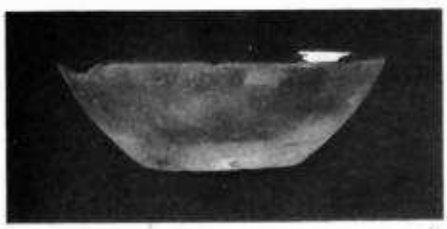
17


18

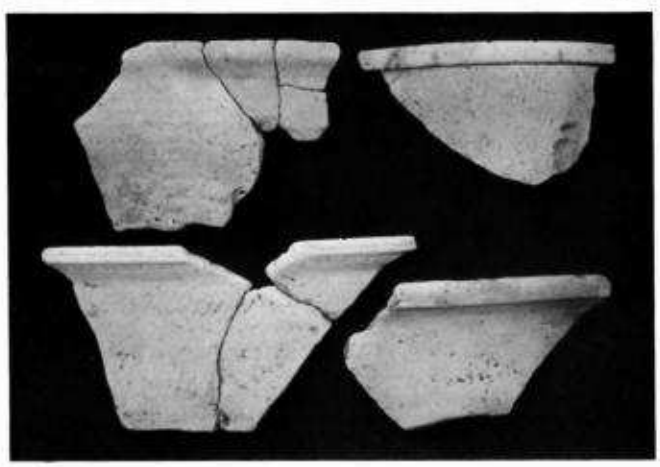
第７図　第５号(Ｃｈ30)焼土遺構出土須恵器　縮尺１：３







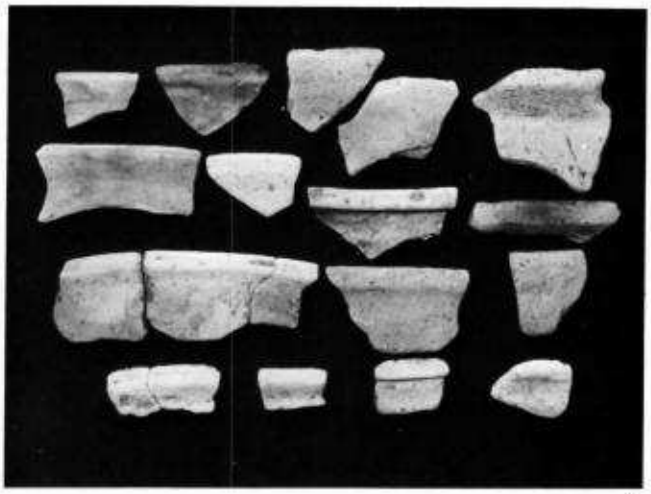
13 15
14 16 →



第8図　第5号(Ch30)焼土遺構
出土土器(縮尺1：3)

Q 3床

1



3

2

No. 2 ベルト床面

5

Q 2床

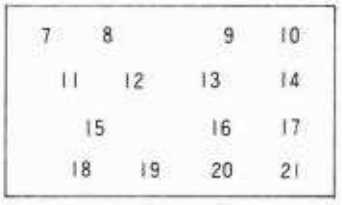
6

石盤

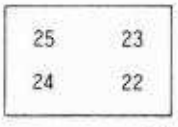
4

鉄製品

穂摘み用具



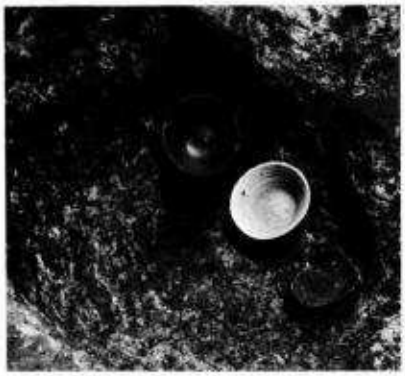
3



4

(C h24)付近II層　出土鉄器

第9図　第5号(C h30)焼土遺構出土遺物　縮尺1：3



↑第５－１号焼土遺構(出土)　同下

↑第５－２号焼土遺構(出土)

↕第８号(Ｃｆ33)方形溝北西隅焼土

↑第１号(Ｃｆ33)焼土遺構

↓第６号(Ｃｉ33)焼土遺構(断面)

↑第２号(Ｃｈ200②)焼土遺構

↑第３号(Ｃｈ200①)焼土遺構

第10図　焼土遺構等

1

2

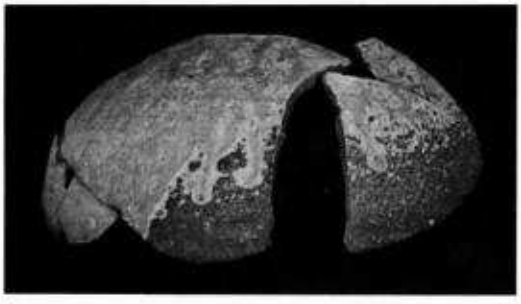
3

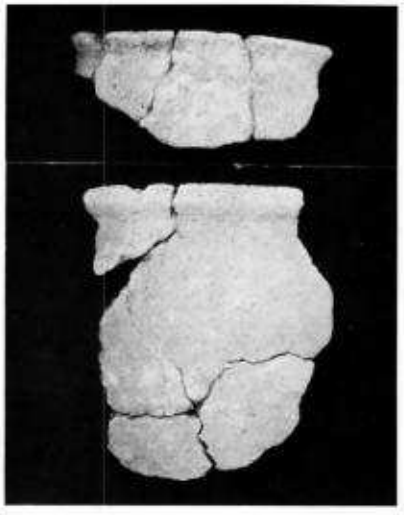
3

4

5

6


11


7

8

12

須恵器 (1－5：杯 11－12：甕)

土師器 (6：内黒杯 7－9　甕)

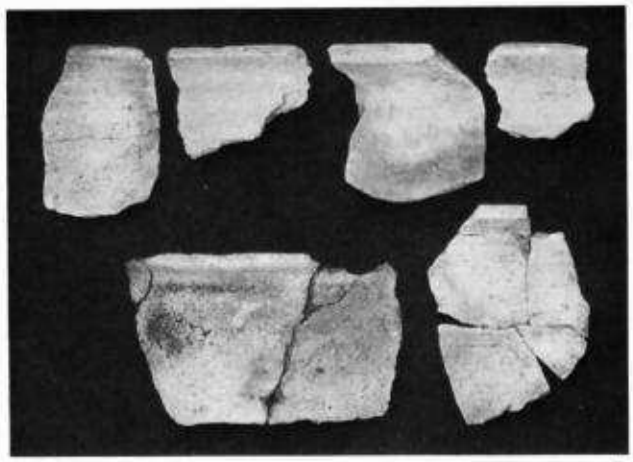
縮尺1：3

13

9

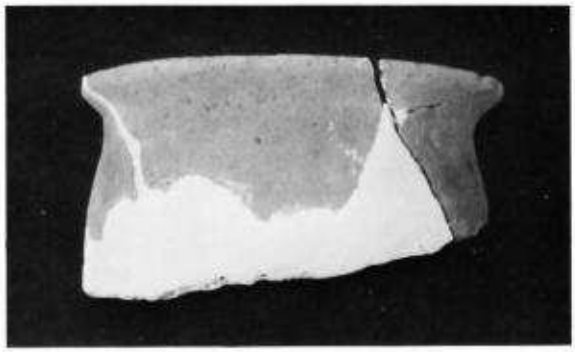
第11図　第1号(Bc71)竪穴式住居跡出土遺物

1


3

2

4 5 6 7
8 9
3

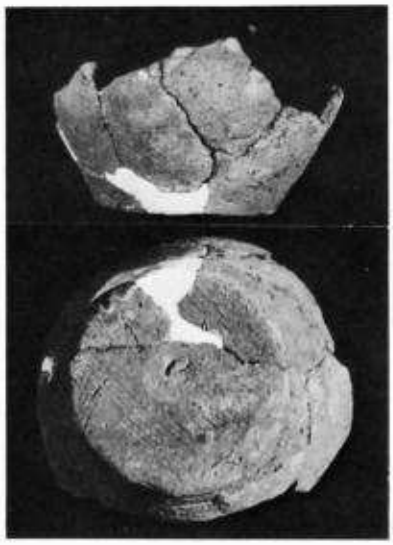

10

11

12

13

17


15
16

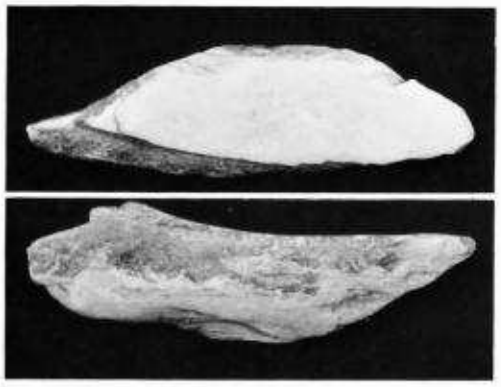
第12図　「第１号(Ｂｃ71)住」出土土師器　　縮尺１：３

1

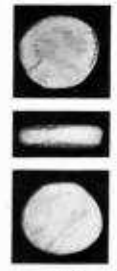
2

3

1～3：土師器甕底部



砥石



石盤

砥石として使用された須恵器甕片

（遺物縮尺１：３）

刀子

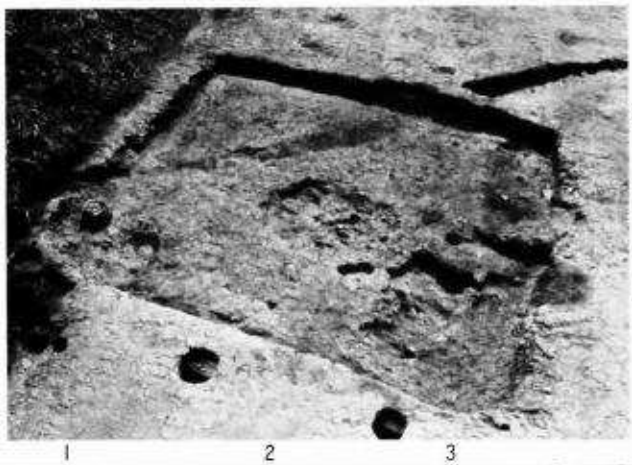
鉄製品

↑住居跡全景（降雪のため不鮮明）

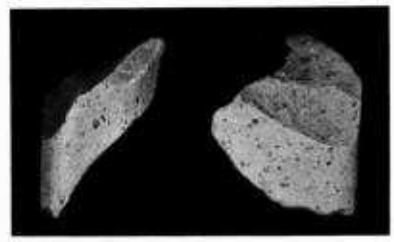
←カマドに切られた第１号（Bc 71）土壙

→住居跡に切られた第１号（Bd 71）溝状土壙

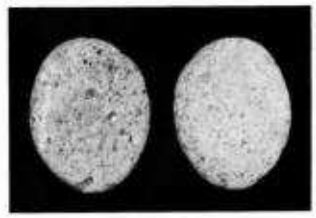
第13図　第１号（Ｂｃ71）竪穴式住居跡（関連遺物）



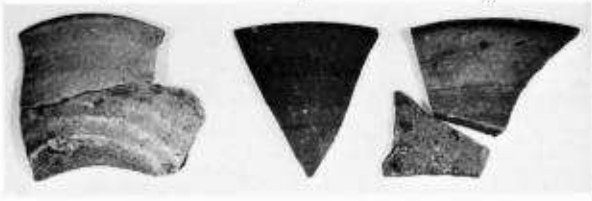
第2号住居跡全景



砥石



1　2　3



4　5　6

7　8　9

10　11　12　13

第4号住居跡(付近)全景

14－18：
第4号住居跡
出土土師器

14

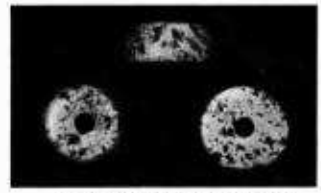
16

15

17

19　20

鉄製品



石製紡錘車(壁際出土)

18

遺物縮尺 1 ： 3

第14図　第2号(Be107)第4号(Bg98)竪穴式住居跡

住居跡全景

カマド検出状況

カマド土層断面等

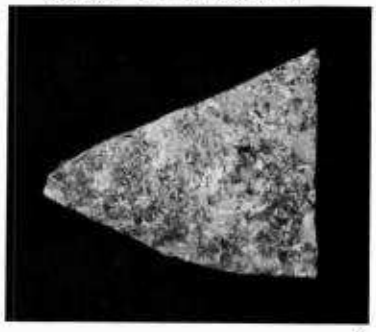
炭化材(¹⁴C年代測定資料)

墨書(本)

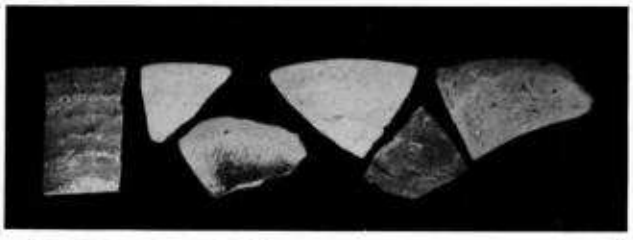
1

須恵器
(杯：1～3
甕：4

2

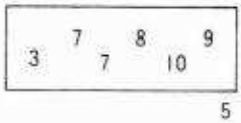


4



5

6



5

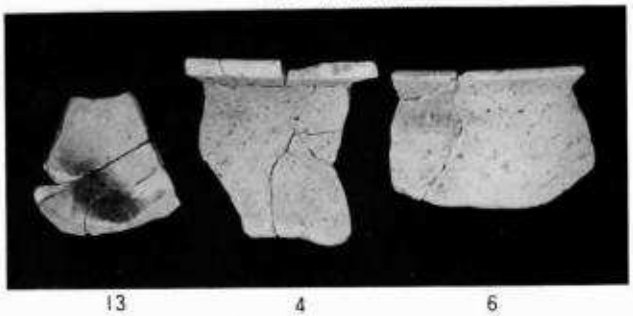
土師器　杯6～10

鉄製品(Q，出土)

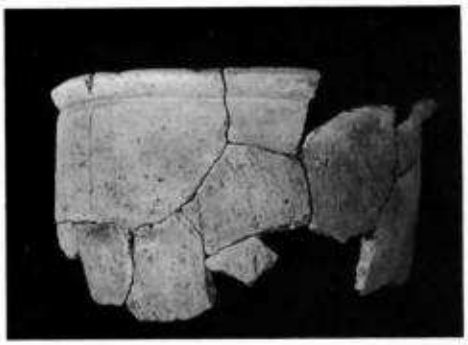
第15図　第3号(B f 56)竪穴式住居跡(出土遺物縮尺1：3)

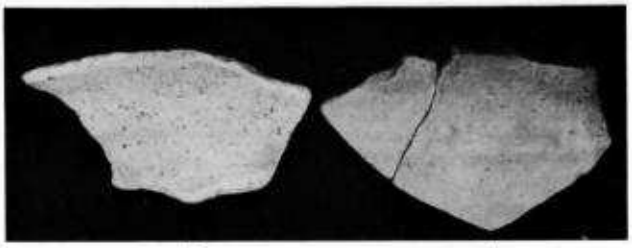
（床面出土）　1

（カマド床面出土）　3



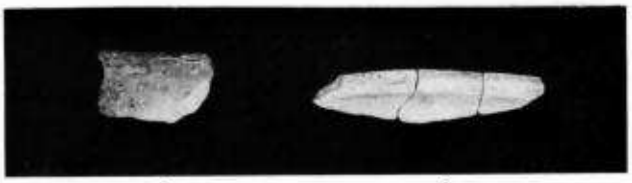
13　4　6





5　7

2



8　9

（土壙出土）　12

10　11

第16図　第３号（Ｂｆ56）竪穴式住居跡出土土師器（縮尺１：３）

住居跡全景　↑掘上げ後

住居跡東側カマド付近落込み

土師器内黒杯　2

（赤橙色）

墨書底
（糸切離し）

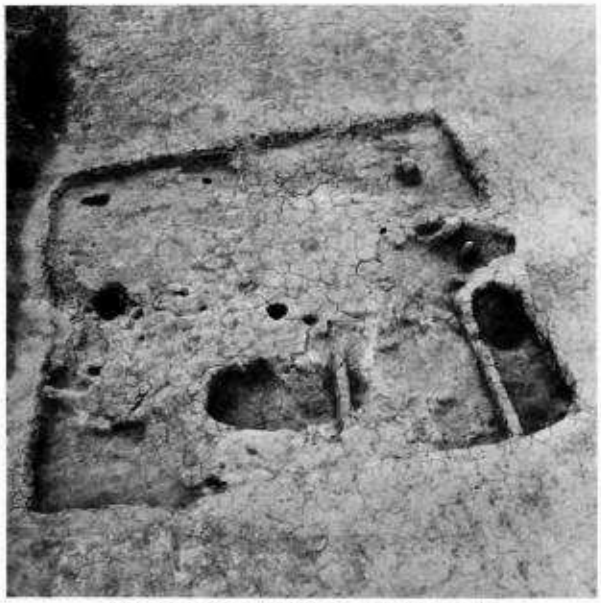
内外黒色処理小壺 3

第17図　第５号（Ｂｈ06）竪穴式住居跡（関連出土遺物縮尺１：３）

第７号(Ｄａ224)竪穴式住居跡
「12号(Ｃｉ224) 方形溝状遺構に切られている」

第７号(Ｄａ224)竪穴式住居跡、カマド付近(西より)

第７号(Ｄａ224)竪穴式住居跡出土須恵器
(底部が床面より出土、口縁部は第８号住居より出土し接合した)縮尺＝１：３



第８号(Ｄｆ245)竪穴式住居跡(東より)

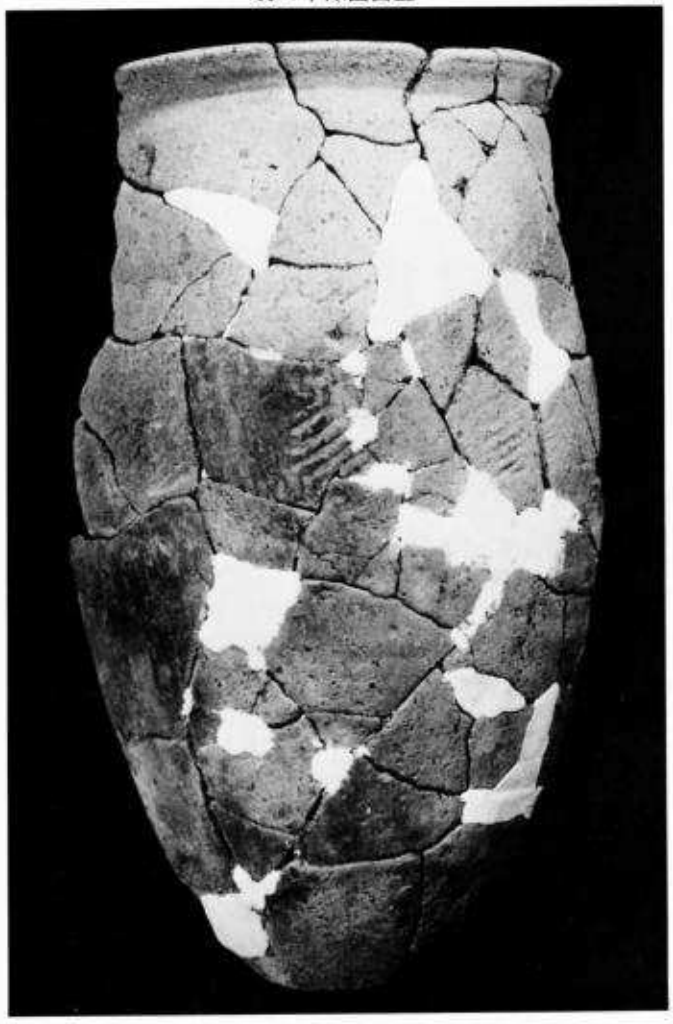
第８号(Ｄｆ245)竪穴式住居跡カマド付近甕出土状況

同左出土甕を取り上げカマド支脚を検出

第18図　第７号(Ｄａ224)・第８号(Df245)竪穴式住居跡関連

カマド床面出土　1

カマド床面出土　2



4

3

第19図　第8号(Df245)竪穴式住居跡
出土土師器甕　縮尺1：3

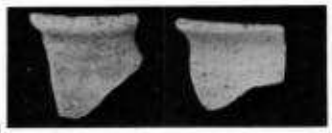
カマド焼土小土壙

2

3

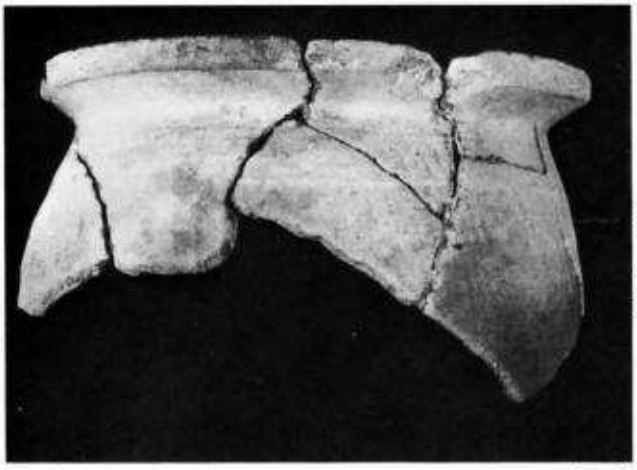
(1)

(1)



7 6

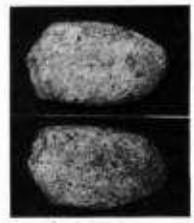
9



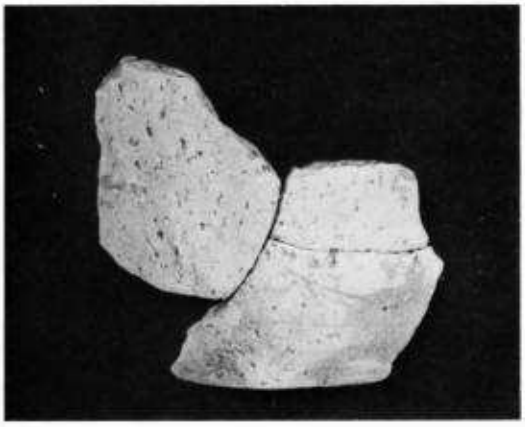
カマド焼土

4

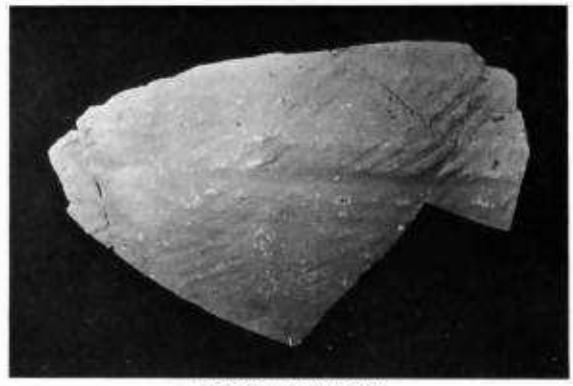
8



東床面出土



5



須恵質土器(軟質)

第20図　第８号(Ｄｆ245)竪穴式住居跡出土遺物 土師器甕等　縮尺１：３

1.↑第1号(Ca15)方形溝、東から。

↑4.第3号(Ce06)同東溝(①－19)

2.↑第2号(Cd50)方形溝、北から。

5.↑第4号(Ce12)方形溝

3.↑第2号方形溝北溝東隅

6.↑第4号方形溝北溝(①－17)

7.↑第5号(Ce15)方形溝

8.↓第5号方形溝(①－14)

9.↓第6号(Ce21)方形溝

第21図　方形溝遺構

1.↑第6号(Ce21)第5号(Ce15)方形溝落込み、南から

2.↑第7号(Cf27)方形溝北西コーナー

3.↑第6号方形溝北溝(①－13)

4.↑第8号(Cf33)方形溝、西溝(①－1)

6.↑第8号方形溝東溝ピット

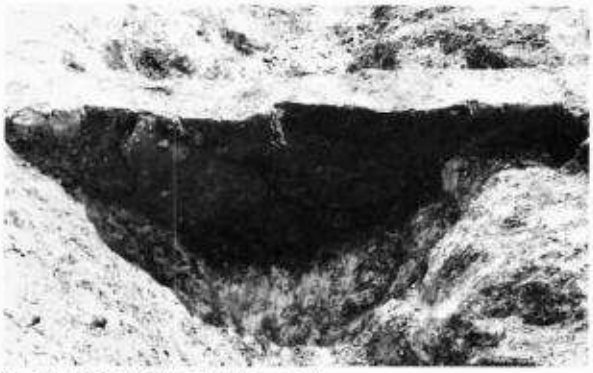
5.↑第8号方形溝北溝(①－2)

7.↓第8号方形溝北から

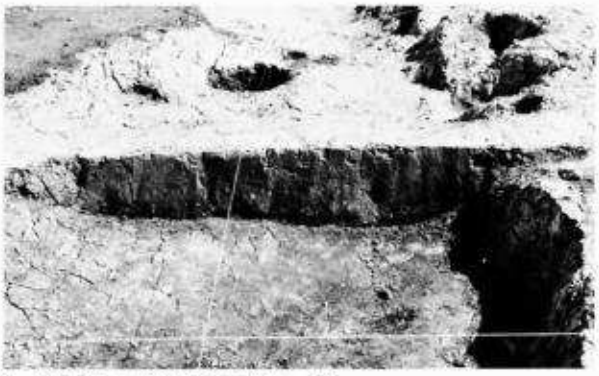
8↓同北東すみ

第22図　方形溝状遺構

1.↑第9号(Ch200)方形溝西溝(②－22)



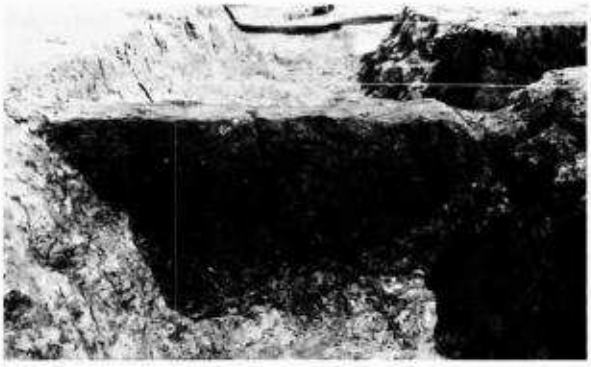
2.↑第9号方形溝南溝(②－23)



3.↑第9号方形溝東南溝(②－24)

4.↑第9号方形溝中央ピット北西から

5.↑第10号(Ci209)方形溝



7.↑第10号方形溝東溝(②－21)

6.↓第10号方形溝南溝(②－20)

8.↑第10号方形溝西溝(②－16)

第23図　方形溝遺構

1.↑第11号(C i 218)方形溝南溝(②－13)

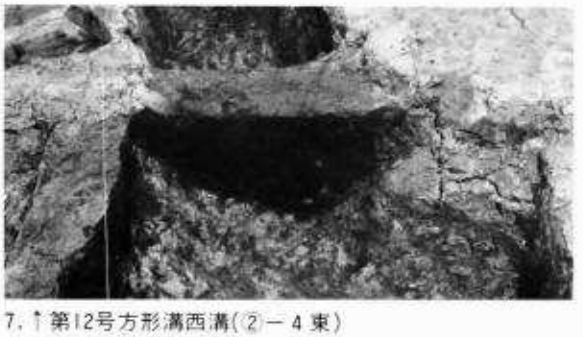
2.↑第11号方形溝南溝西コーナー(②－10, ②－12)

3.↑第10号第11号方形溝つなぎ(②－15)

4.↑第11号方形溝(②－18)

5.↑第11号方形溝東溝

6.↑第12号(C i 224)方形溝西溝(②－4 西)

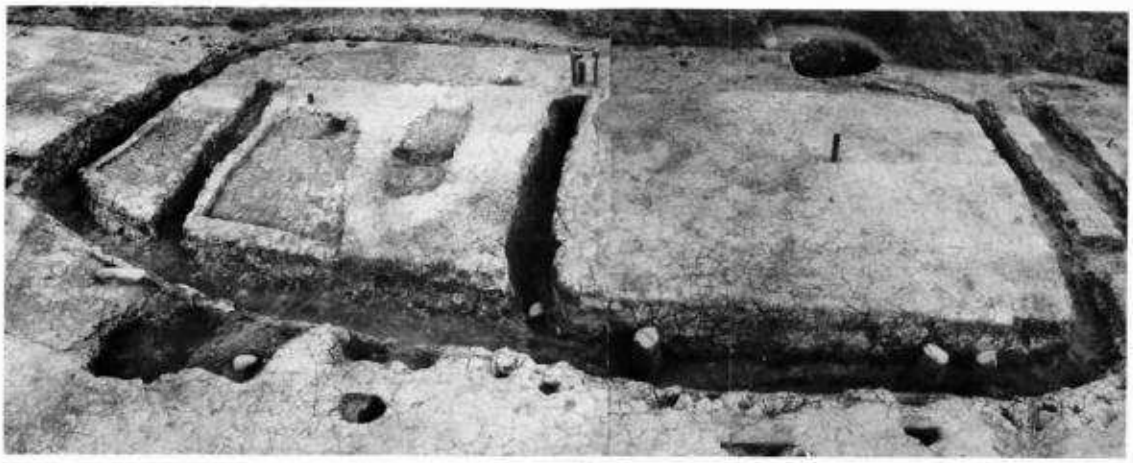


7.↑第12号方形溝西溝(②－4 東)

8.↑第13号(D a 230)方形溝南より

→
9.第13号方形溝
東南溝(②－1)

第24図　方形溝遺構

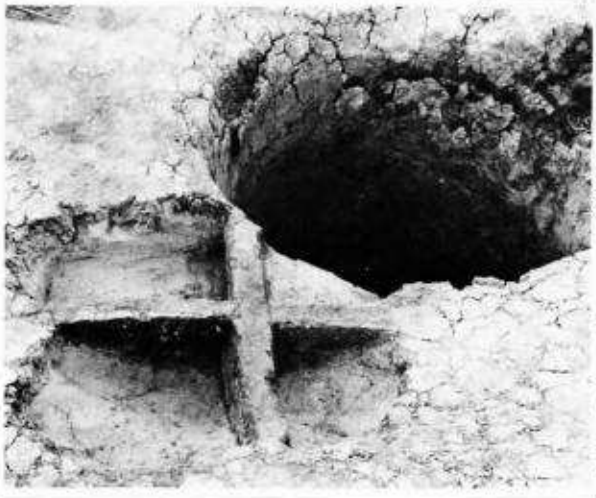


↑第12号(Ci 224)、11号(Ci 218)方形溝　I

II

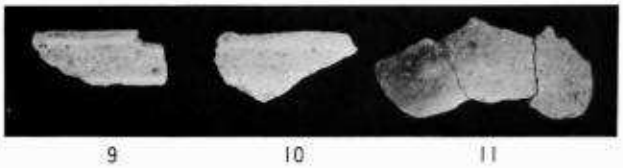
←円形土壙(Ch 200)

←第3号焼土遺構



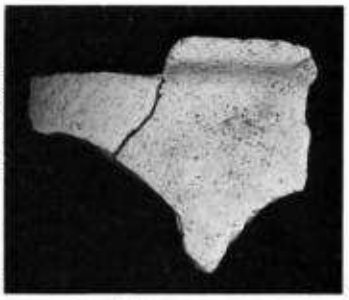
1　2　3　4

5　6　7　8



9　10　11

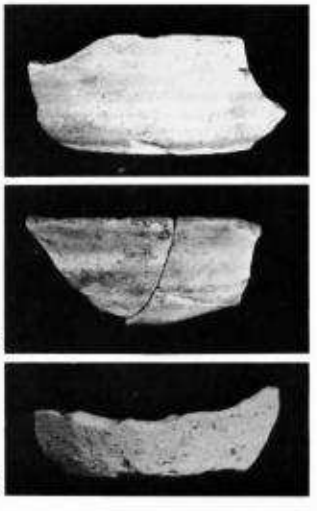
↑(Cg)試掘溝出土



20

円形土壙出土　12　蓋13　14

同上　15　16



17

18

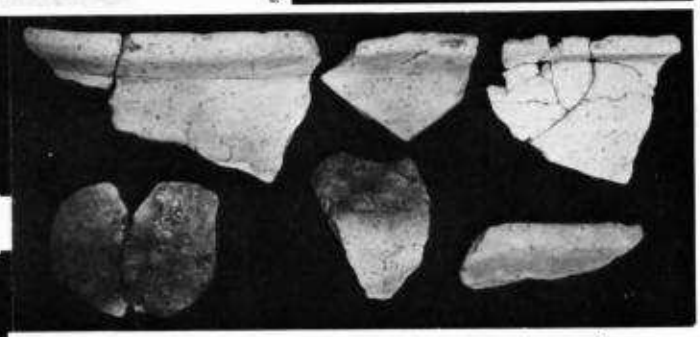
19

第25図　方形溝・焼土遺構(関連遺物縮尺1：3)

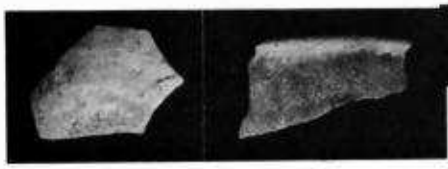
←第8号方形溝付近より東を望む

2

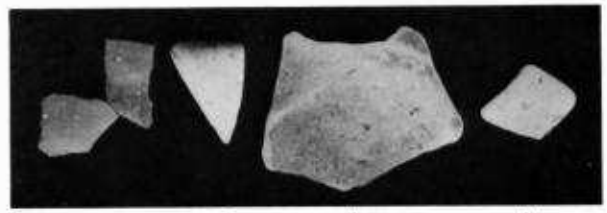
1



3 4 5 6 7 8

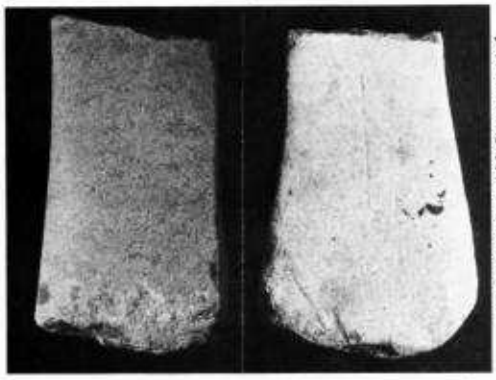


13 14



9 10 11 12

15

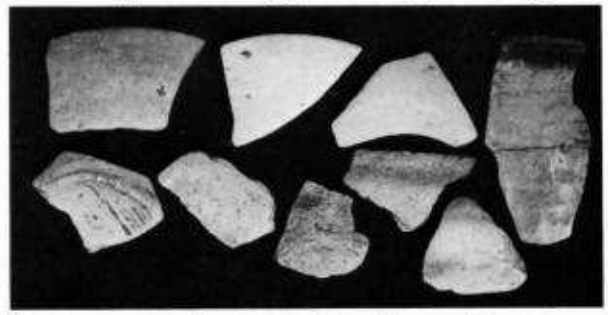


←第6号竪穴(Ci33)焼土遺構出土

16 17 18 19 20 21 22

29

28



23 24 25 26 27

第26図　方形溝関連出土遺物　（縮尺１：３）

袖谷地遺跡写真図版

南北溝．Bf53附近より東を撮影

Ba区溝．Bb50附近より東を撮影

Ba区出土須恵片．　蓋．S＝⅓

溝土層断面1

溝土層断面8

溝土層断面5

溝土層断面10

溝土層断面14

第1図　溝

Ｂｈ15住遺構全景南側より撮影

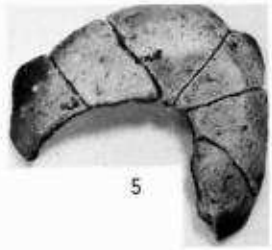
Ｂｈ15住　焼土ピット

1

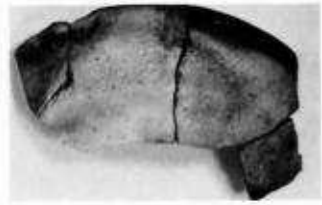
2

3

4



5



7

6

8

9

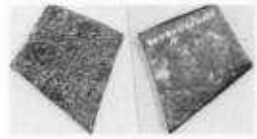
10

11

12

13

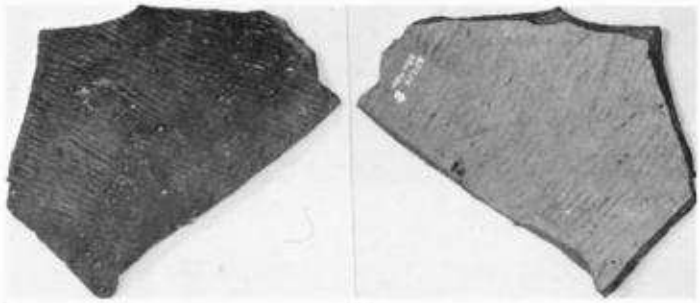
15



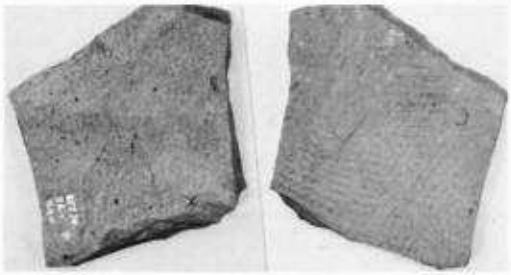
16

17

第２図　第１号(Ｂｈ15)竪穴式住居跡(関連遺物縮尺１：３)



18



14

19

18～19：第1号住出土物

C c 65住坏出土状況

C c 65住遺構南側より撮影

7

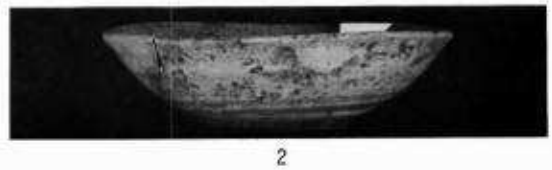
9

C c 65住カマド

11

12

1



2

1－12：第5号住出土

第3図　第5号(C c 65)竪穴式住居跡、他（遺物 縮尺1：3）

3

4

5

6

8

10

14

15

16

17

13

第4図　第5号住出土物（縮尺1：3）

Ｃａ68住遺構全景北より撮影

Ｃａ68住東カマド西方より撮影

Ｃａ68住東　南より撮影

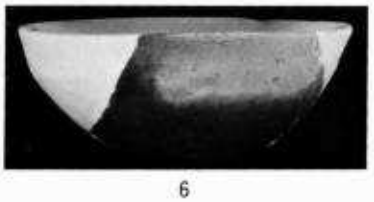
1

2

3

4

5

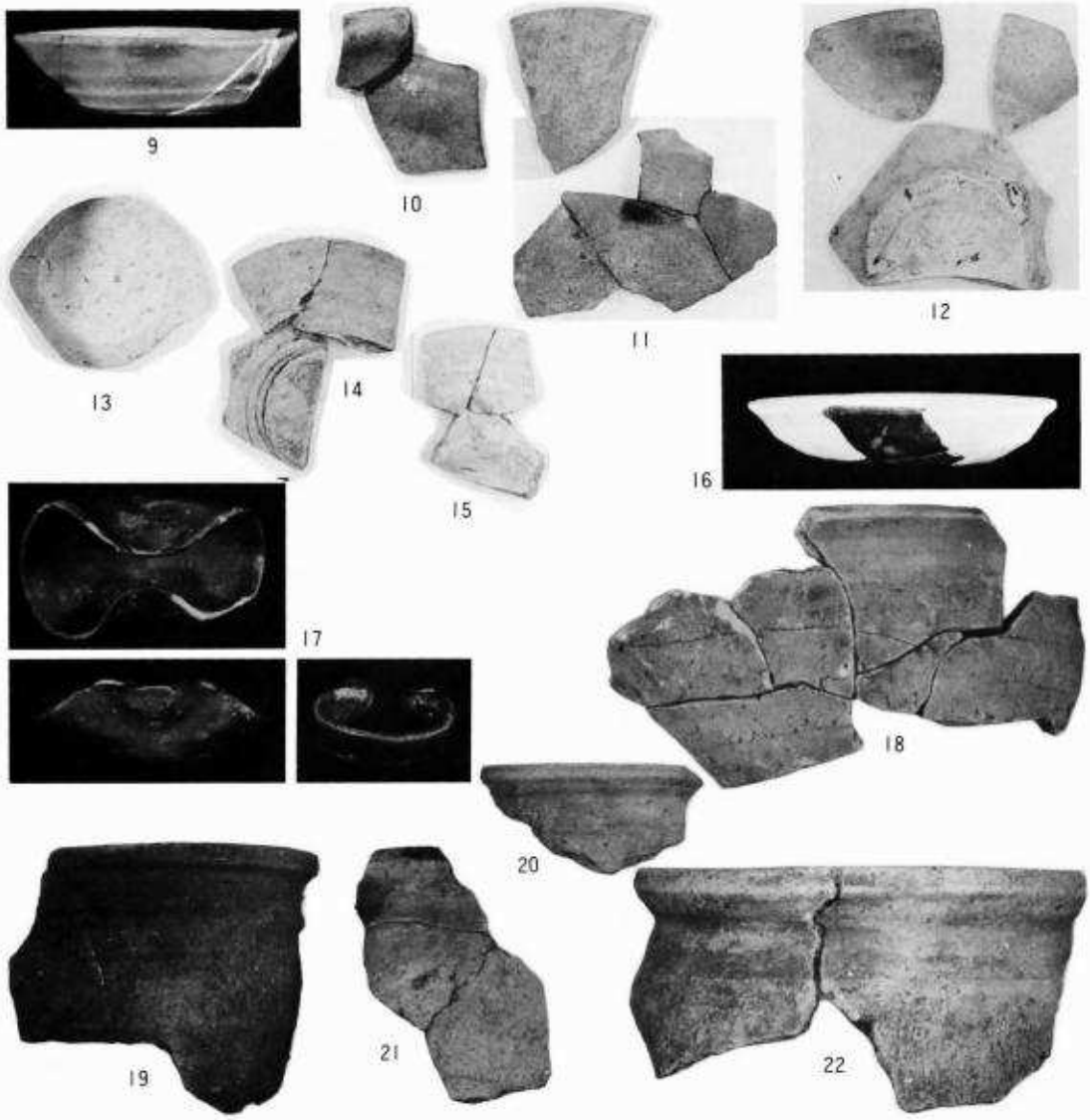


6

7

8

第５図　第４号(Ｃａ68)竪穴式住居跡(関連遺物縮尺１：３)



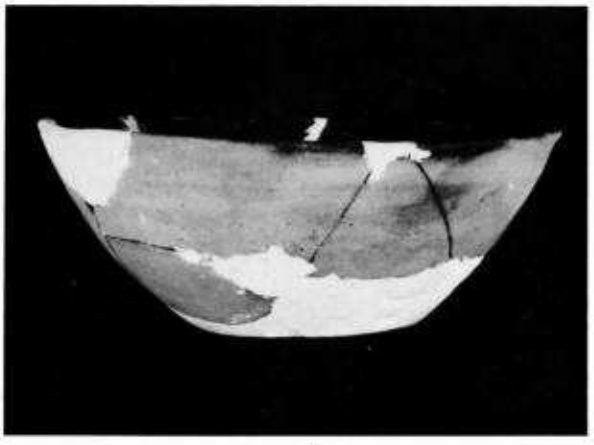
手前左Ｂｊ71住南西隅、右はＣａ68住、重複遺構北より撮影

第６図　第４号住出土遺物（縮尺１：３）

住居跡全景(北より)

焼土ピット

カマド

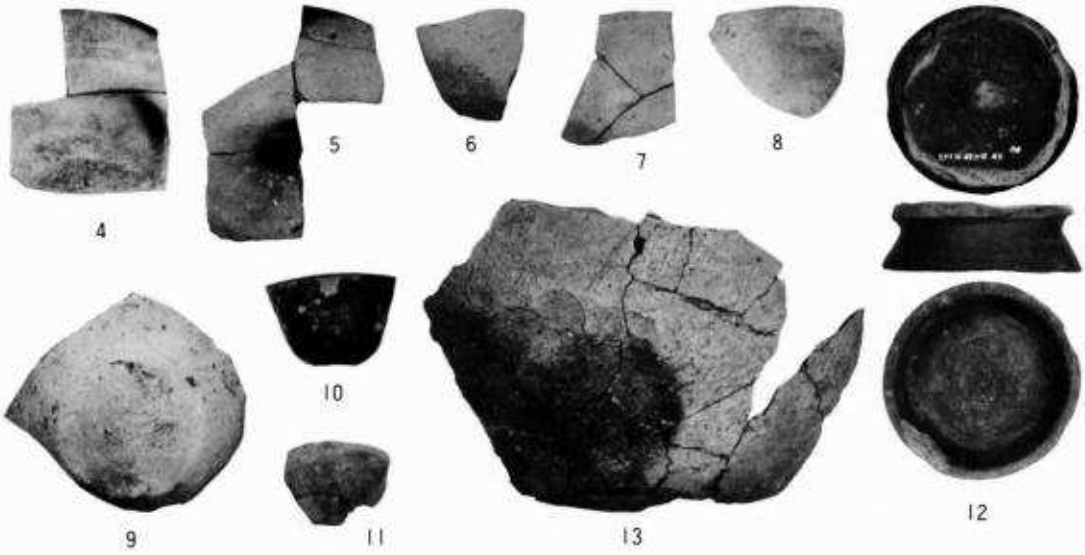


1

2

3

第7図　第3号(Bj71)竪穴式住居跡(関連遺物縮尺1：3)



a 第 1 号(B i 15)溝状土壙

b 第 3 号(B j 68)同左断面

C 第 2 号(B e 06)同

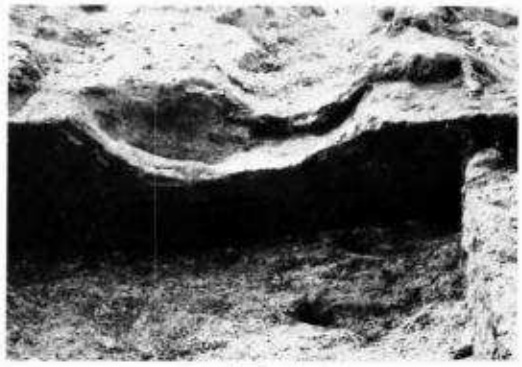
d 同左断面

第 8 図　第 3 号住出土物及び溝状土壙（遺物　縮尺 1 ： 3）

方形(Ｃａ59)遺構東より

同左南より

上断面Ｂ　下断面Ａ北より



同上断面Ｂ北より

円形(Ｃｂ03)土壙遠景(東より)

同上(西より)

同左中央

第９図　古代遺構

円形(Cb 03)土壙
出土遺物

1

3

5

その他の遺物

2

4

6

7

土壙、溝等遠景、南より

第1号土壙(B j 12)

第4号土壙(B d 03)(西より)

同左断ち割り

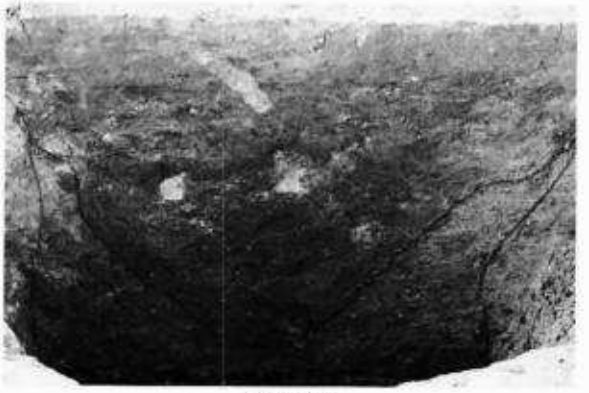
同上断面(北小土壙)

同上土層断面

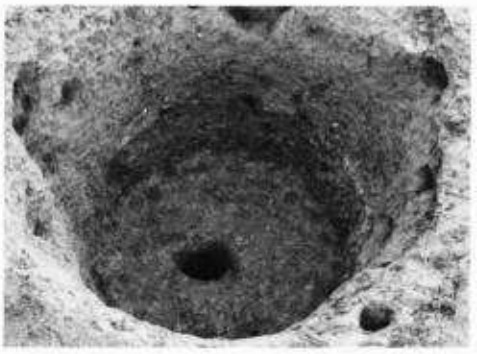
第10図　土壙等

第２号土壙（Ｂｇ03）

1



同左断面



第３号同（Ｂｇ50）

2

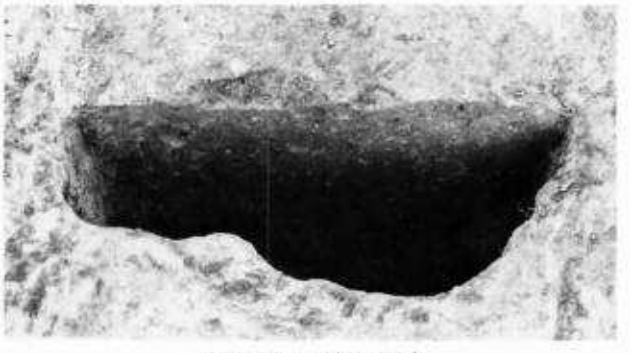
同左断面

第５号同（Ｂｉ53）

3

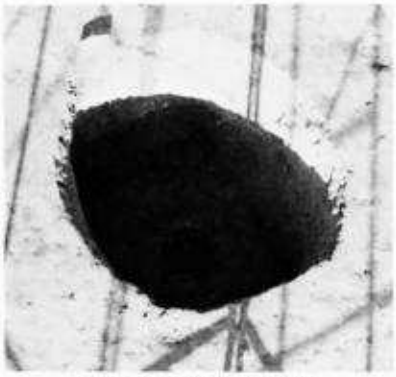
同左断面

第１号小土壙（Ｂｇ62）

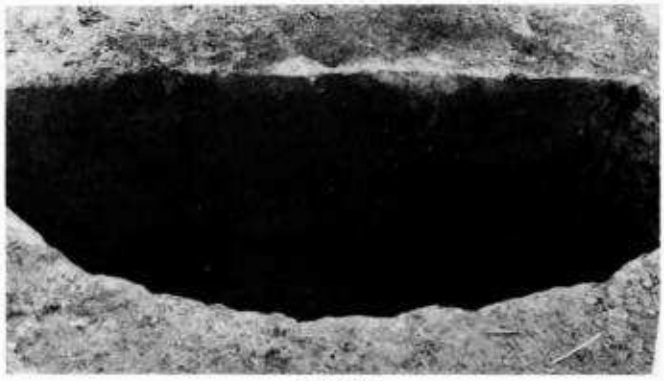


第２号小土壙（Ｂｉ62）

第11図　土壙



第６号土壙（Ｃａ65Ａ）　1



同左断面

第７号同（Ｃａ65Ｂ）　2

同左断面

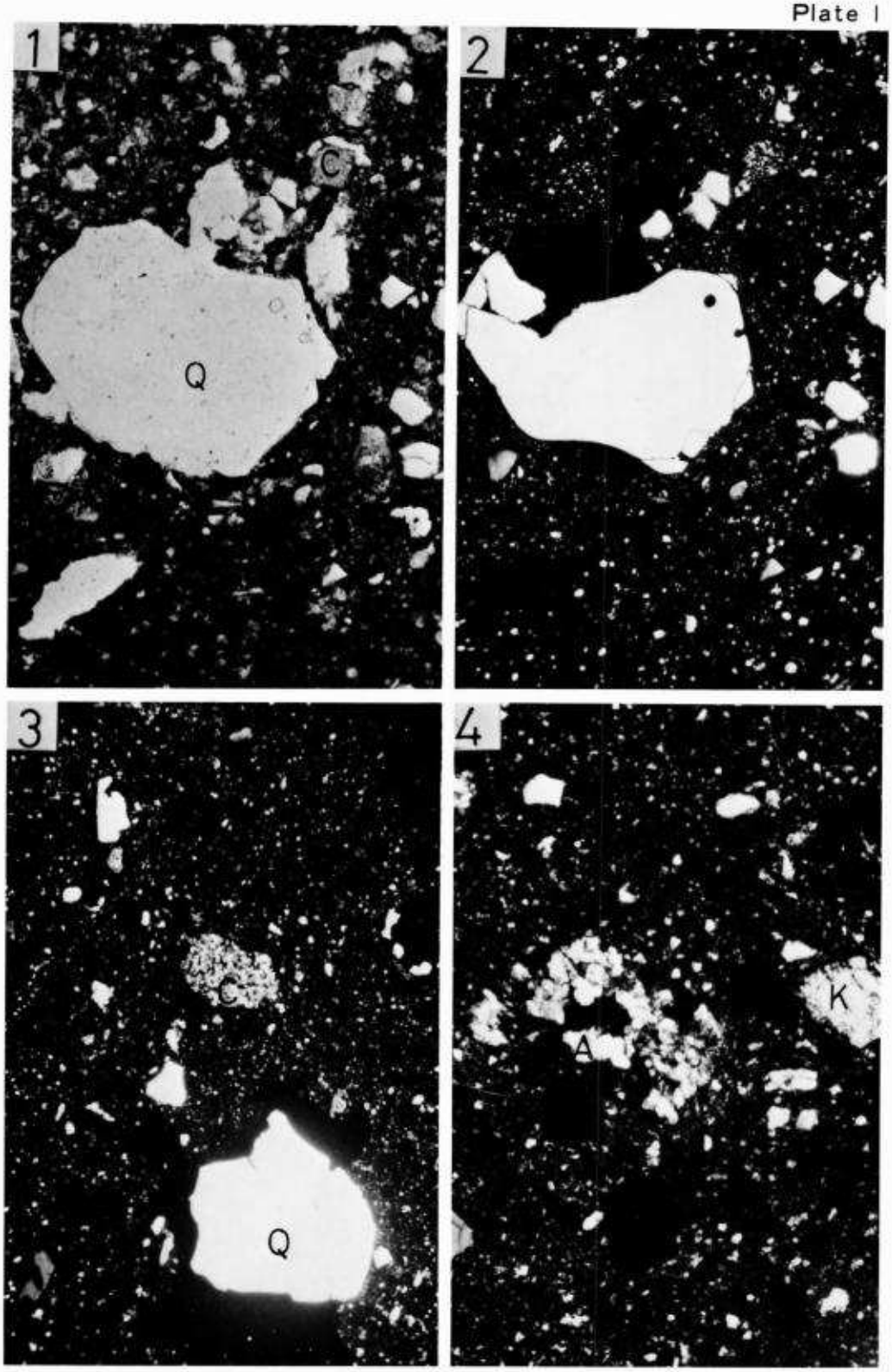
同上遠景

（Ｂｉ71）小土壙

第12図　土壙

水沢地区関連胎土分析資料

顕微鏡写真（図版）



No.1．須恵器(坏)、出土地：盛岡市、太田方八丁

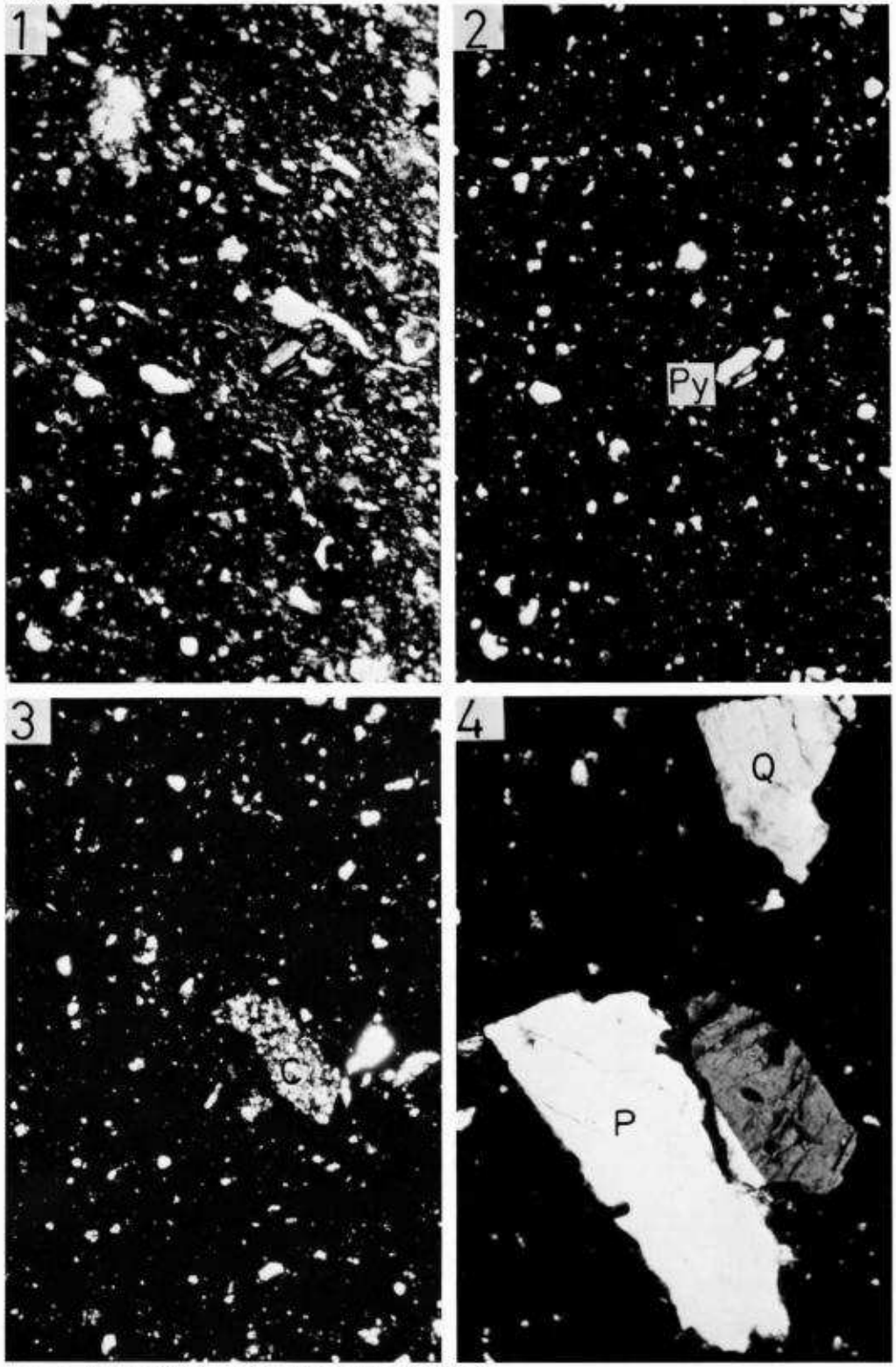
1：多量の石英と、斜長石・カリ長石結晶破片のほかにチャート岩片を含む。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：チャート岩片。(直交ニコル)

4：アプライト岩片。(直交ニコル)

Plate 2



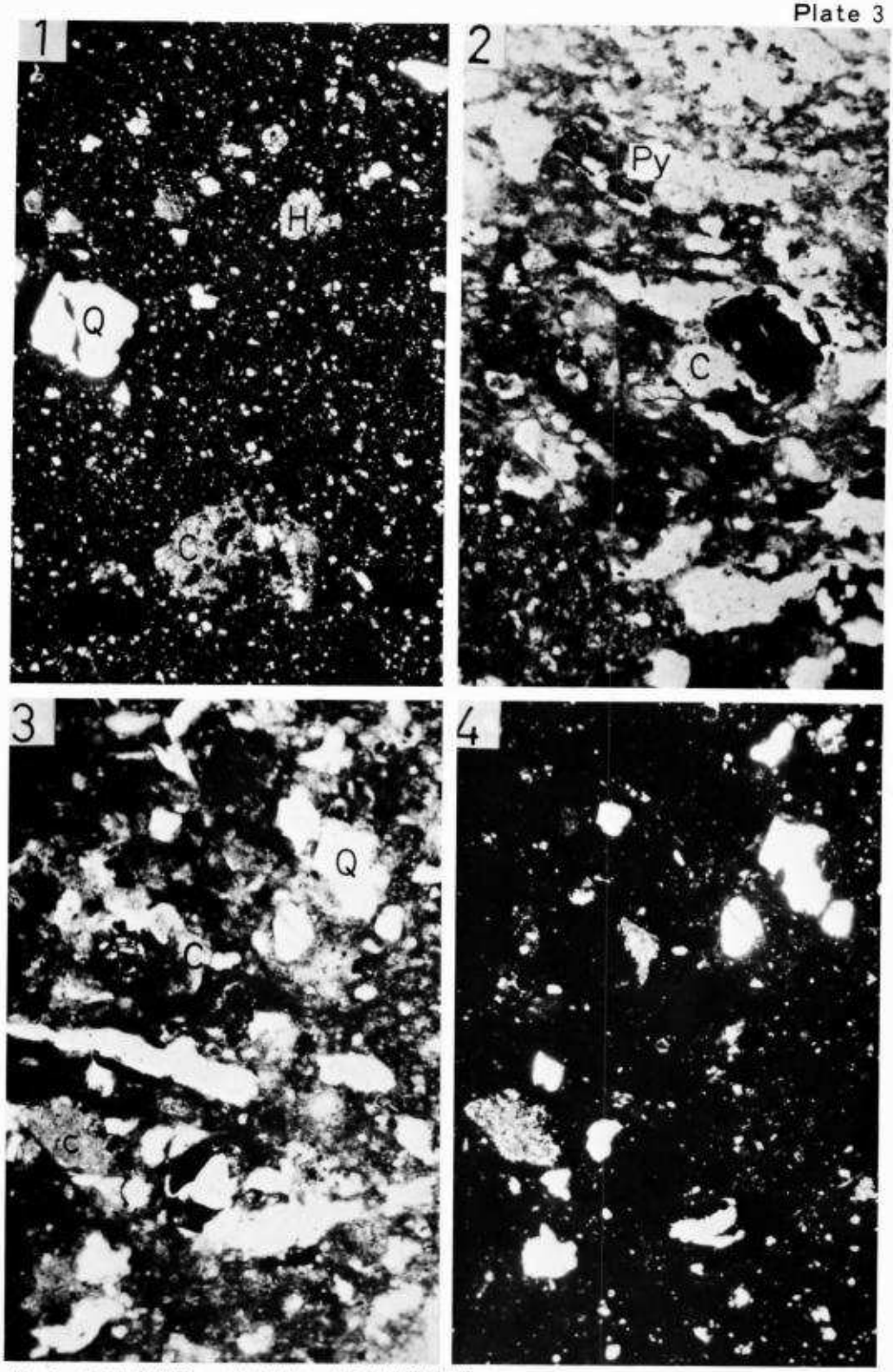
No.3. 須恵器(坏)、出土地：江刺市瀬谷子

1：石英・斜長石の破片結晶と斜方輝石の柱状結晶より構成される。
斜方輝石は鉄鉱質の反応縁を持つことが多い。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：チャート岩片。(直交ニコル)

4：カールスバト双晶を示す斜長石と石英の破片結晶。(直交ニコル)



No. 2. 須恵器(坏)、出土地：水沢市胆沢城

1：多量の石英(一部に高温石英)と長石類の破片結晶及びチャート・ホルンフェルス岩片を含む。(直交ニコル)

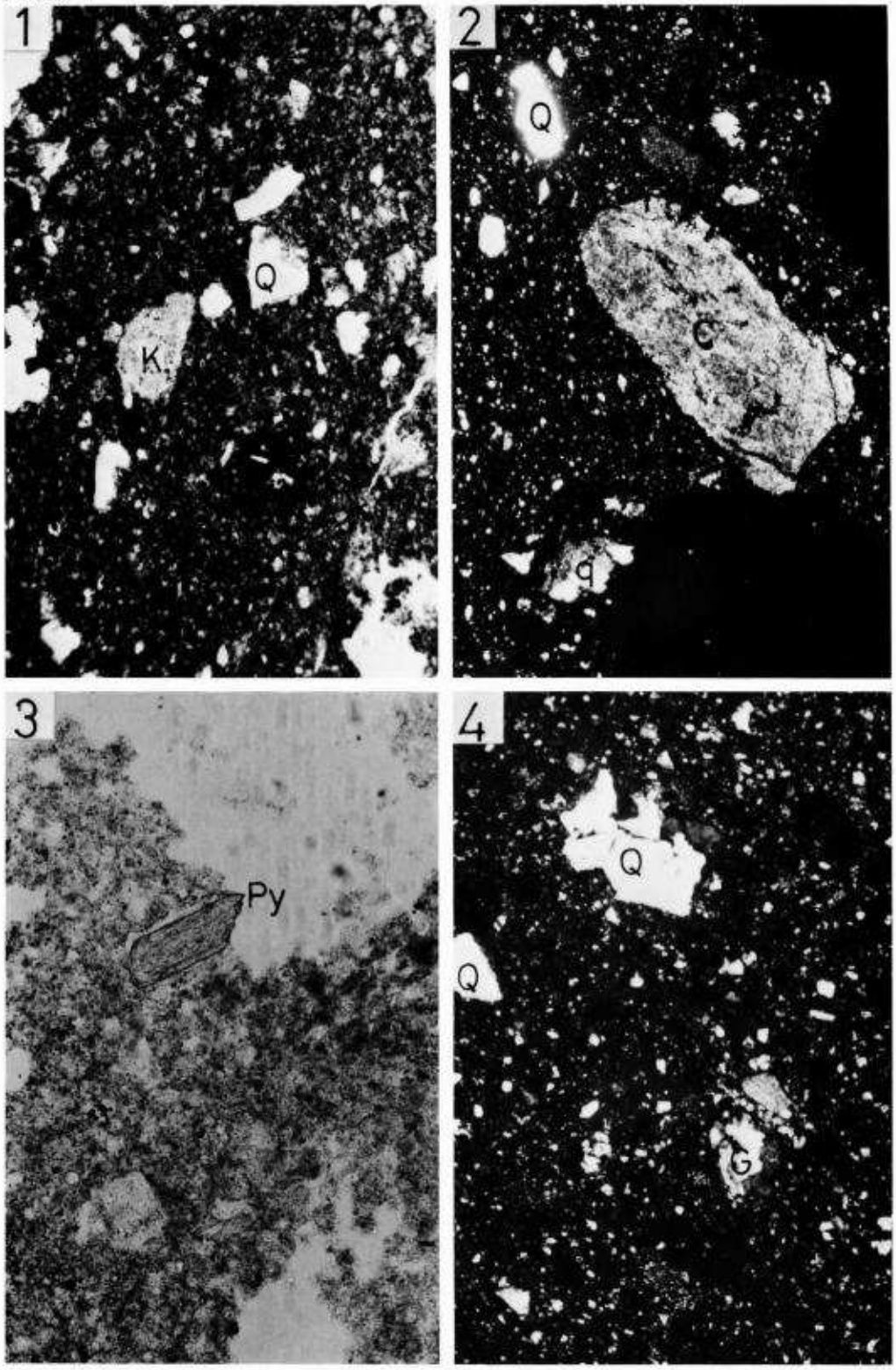
No. 4. 須恵器(坏)、出土地：北上市藤沢

2：石英と少量の長石類の破片結晶、及び多量のチャート岩片より構成される。柱状の斜方輝石が見られる。(平行ニコル)

3：同上。(平行ニコル)

4：同上。(直交ニコル)

Plate 4



No.5. 須恵器(坏)、出土地：紫波町杉の上

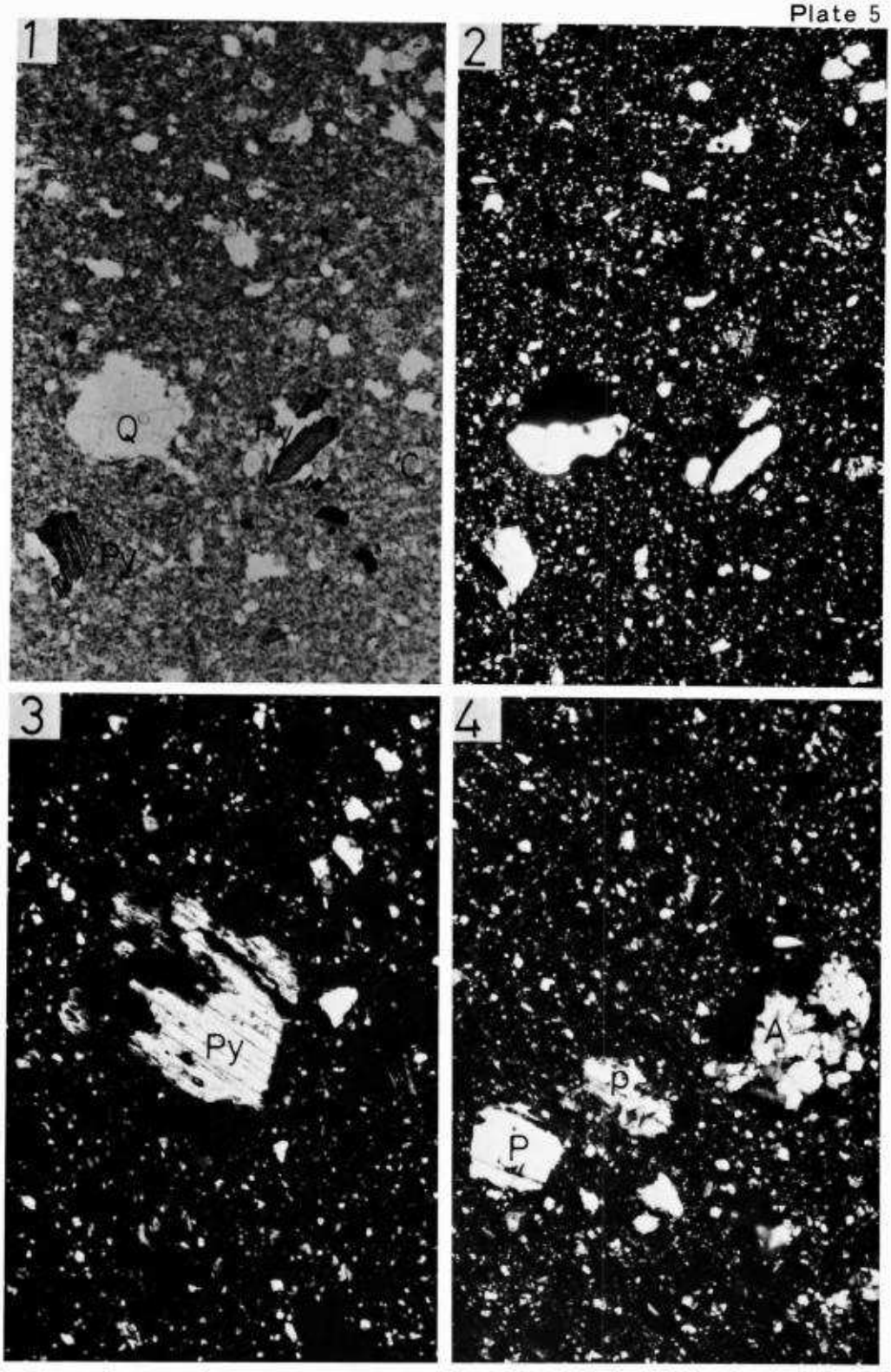
1：多くの石英と、長石類の破片結晶より構成される。長石類はかなり変質している。(平行ニコル)

2：大小の多くのチャート岩片と珪岩の破片がみられる。(直交ニコル)

No.9. 須恵器(坏)、出土地：水沢市石田

3：普通輝石の自形柱状結晶。ローム起源。(平行ニコル)

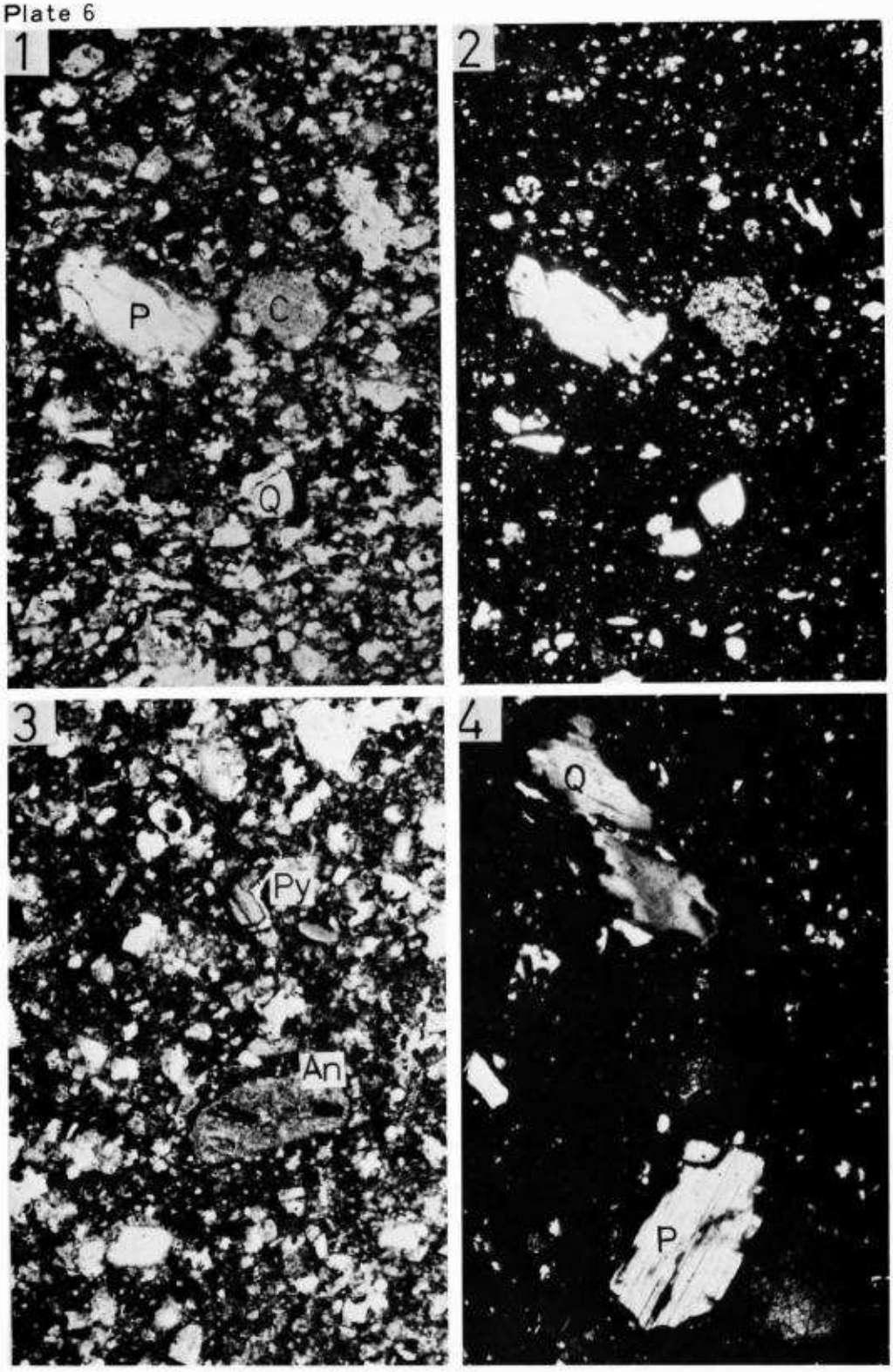
4：石英・斜長石の破片状結晶の他に、チャート・花崗斑岩などの岩片から構成される。(直交ニコル)



No. 6．須恵器(坏)、出土地：水沢市見分森

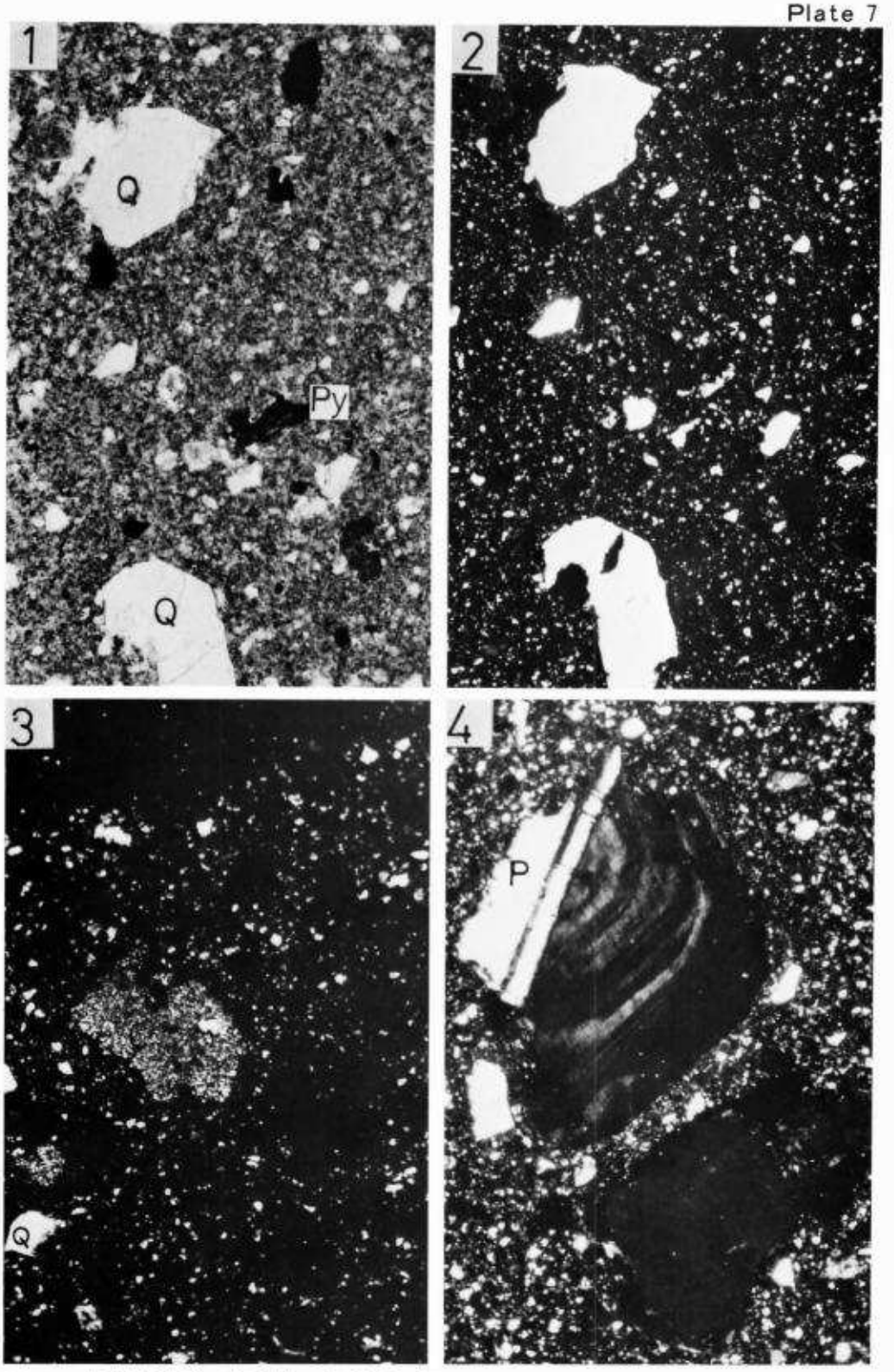
1：石英・斜長石の破片結晶と自形の斜方輝石より構成される。(平行ニコル)
2：同上。(直交ニコル)
3：斜方輝石。(直交ニコル)
4：アプライト岩。(直交ニコル)

Plate 6



No. 7. 須恵器(坏)、出土地：水沢市南矢中

1：石英・斜長石の破片結晶とチャート岩片がみられる。(平行ニコル)
2：同上。(直交ニコル)
3：まれにガラス質安山岩岩片を含む。(平行ニコル)
4：波動消光を示す花崗岩起源の石英とアルバイト双晶を示す斜長石。(直交ニコル)



No.8. 須恵器(坏)、出土地：水沢市石田

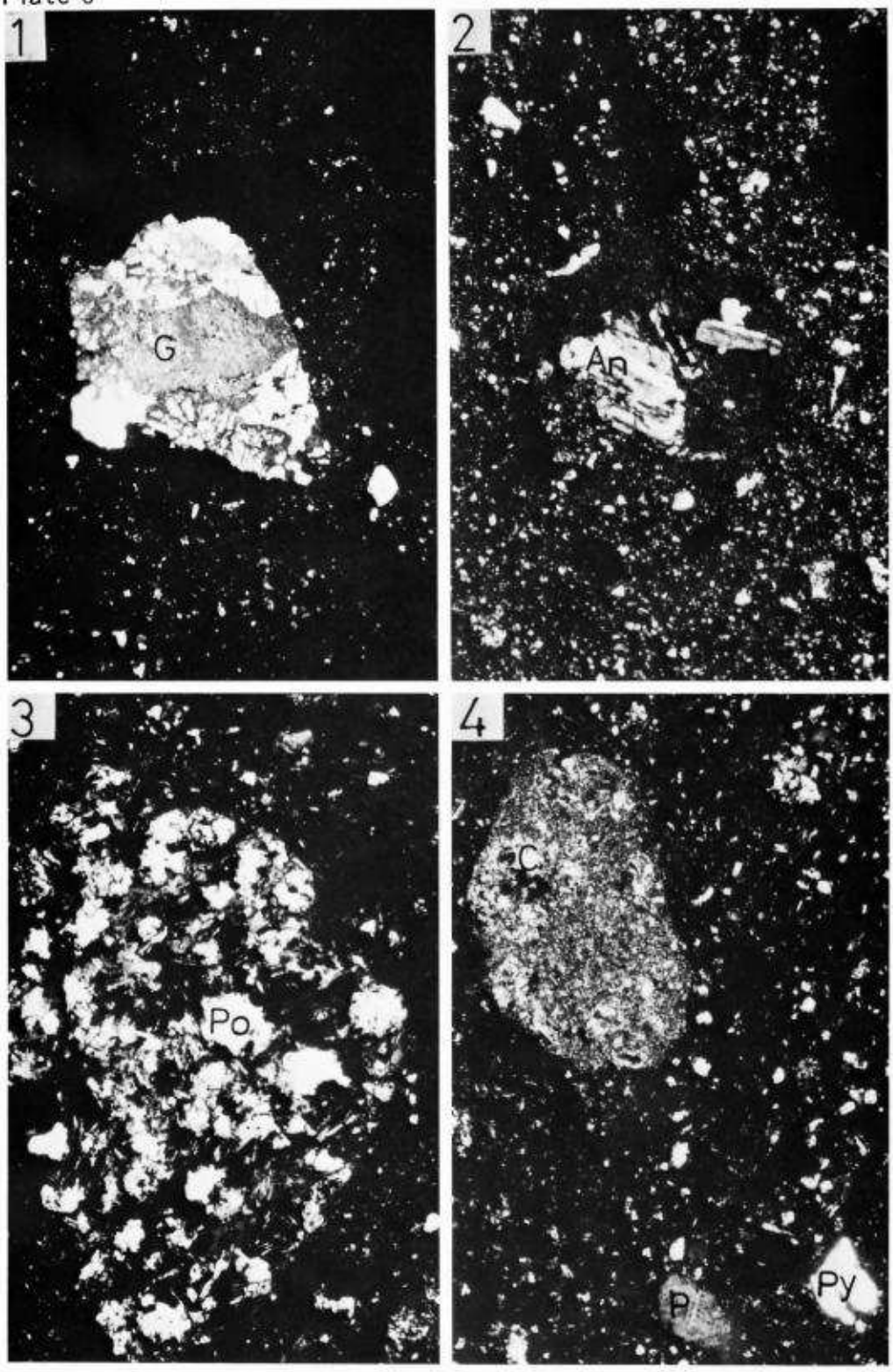
1：石英・斜長石の破片結晶と少量の斜方輝石などから構成されている。鉄鉱(黒色)がかなり含まれる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：チャート岩片。(直交ニコル)

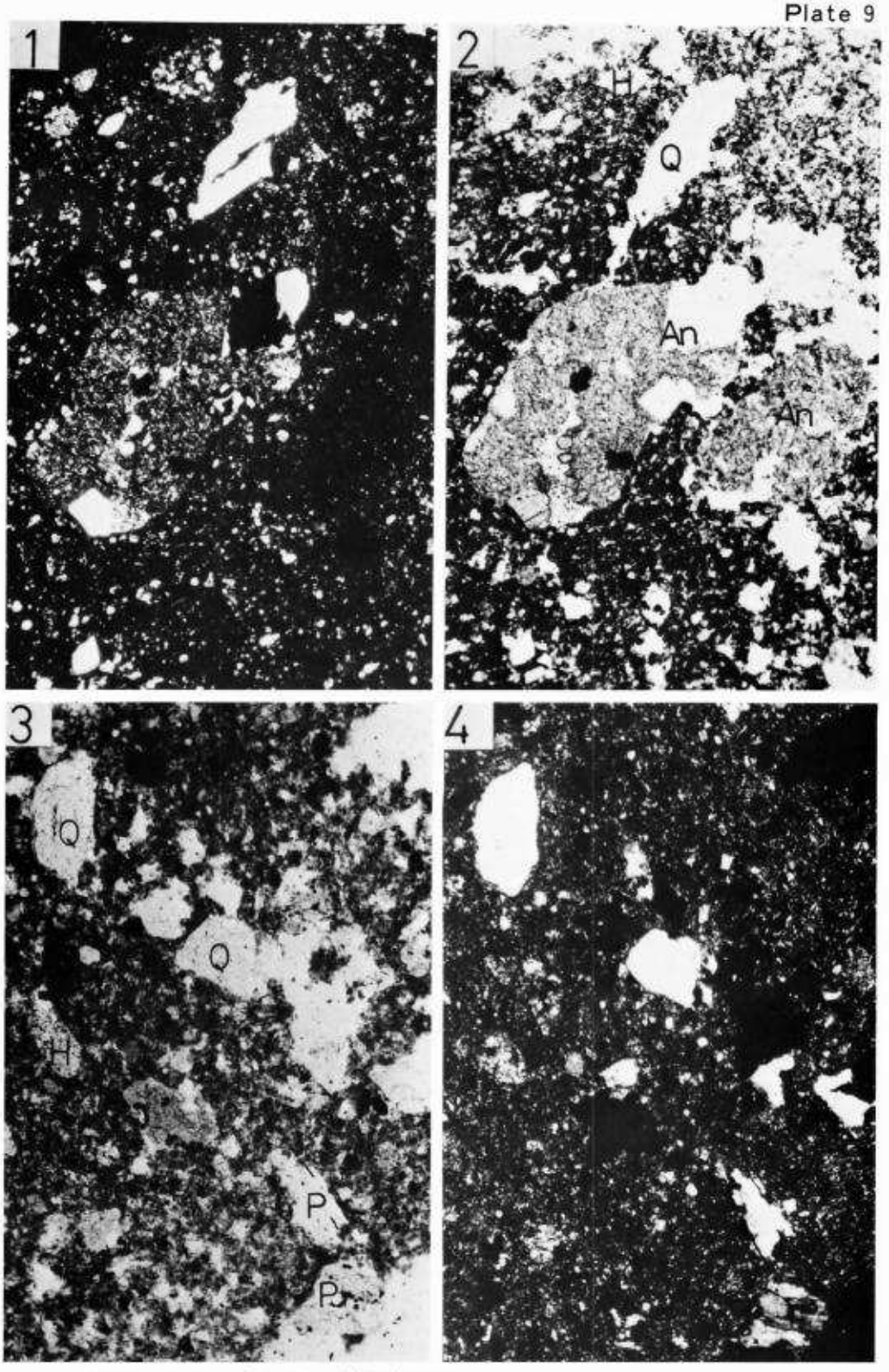
4：累帯構造を呈する斜長石と石英(消光している)。(直交ニコル)

Plate 8



No.10. 江別式土器、出土地：水沢市石田

1：文象斑岩、石英とカリ長石のみごとな微文象構造を示す。(直交ニコル)
2：輝石安山岩、斜長石の斑晶が多く、石基は針状の長石の結晶からなる。(直交ニコル)
3：石英玢岩。(直交ニコル)
4：石英・斜長石・斜方輝石の他、チャート・ホルンフェルスの岩片が多い。(直交ニコル)



No.10. 江別式土器、出土地：水沢市石田

1：斜方輝石安山岩。(直交ニコル)

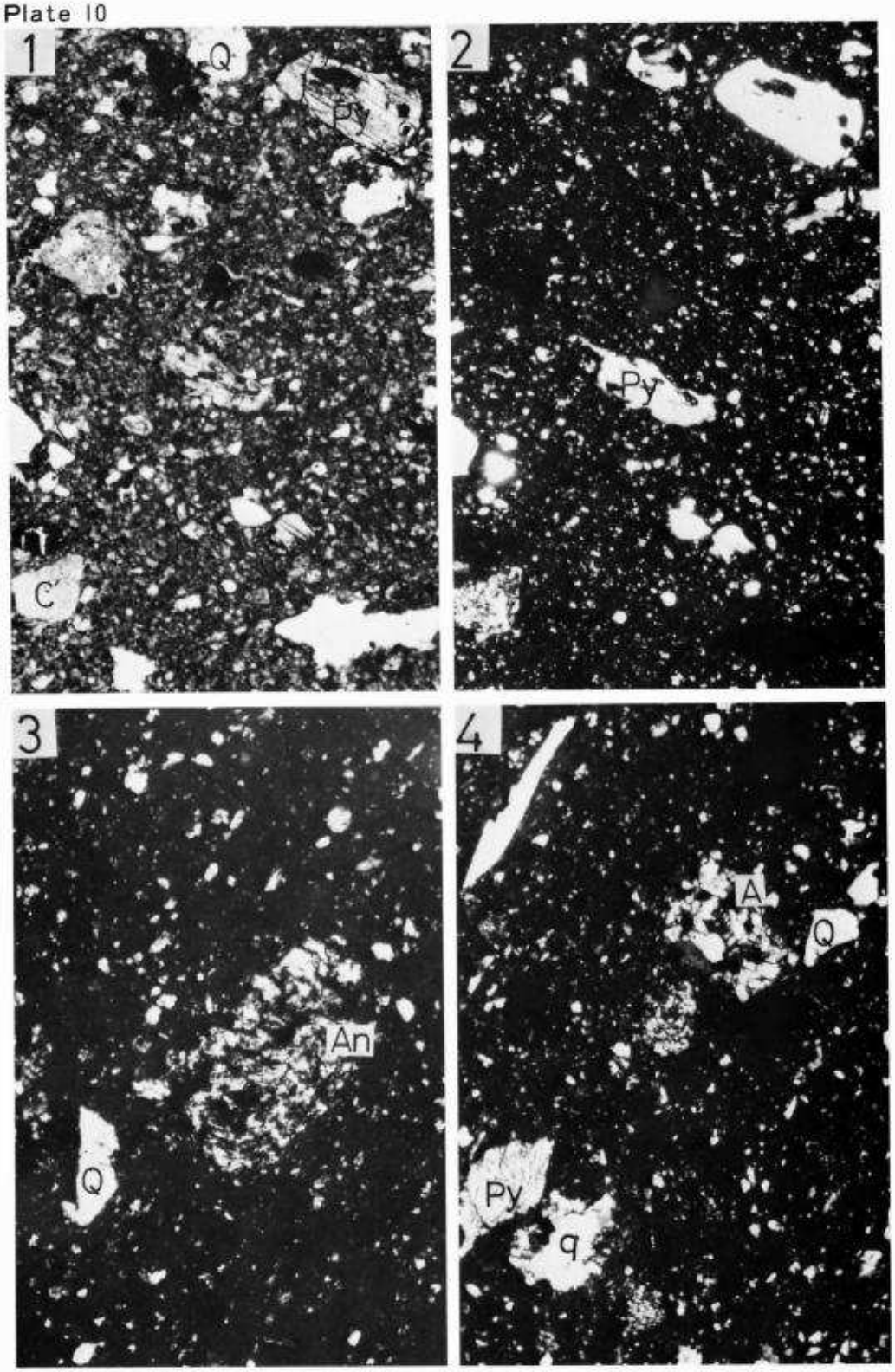
2：同上。(平行ニコル)

No.12. 土師器(甕？)、出土地：水沢市西大畑

3：花崗岩起源の石英・斜長石の破片結晶とチャート・ホルンフェルスなどの破片からなる。

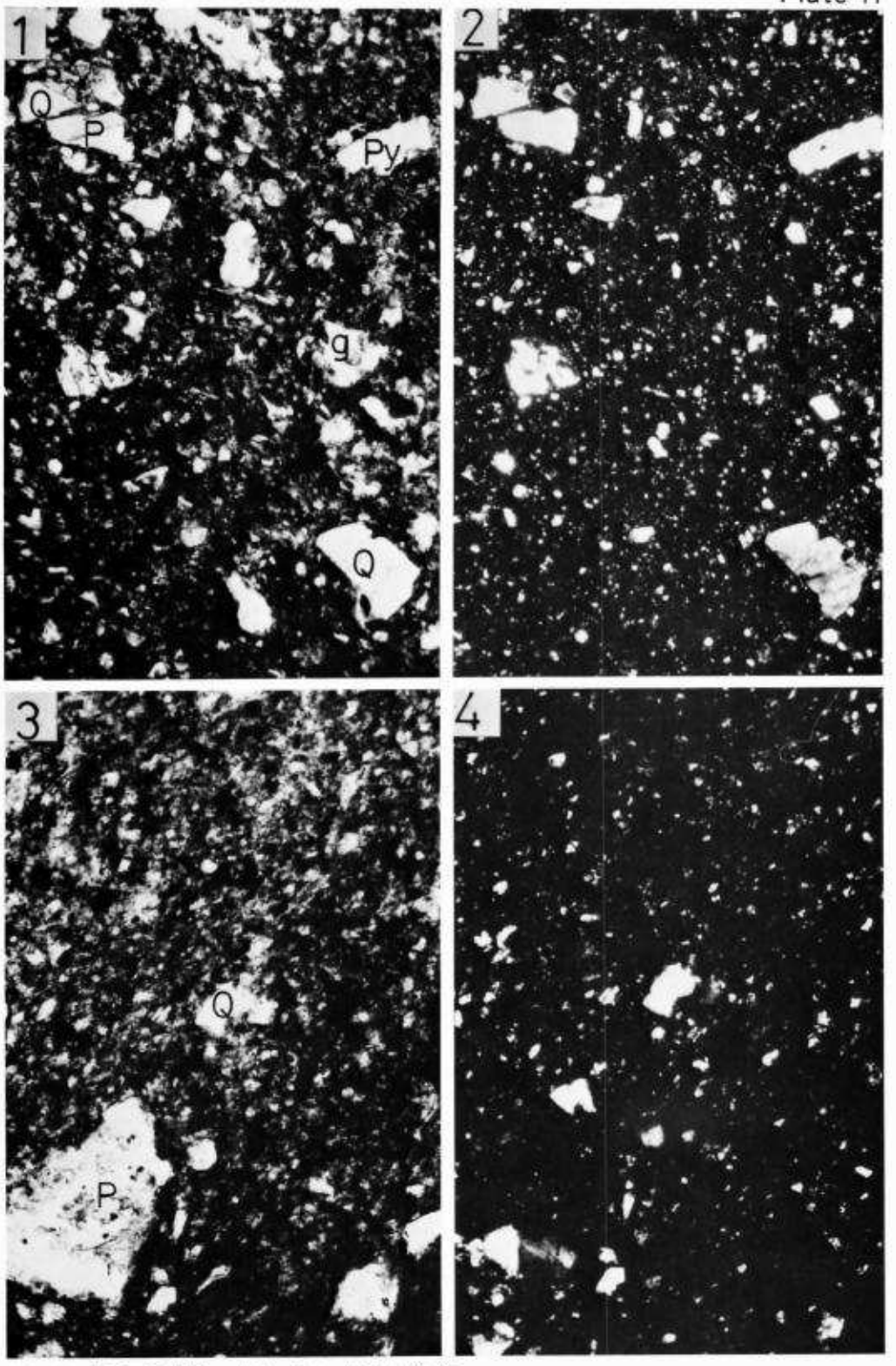
4：同上。(直交ニコル)　(平行ニコル)

Plate 10



No.11. 須恵器(甕)、出土地：水沢市西大畑

1：石英・斜長石・斜方輝石のほかにチャート・ホルンフェルスなどの岩片を含む。(平行ニコル)
2：同上。(直交ニコル)
3：輝石安山岩(直交ニコル)
4：珪岩及びアプライト岩片。(直交ニコル)



No.13. 須恵器(甕)、出土地：水沢市今泉

1：石英・斜長石・斜方輝石・単斜輝石の結晶片とチャート・珪岩などの岩片から構成される。火山ガラスを多く含む。(平行ニコル)

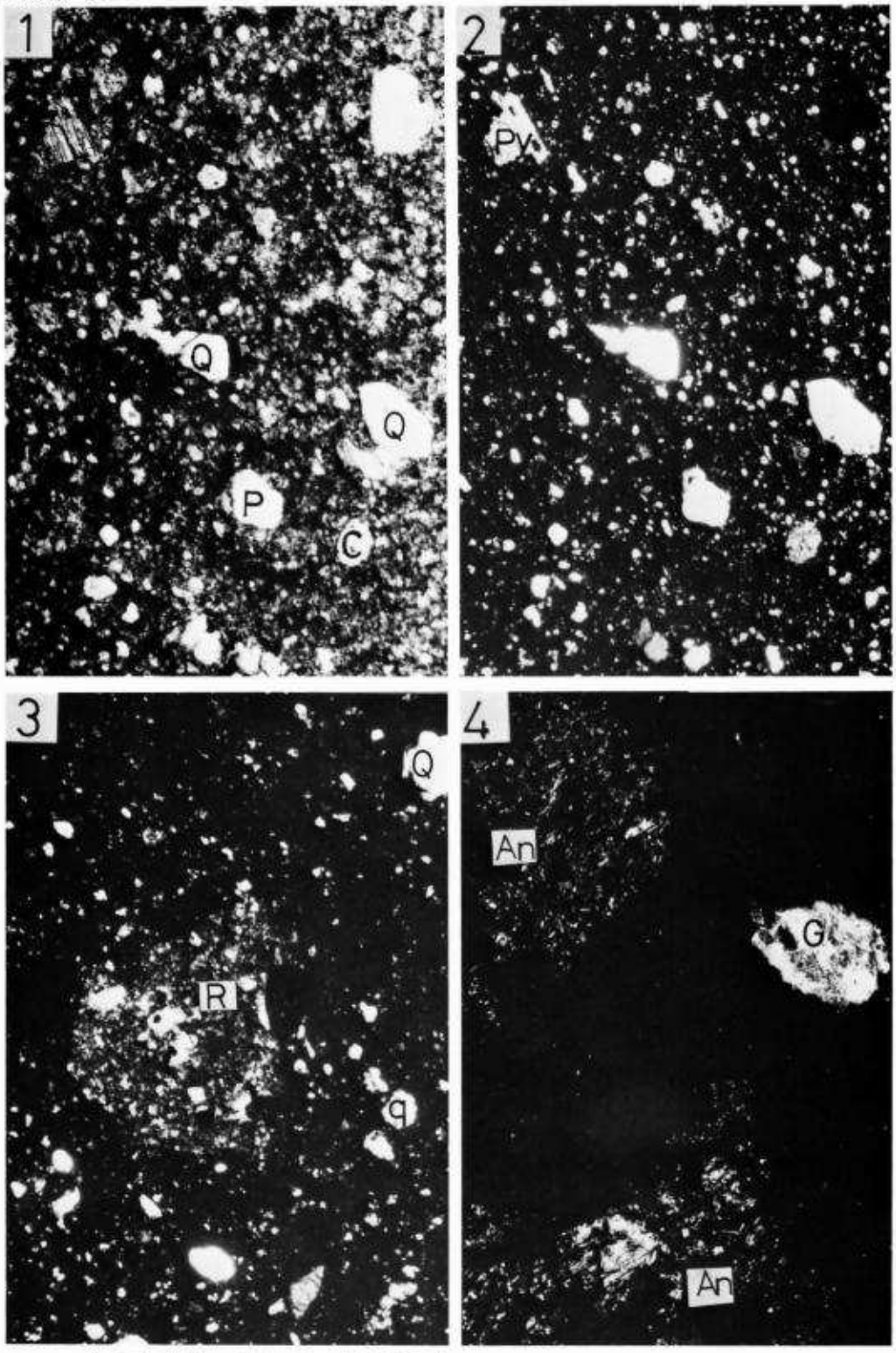
2：同上。（直交ニコル）

No.14. 土師器(坏)、出土地：水沢市今泉

3：石英・斜長石の細やかな破片結晶より構成される。岩片としてチャートが含まれる。

4：同上。(直交ニコル)　　(平行ニコル)

Plate 12



No.15. 須恵器(甕)、出土地：水沢市今泉

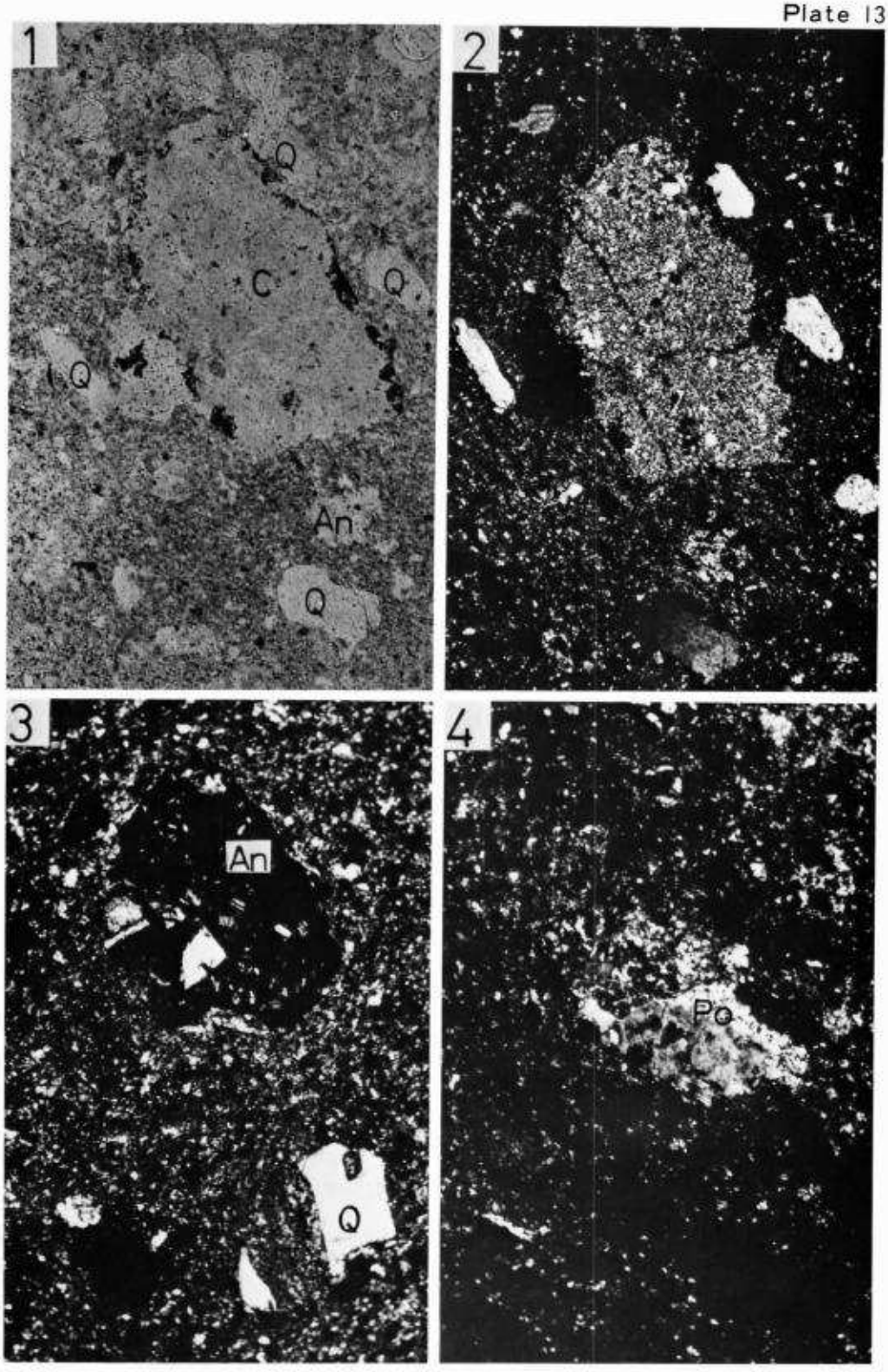
1：石英・斜長石・斜方輝石の破片結晶とチャート岩片より構成される。少量のリン灰石も含まれる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：流紋岩(?)岩片。(直交ニコル)

No.19. 土師器？(坏)、出土地：金ヶ崎町西根

4：多量の輝石安山岩及び花崗岩片を含む。(直交ニコル)



No.16. 土師器？(甕)、出土地：金ヶ崎町鳥ノ海A

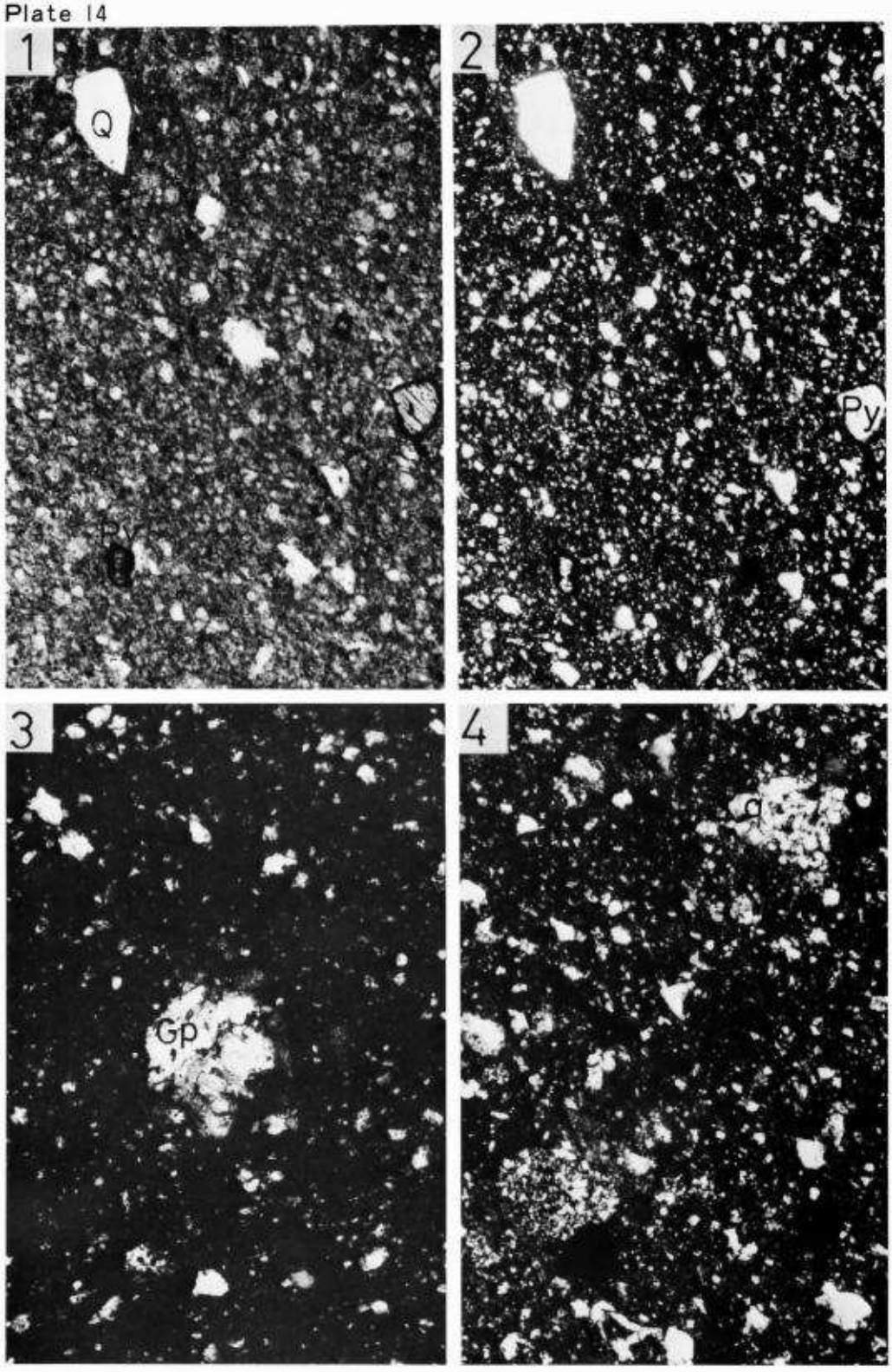
1：石英・斜長石の破片結晶とチャート・安山岩などの岩片からなる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：ガラス質安山岩、脱ガラス化は全くみられない。(直交ニコル)

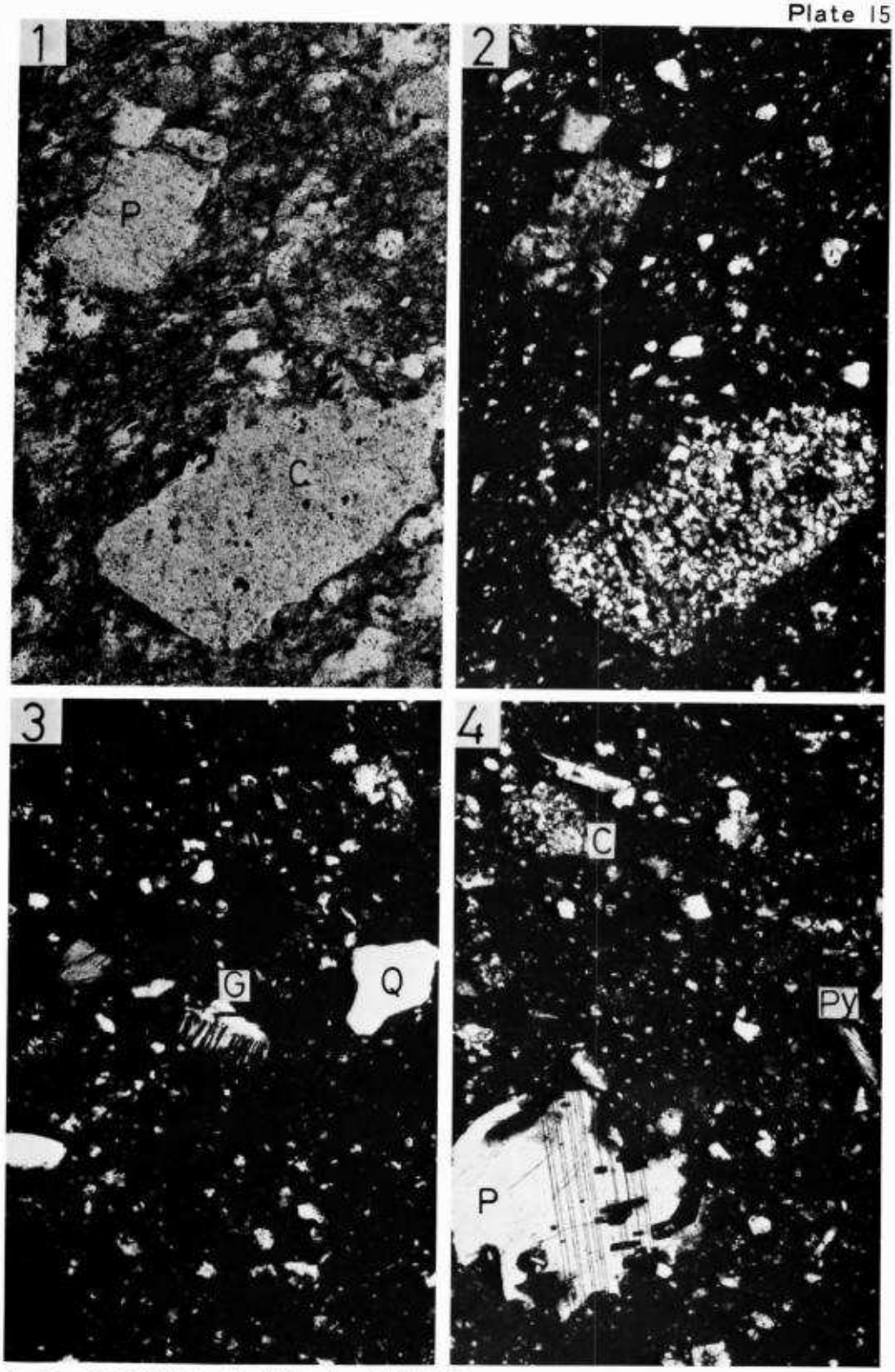
4：玢岩。(直交ニコル)

Plate 14



No.17. 須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町鳥ノ海B

1：石英・斜長石・斜方輝石の結晶の破片が多い。斜方輝石は鉄鉱の反応縁を有する。(平行ニコル)
2：同上。(直交ニコル)
3：花崗斑岩の岩片。(直交ニコル)
4：チャート及び珪岩の岩片。(直交ニコル)



No.18. 須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町西根

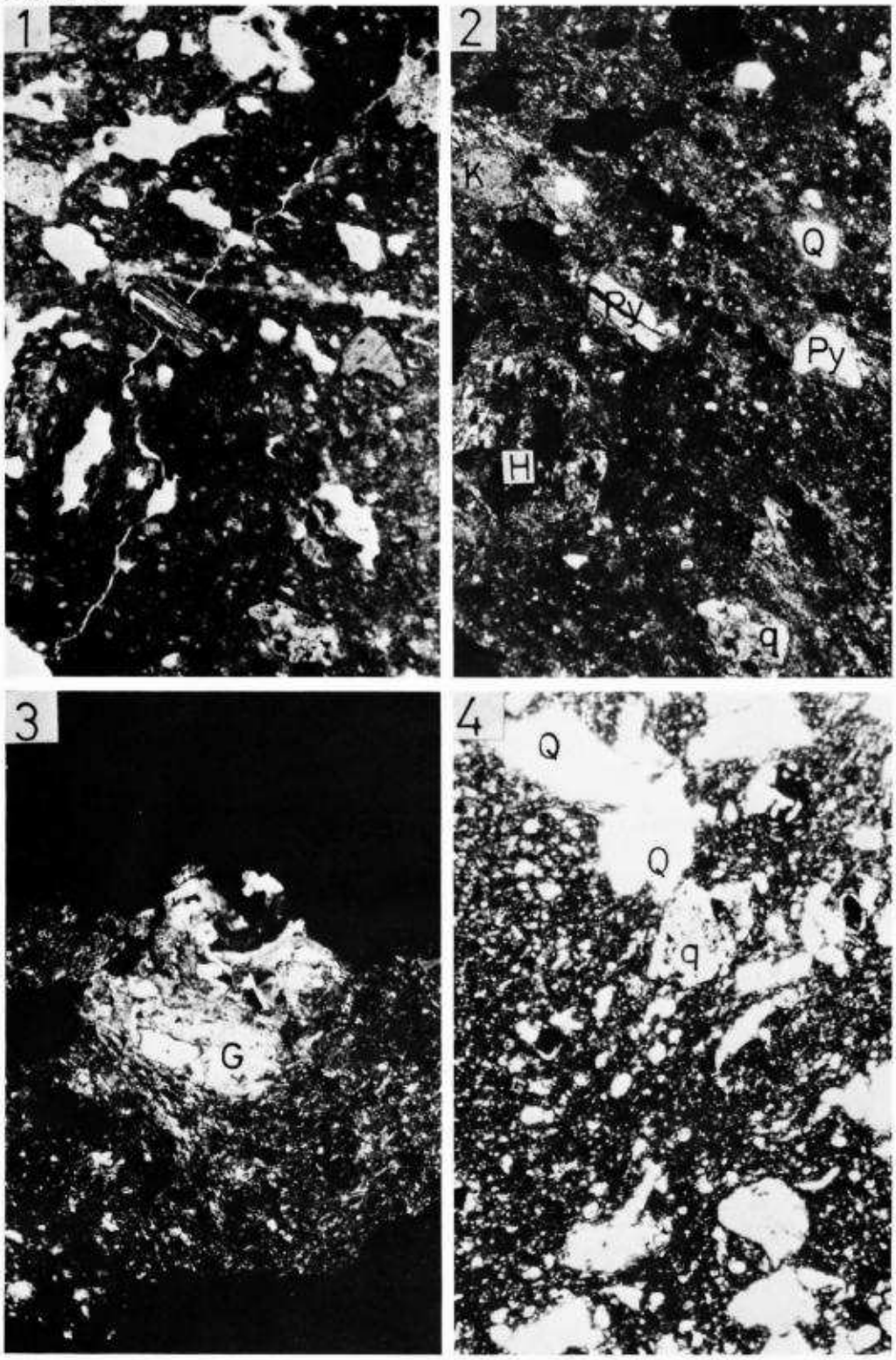
1：石英・斜長石・斜方輝石の結晶片やチャート・珪岩・花崗斑岩などの岩片より構成される。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：微文象構造のみられる花崗斑岩の岩片、花崗岩起源の波動消光を示す石英も含まれる。

4：溶融形を示す斜長石及び柱状の斜方輝石。(直交ニコル)(直行ニコル)

Plate 16



No.20. 土師器(坏)、出土地：金ヶ崎町上餅田

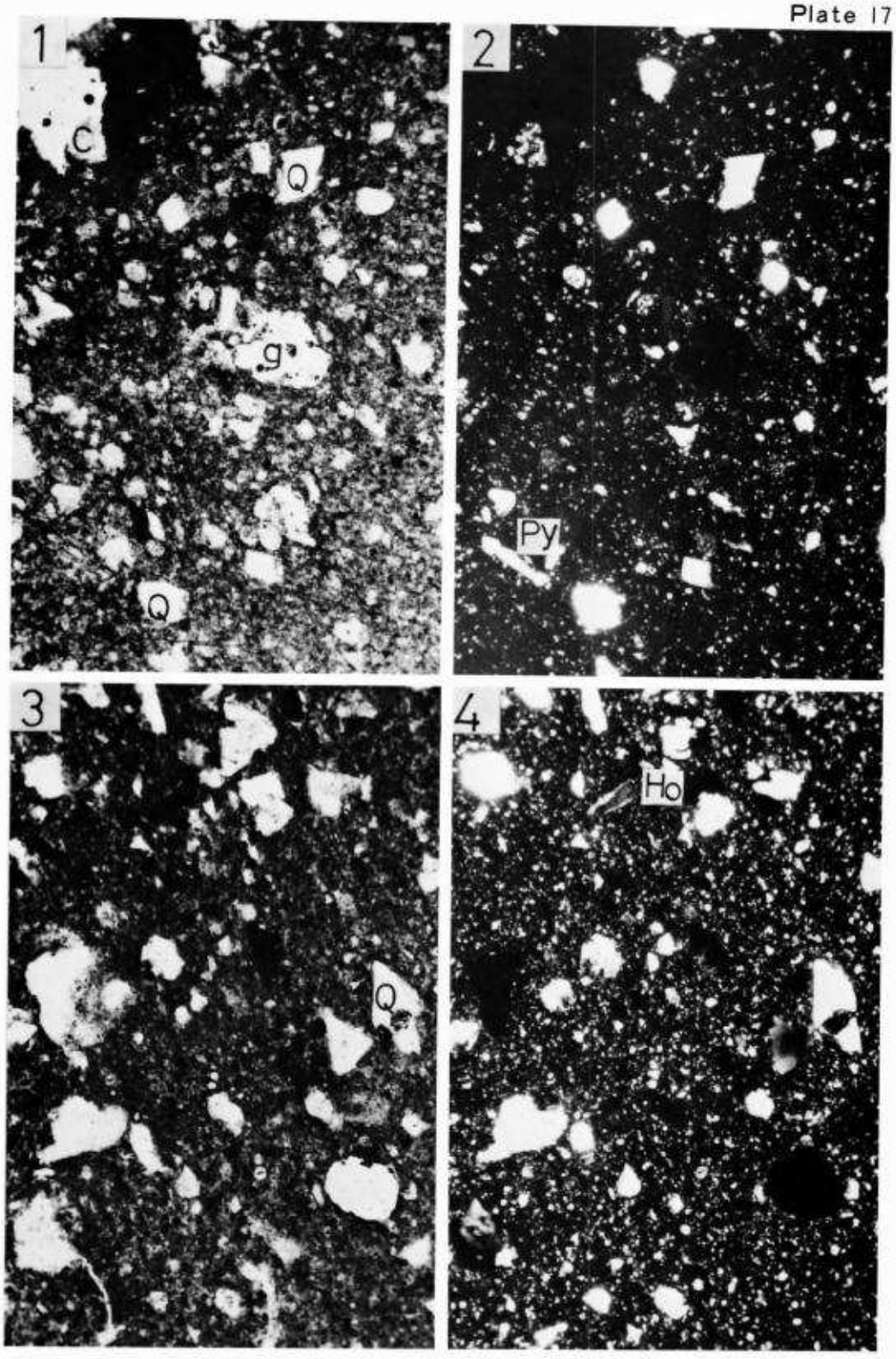
1：石英・長石のほか、火山灰起源の自形の斜方輝石がみられる。チャート・ホルンフェルス・珪岩・花崗岩の岩片も共に認められる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：花崗岩質岩片。(直交ニコル)

No.21. 須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町上餅田

4：多量の石英と、斜長石の破片及び珪岩の岩片がみられる。(平行ニコル)



No.22. 須恵器(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

1：石英・斜長石・輝石の結晶のほかに、チャートの岩片が多くみられる。火山ガラスも散点している。(平行ニコル)

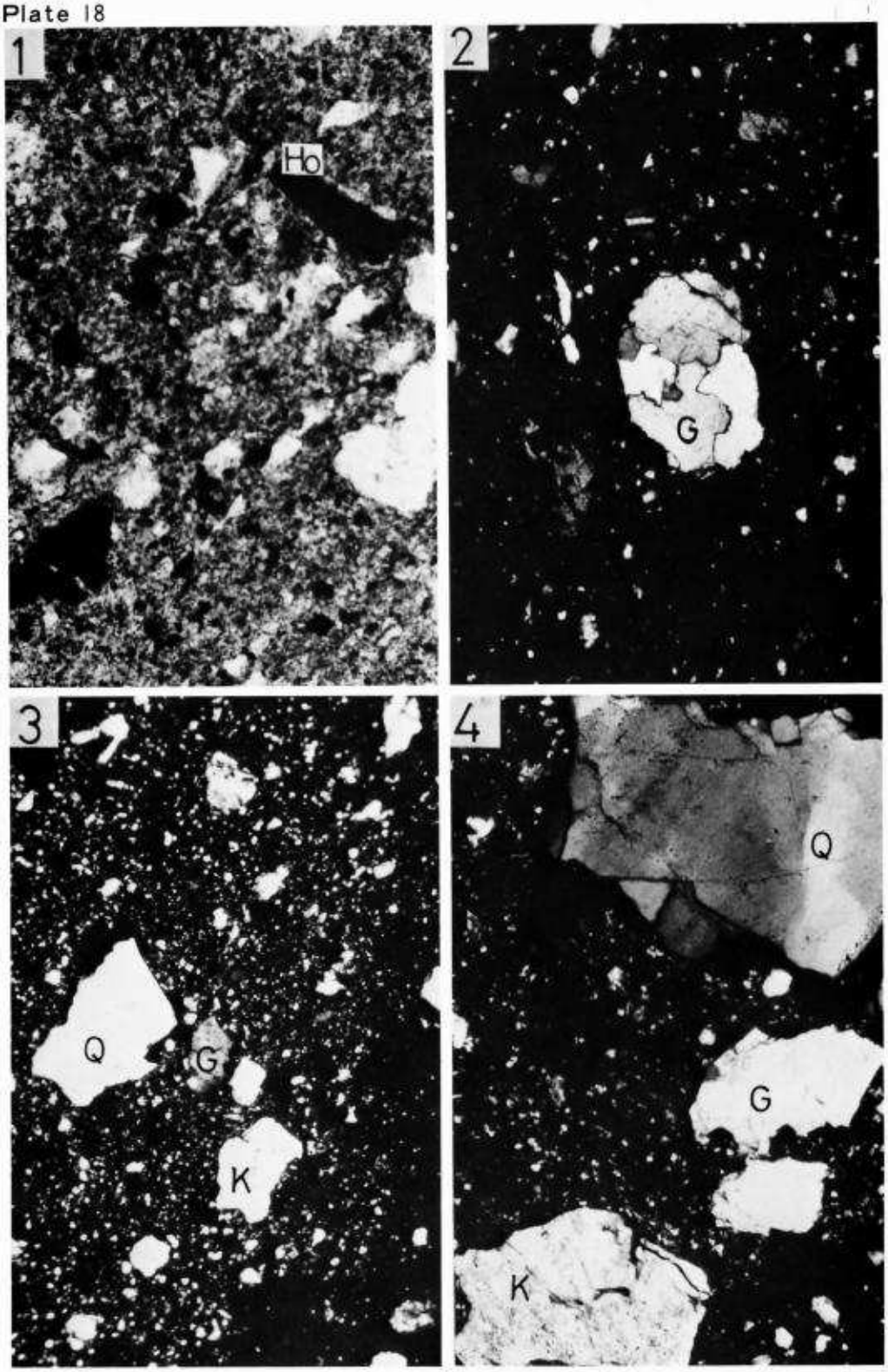
2：同上。(直交ニコル)

No.23. 土師器？(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

3：石英・長石・角閃石・黒雲母などから構成される。ほとんどの結晶が破片状である。(平行ニコル)

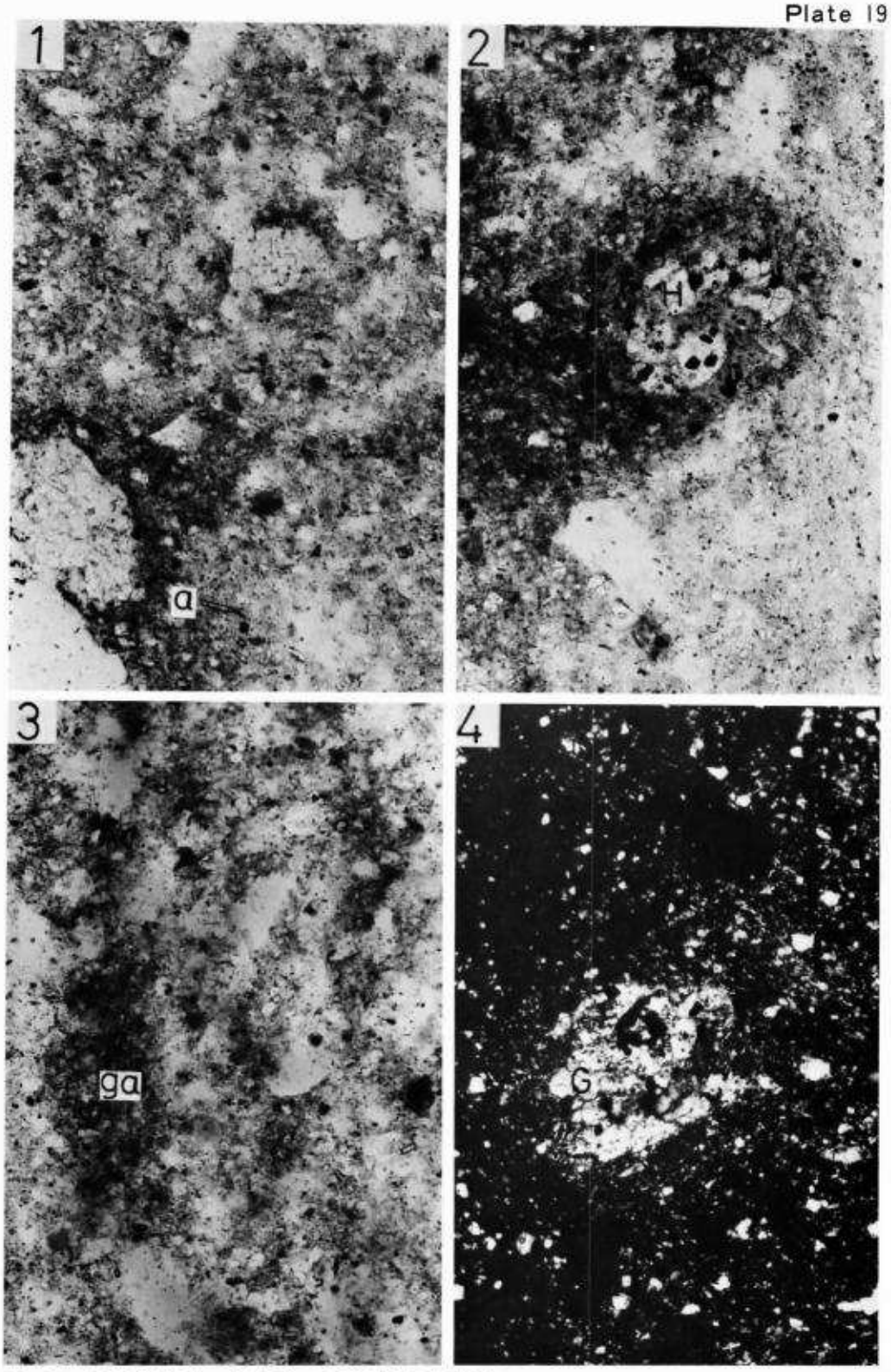
4：同上。(直交ニコル)

Plate 18



No.23. 土師器？(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

1：角閃石の柱状結晶。基質には微小な鉄鉱やジルコンなどがみられる。(平行ニコル)
2：花崗岩岩片。(直交ニコル)
3：花崗岩岩片と石英及びカリ長石の破片状結晶。(直交ニコル)
4：3を拡大。石英は波動消光を示し、カリ長石はかなり変質している。両者は花崗岩が源岩である。(直交ニコル)



No.24. 土師器(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

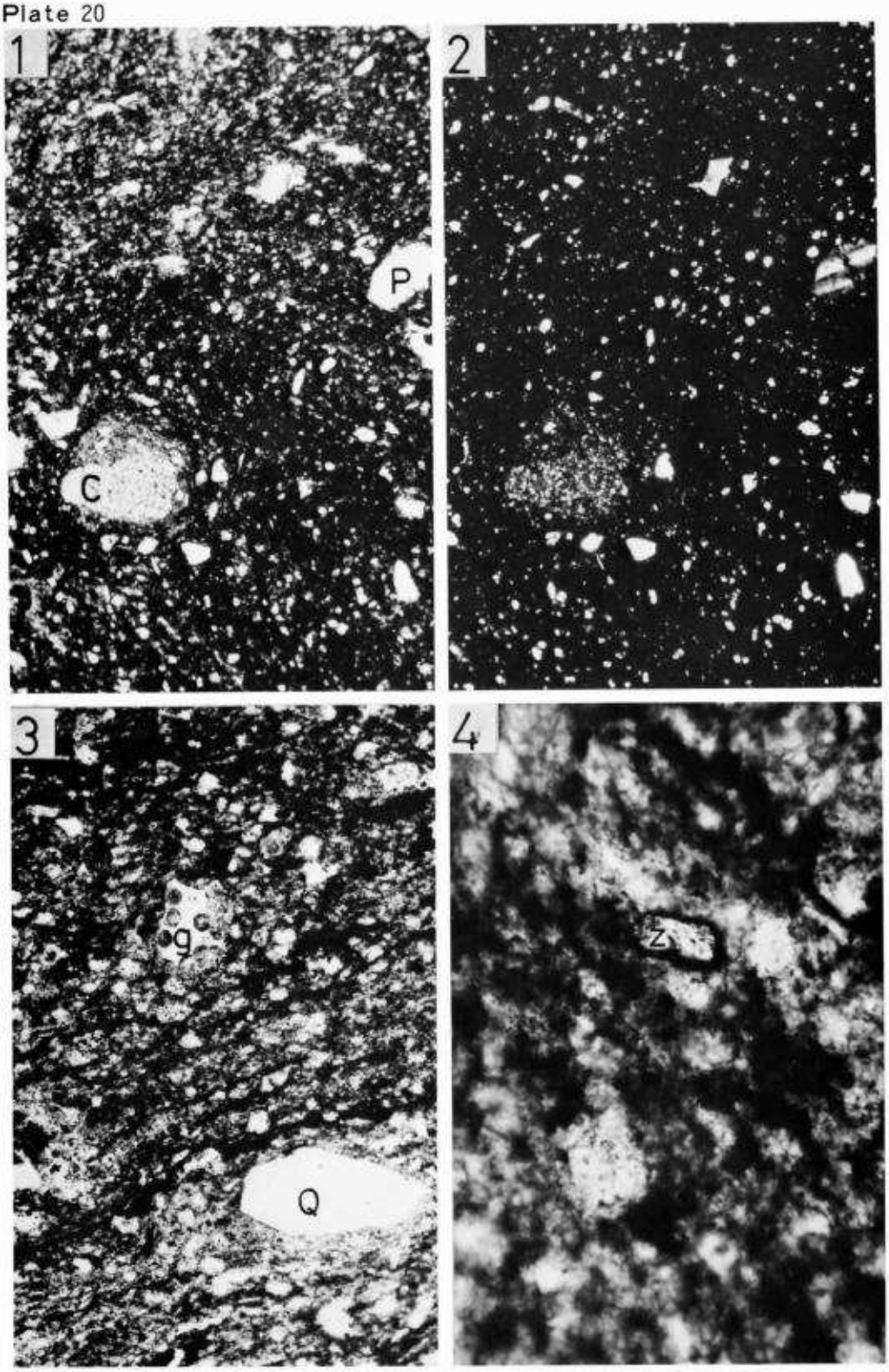
1：石英の破片状結晶を主とし、少量の斜長石を伴なう。さらに微小なザクロ石・リン灰石・ジルコンなどの自形結晶が認められる。
岩片としては、チャート・ホルンフェルス・花崗岩などの岩片がみられる。(平行ニコル)

2：ホルンフェルス岩片。(平行ニコル)

3：粒状で高い屈折率を呈しているのがザクロ石、柱状のものが主にジルコンとリン灰石である。(平行ニコル)

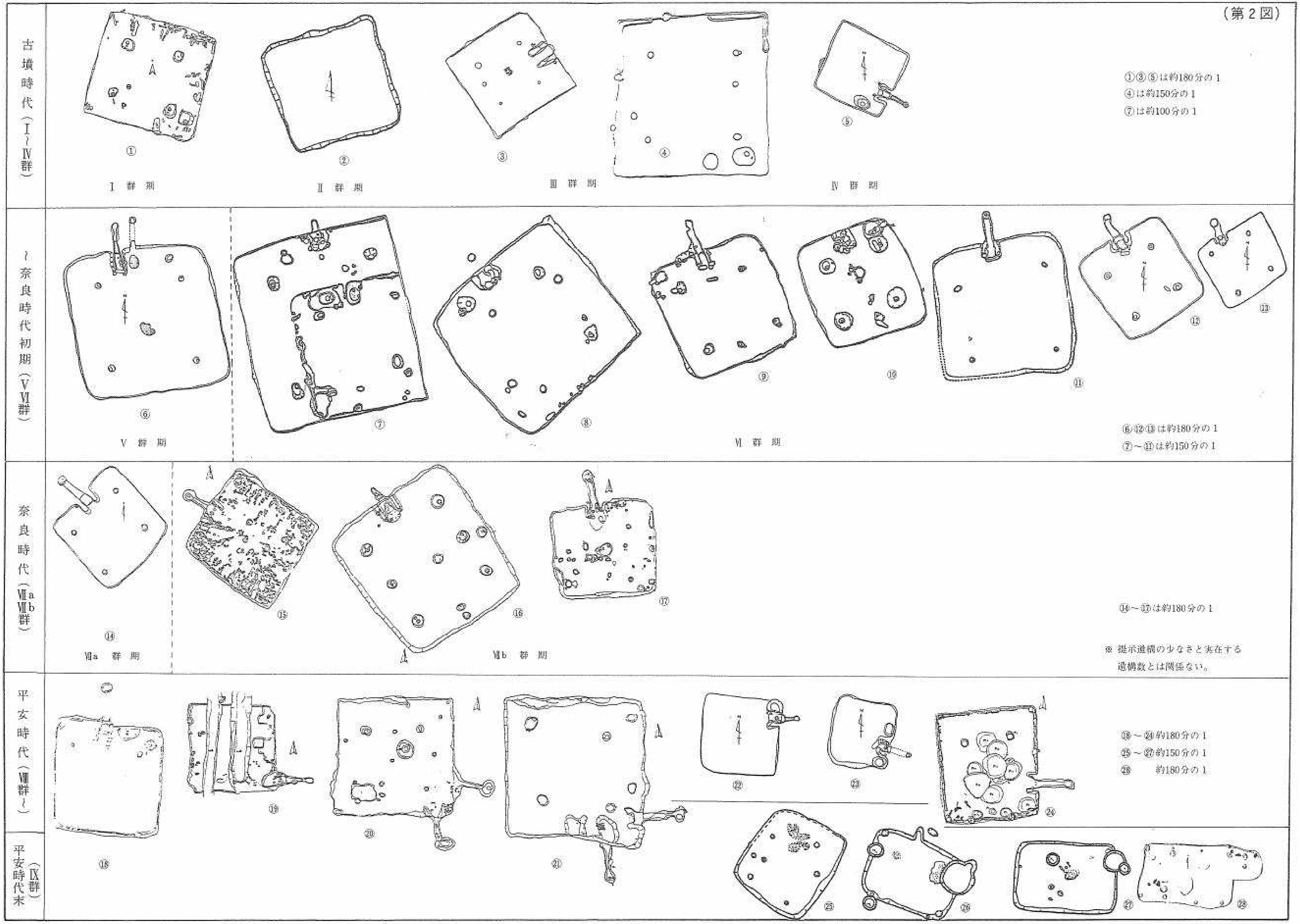
4：花崗岩片、かなり変質している。(直交ニコル)

Plate 20



No.25. 須恵器(坏)、出土地：水沢市袖谷地

1：石英・斜長石の鉱物破片とチャート岩片を含む。(平行ニコル)
2：同上。(直交ニコル)
3：多孔質の火山ガラスがみられる。脱ガラス化をしておらず新鮮である。(平行ニコル)
4：ジルコンの柱状結晶。無色。円磨されていない。(直交ニコル)


（第2図）
古墳時代（Ⅰ～Ⅳ群）
Ⅰ 群 期
Ⅱ 群 期
Ⅲ 群 期
Ⅳ 群 期
①③⑤は約180分の1
④は約150分の1
⑦は約100分の1
～奈良時代初期（Ⅴ Ⅵ群）
Ⅴ 群 期
Ⅵ 群 期
⑥⑫⑬は約180分の1
⑦～⑪は約150分の1
奈良時代（Ⅶa Ⅶb群）
Ⅶa 群 期
Ⅶb 群 期
⑭～⑰は約180分の1
※ 提示遺構の少なさと実在する遺構数とは関係ない。
平安時代（Ⅷ群～）
⑱～㉔約180分の1
㉕～㉗約150分の1
㉘ 約180分の1
平安時代末（Ⅸ群）

岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧

（埋蔵文化財関係）

課長	熊谷正男
課長補佐（総務）	鎌田良悦
同（調査）	服部完郎
庶務係長	鈴木康之
主事	鹿糠幸弘
同	佐藤伸一郎
主任文化財主査	嶋千秋
文化財主査	菊地郁雄
技師	佐々木勝

縦貫自動車道調査班

文化財主査	吉田努
同	三上昭
同	斎藤淳
同	昆野靖
同	相原康二
文化財調査員	八重樫良宏
同	狩野敏男
同	田村壮一
主事	石川長喜

臨時職員	本村キエ子
同	桜井芳彦
同	相星輝子
同	高橋生子
同	小西エイ子

臨時職員	漆原悦子
	亀ヶ森恭子
	藤原周子
	後藤裕子
	石田千鶴子
	村井隆
	小林史子
	村上良子
	小林三千江
	菊地純子
	鈴木優子
	赤坂恵子
	秋葉良子
	前田隆子
	田中ヒデ
	黒田あや子
	伊藤ふく
	及川容子
	長坂巽子
	中山久子（6月21日退職）
	佐々木信子（9月30日退職）
	高橋英子（10月16日退職）

岩手県文化財調査報告書60集
東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XI

昭和56年３月31日　発行

発行　岩手県文化財愛護協会
盛岡市内丸１

印刷　株式会社　杜陵印刷
盛岡市厨川四丁目２番21号
電話(0196)41－8000(代)